COBALT-SERIES

天冥の剣 3

ハイウォール・オーラバスター



若木未生

集英社

鎌倉の本家全体が異変に巻き込まれていた。当初からただならぬ事態に気づいていた道者の面々も予測すらしなかったような――まるで竜巻のような騒霊現象。その異変が意味する事の重大さは幽閉中の希沙良にも即座に感じ取れた。――そして、その張本人が冴子と希沙良の前に姿を現した。それも二人で。対峙する男女。斎伽忍と工藤珈織。〝可哀想な伽羅王〟鏡の中で呟く珈織の声が聞こえた。

恋気分いっぱいの夢♥小説誌！

コバルト
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

天冥の剣 3

若木未生

集英社

目次

天冥の剣3
天冥篇
序章　回帰……12
第一章　散光……15
第二章　稲妻……76
第三章　桜舞い……140
『天冥の剣』第三回緊急対談……203



崎谷亮介（さきやりょうすけ）

おとなしく内向的な性格だが、実はとてつもない力を秘めた〈術者〉側の切り札的存在。その中和能力を利用して、忍は九那妃の封印をはかるが断念。代わりに選んだ手段は…。

水沢涼（みずさわりょう）



亮介の親友。戦闘的な〈術力〉と能天気な性格がウリ(?)の〈術者〉。広島へ戻れという忍の命令を無視し、バイトに扮してCBSに出入りするなど、独自の行動をとるが…。



里見十九郎（さとみじゅうきゅうろう）

沈着冷静な参謀型の〈術者〉で、希沙良のフォロー役。「ディアーナ」事件での忍のやり方に強い反発を覚えている。忍が姿を消したという事実を前に彼がとるべき行動は…。

和泉希沙良（いずみきさら）



諒に匹敵する攻撃力を持った〈術者〉のひとり。奔放な性格だが、従兄弟の十九郎以外にはなかなか心を許さない。鎌倉の本家への侵入に失敗し、監禁状態に置かれている。



七瀬冴子（ななせさえこ）

強気が専売特許の美少女で、回復系の能力を持つ〈術者〉。「ディアーナ」事件の標的となった彼女は、忍に鎌倉の本家での謹慎を命じられている。

神原亜衣（かんばらあい）



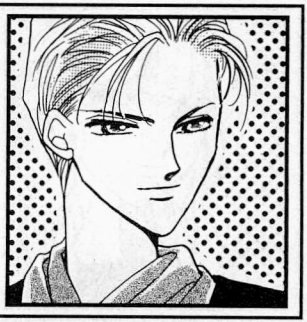
亮介の同級生でGF。〈術者〉ではないが、事情に通じており、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。だんだん「普通の」生活から離れていく亮介の身を案じている。



工藤珈織（くどうかおる）

六本木のテレビ局・CBSの新人レポーター。斎伽忍にまつわる謎をつきとめようと彼を追いかけている。だが、純粋な斎伽の血脈である彼女の正体は…。

鷹木文彦（たかぎふみひこ）



CBS重役の息子であることを利用して、珈織にまとわりつくカメラマン助手の青年。だがその正体は妖者三忌将のひとり〈雷将〉勝呂。忍と凄絶な闘いを繰り広げるが…。



刎司（せんし）

妖者三忌将のひとりで、「ディアーナ」事件の黒幕。亮介たちをあわやのところまで追い詰めたが、忍の前に苦い敗北を味わった。文彦と密会するなど活動を再開し…。

遠野一真（とおのかずま）



斎伽の分家筋の後継者のひとり。幼少時に術力を失った元術者で、〈道者〉という伽羅王の親衛隊ともいうべき存在。〈伽羅王〉の気が消えたという事実を知り…。



牙（きば）

亮介たちが軽井沢で出会った謎の男。実は〈伽羅王〉の側近〈使（つかい）〉である。姿は変幻自在で、忍の命令には絶対服従。〈伽羅王〉のみが携える天冥の剣の正体でもある。

斎伽　忍（さいがしのぶ）



〈術者〉一族の若き総帥で、〈伽羅王〉が転生した現世ただひとりの〈空の者〉。一連の事件の背景を把握しているのは彼だけらしい…。

イラスト／杜　真琴

天冥の剣 3


天冥篇

序章　回帰

初めから、かすかなおそれはあったのだ。
数多くの人と出会い、数多くの証言と論評を集めてゆく、その時間――感じつづけていたのがひとつの畏れでなかったとしたら、それはいったい何だったのだろう？
つきうごかされる思いの裏側に目を覚ましていた感情は、いったい何だったのだろう？
『もうやめちゃいましょうよ、吸血鬼のネタなんて！　命かけてまで調べる相手じゃないですよ！』
必死に制止した鷹木文彦は、ある意味では正しい。
（そうよ……そのとおりよ）
生命の危険をおかしてまでとりくむネタではなかった。吸血鬼のネタなんて。
自分が知りたいのは、もっと別の、奥深いところに隠された、なにかとてつもなく重要な、

切実な、生きているかぎり追いもとめずにいられない、そんな不確かなものの正体。
それはたとえば、自分のまわりに複雑に張りわたされた蜘蛛の糸を一本ずつ解きほぐして、そのつらなる先を見極めようとする、そんな作業に似ている。
（立派な公私混同だわ）
自分の仕事だから、と言いはった時の心に、決して嘘はなかったはずなのに。
（だって、そうよ）
不思議と、珈織はすんなり納得することができる。
（だってそれはあたしの仕事で、あたしにしかできない、あたしだけの仕事だったんだから）
他の誰にもできない。
他の誰にもわたせない。
彼――斎伽忍の存在そのものが秘めている巨大な謎に、一石を投じる役目など。
けれど何故だろう。何故あの青年は逃れようとしないのだろう。追われているのは承知で、まるで待ちつづけていたようだ。誰かがたどりついて問いかけるのを待っていたようだ。ずっとながいこと、ひとりで。
たったひとりで。
用意された唯一の質問は、すでに珈織の内にある。
口にした瞬間、なにかが砕け去る。

「あなたは誰？」

――ただ、それだけの……。

第一章　散光

I

息苦しさで目が覚めたら、それがただの呼吸困難ではなくてはっきりした胸郭の痛みであることがわかった。希沙良は舌打ちした。

「っ痛……」

顔をしかめながら上体を起こし、ゆっくりと座りなおす。狭い室内はどうもじめじめして気分がよくない。地下に造られているから風通しが悪いわけか。怪我人を閉じこめるなら、もう少し環境にも気をつかったらどうなのだ、と責任者に厳重に申しつけたい。

「……おい！」

無駄だとは思いつつ怒鳴ってみる。案の定、どこからも返答はなかった。

どれくらい眠っていたのか、腕の時計を見てもわからなかった。時計の針はぴたりと止まったままだ。――激しいオーラのショックで歯車のどこかが吹っとんだらしい。

あの瞬間に。

希沙良は無言で、その一瞬を切りとって保存しているかのような針のかたちをしばらく見つめる。

それからバンドを外して時計ごと床に放り捨て——かけて、結局やめる。

苛立った指がこつこつと意味もなく壁を叩いている時間が数十秒ほど続き、わずかな沈黙がその後にわりこんだ。

「おい!! 傷がいてえんだよ、なんとかしろ、畜生っ!!」

だんっ！ と拳を壁に叩きつけつつ半分ヤケで怒鳴りつけた途端、

「やっかましいわねえっ!!」

がんっ！ と何かをぶん殴る音とともに、どこからともなく女の声が怒鳴りかえしてきた。

「!?」

唖然として希沙良は壁のすみに作られたくぐり戸に目を向ける。誰の気配もそこにはない。

ぐるりと視線を流してみて他に可能性がないことを確かめたうえで、ようやく希沙良は声の発生源に——すなわち自分の真上に——目をやった。まさかそんなことはないだろうと思いながら。

「やかましい……？」

たいした言われようだ。ただでさえ気分が最悪で、おまけに胸の内側はずきずき痛むし、全身の骨は一度バラバラにしてから組み立てなおしたようで疲労はまったく消えないし、吐き気

は一向におさまりそうにない。その苦しみを訴えた人間に対してやかましいの一言ですませようというのだから……常識をもってして考えればこの仕打ち、断固、許しがたい。希沙良はそう結論づけた。

まずは深呼吸ひとつ。

「……ちょっと待てよ、今のは俺の聞き間違いだよな……まさかそんな暴言吐けた立場じゃねえよな……おい、そこにいて聞いてんだったらわかってんだろ、傷が治ってねえんだよ!!　手ぇ抜きやがって、この藪!!」

「じょおおっだん、ぬかしあそばせだわ、ショックで頭のネジ二、三本どっかに落としてきたんじゃないの!?　下手な言いがかりつけてくるヒマがあったら少しは建設的な思考の訓練でもしてたらどうなの、幸い時間なら充分あるようだし」

不覚なことに希沙良は腰砕けに脱力しそうになる。この期に及んで、どうしてこうも不条理に元気なのだ、この女は。

妖者の連中に加えて、斎伽の本家そのものをも敵にまわした状況で、実に数少ない味方といえる者同士がなんとかかろうじて天井板ごしに（むこうにとっては床板か）接触するチャンスを得たというのに。

こちらの健康に心遣いを示しつつ何がどうなっているのか簡潔に説明してみせる、くらいの努力はできないのか。その程度の芸当、きっとあの従兄ならあざやかに。

（あいつなら）

違う……!!

血の気がひくのを希沙良は味わった。自分は何を基準にしてものを考えているのだろう。

いつの、誰を。

「だってそうだろうが……」

酸素がうまく肺におさまらない。

「そっちが、最後まで、俺の怪我……治しておかねえからだろ」

苦しくてたまらないのは、だから、そのせいだ。

このまま死んでしまいそうな気がするのも。

全部このいまいましい怪我のせいで。

ただそれだけで。

「あたしは手なんか抜いたおぼえはないわよ。たしかにあなたは大怪我だったし、後になっても少しくらい痛みが残ることはあるけど、それは自然に消えるものだから心配いらないと思うわ」

そんなことが聞きたいんじゃない。

「つまらねえ女……」

吐き出した呟きは、彼女に届くほどの声にはならなかったようだ。反論らしきものはなかっ

た。それとも単に、彼女がこちらに愛想を尽かしただけか。別にどちらでも希沙良はかまわない。

水沢諒の気が知れない。なんだってこんな女がいいんだ、あの野郎バカだバカだと思ってたら女の趣味まで最低でいやがる。あいつもしかして斎伽忍に対抗したいだけなんじゃないのか？

希沙良はそこでかすかに笑う。思いつきとしては、なんとなく面白かったのだ。本人に言ったら殴られかねない発想であることは承知していたが。

くだらないことを考えたら、少しだけ現実感が戻ってきた。希沙良は溜息をついた。

本題からいくら逃げまわっても、拗ねてあたりちらしても、こちらの流儀を全部わかっているフォロー役がいない以上なにもかも空振りだ。

そういうものなのだ……。

「なあ、おい……」

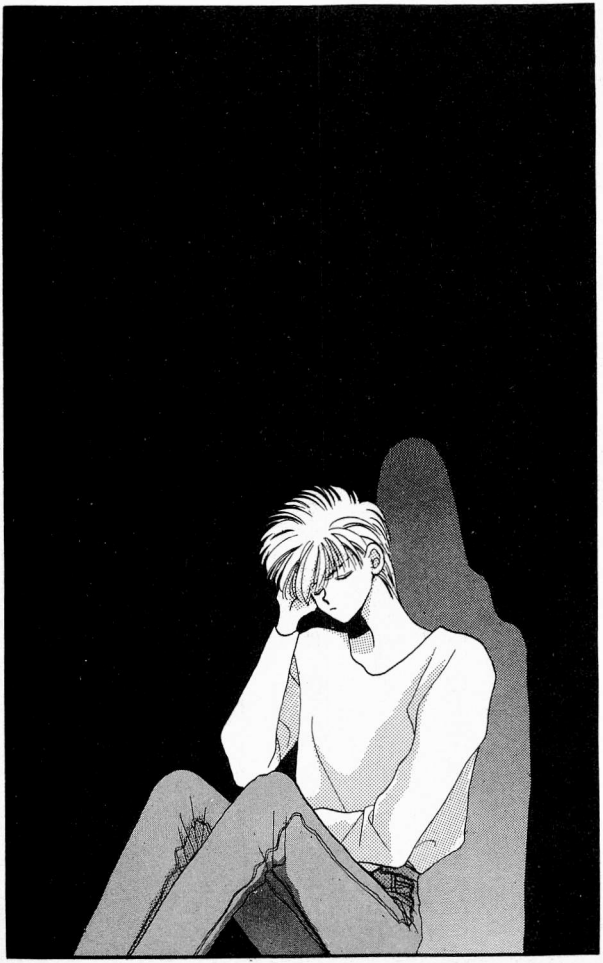
「なあ、おい、なんて名前の人は知らないわね」

「ちょっと待てよ……！」

頭痛が増加した。希沙良は片手で額をおさえこみながら、正常な国交復帰のために努力と忍耐をふるいおこした。まったく、実に自分らしくない姿だと思う。

「待てよ……俺がバカだってのはわかってんだよ！　そっちだってそれくらいとっくに知って

んだろ!?　だったらバカ相手に本気で腹立ててんじゃねえよ、くだらねえだろッ」
「……あなたねえ……」
さすがに呆れた声が返ってきた。
「あんたみたいに偉そうに自分を卑下する人ってのも珍しいわね」
「何だっていいんだよ、俺は……！」
「投げやりにならなくたっていいのよ、別に」
「おまえさあ、もしかして俺のやることなすこと全部気にくわねえってやつか？」
「そこで短絡的に突っ走らなくたっていいのよ、あんたって本っ当にめんどくさいわね」
「お互い様だろ!?」
「進歩ないし、結局」
「おい、わかってるか!?　俺の努力をことごとく無にしてんのはてめえだろ、てめえッ」
「知ってる？　努力ってのはね、正しい方角に向けられてこそ努力なのよ」
「……」
がつん、と希沙良は背後の壁に自分の頭を打ちつけた。どうにもお手上げだ。何なんだ、この女は！
「じゃあどうすりゃいいんだ!?」
希沙良の呼びかけに、冴子はすぱりと即答した。



「反省でもしたら？　まだ足りないみたいだから」

斎伽本家、正確には七瀬家の所有する鎌倉の屋敷において、和泉希沙良が〈桜〉の間の真下に幽閉されているのは決して偶然や幸運によるものではなかった。

里見十九郎の尽力――策略と呼ぶにはあまりにも捨て身であったように冴子には思われるので、あえて尽力と呼ぶのだが――によって辛うじて希沙良は死を免れ、しかしそれに代わる処遇はいまだ定められていなかった。

一族の長、すなわち絶対者として君臨する人物から、この一件に関して、ひとかけらの言葉さえ寄せられてこないからである。

鎌倉邸の護衛役をあずかる咸月陣たち若手の〈道者〉が現状に満足するはずもなく、あの方からの命があるまでという名目でなしくずしに引きさがりはしたものの、いつどのようなかたちで希沙良に対する彼らの悪意が爆発するか知れたものではない。最大の危機が回避されたとはいえ依然として希沙良の身柄がひどく不安定な立場にあることを、誰よりも早く切実に見ぬいていたのは、他でもない里見十九郎本人だった。冴子は直々に彼から協力を乞われているのだ。〈炎将〉剡司の妖火が負わせた毒素を浄化するための、さして長くない対面のあいだ、十九郎が個人的に口にしたのは唯一そのことだけだった。

『ここまでが自分の限界だということが、残念ながらわかってしまっていて……』

あの、常に我が身の肉体的精神的限界をどこかに置き忘れて奔走する自制心の塊めいた人物が、そんな台詞を言ってのけてみせたのだ。

『あなたに対しても無茶な願いだとは承知で……頼みます』

今、この屋敷のなかで希沙良の生命を守れるのは冴子だけだ。

勿論できるかぎりの手は打っておく、と冴子は約束した。どうせ自分も幽囚の身だ、ひとまとめに捕まえてあれば警固も楽というもの、新しく結界を用意する手間が省けるじゃないの、とゴリ押ししてこちらの声が届く距離に希沙良をとどめおくことくらいは可能である。

時を同じくして里見夏江が希沙良を保護するために本家筋を相手どり政治的かけひきを展開しているのだが、さすがに冴子はそこまでは知らない。

ただ、ともかく、徹頭徹尾、和泉希沙良という人間がやたらとんでもなく大切にされていることは冴子でなくとも傍から見ていればいやというほどよくわかるのだ。昔からわかっていたがさらに再確認したというべきか。

事情をふりかえってみれば、当然、希沙良にも同情の余地はある。

「……おい！」

同情の余地はあるが、しかし。

「おい!!　傷がいてえんだよ、なんとかしろ、畜生っ!!」

「やっかましいわねえっ!!」

冴子は思いきり手加減なしで怒鳴りかえしてやる。むこうは面食らったようだった。

「やかましい……？」

しばし態勢をたてなおす間があってから、相手はがたがたと文句を並べだす。が、冴子の聞くかぎり、耳に入れるほど重要な話題はどこにもない。大声を出しさえすれば言いたいことが伝わると思っている態度だ。世の中すべてそれで通用したら大間違いである。

（駄々こねてるだけじゃないの）

なまじ通用する相手がいたりするのが、問題なのか。

「つまらねえ女……」

勝手に決めつけてんじゃないわよ、と冴子は胸中で答える。

別に意地悪をしようというわけではないのだ。ただ単に、正面から、対等に話をするのが相手への礼儀だと心得ているだけで。

「なあ、おい……」

「なあ、おい、なんて名前の人は知らないわね」

いや、少しくらいは意地悪が混ざりつつあるかもしれない。

「ちょっと待てよ……！」

実はかなり苛めているかもしれない。

めずらしく情けない声を和泉希沙良が出している。
「待てよ……俺がバカだってのはわかってんだよ！　そっちだってそれくらいとっくに知ってんだろ!?　だったらバカ相手に本気で腹立ててんじゃねえよ、くだらねえだろッ」
言っている内容が目茶苦茶の一歩手前だ。
自己嫌悪するなら、もっと簡単でもっとわかりやすい方法がいくらでもあるだろうに。何のために「ごめんなさい」という日本語があると思っているのだろう。
「……あなたねえ……」
不器用にも程がある。冴子は溜息をついた。
「あんたみたいに偉そうに自分を卑下する人ってのも珍しいわね」
「何だっていいんだよ、俺は……！」
今度は捨てばちに拗ねるし。
「投げやりにならなくたっていいのよ、別に」
「おまえさあ、もしかして俺のやることなすこと全部気にくわねえってやつか？」
いきなり飛躍して被害妄想にはまったりもする。
「そこで短絡的に突っ走らなくたっていいのよ、あんたって本っ当にめんどくさいわね」
「お互い様だろ!?」
「進歩ないし、結局」

「おい、わかってるか!?　俺の努力をことごとく無にしてんのはてめえだろ、てめえッ」
責任転嫁して言いのがれようとするあたりは水沢とか諒とかいう奴と同じパターンである。
（努力、ねえ……）
彼がまったく努力していないとは、冴子も思いはしないのだ。
「知ってる？　努力ってのはね、正しい方角に向けられてこそ努力なのよ」
「じゃあどうすりゃいいんだ!?」
いちいちヒステリー起こさなきゃいいのよ、と答えるかわりに、冴子はなるべく慈悲深い言いまわしを選択する。
その結果がなぜか、
「反省でもしたら？　まだ足りないみたいだから」
となってしまうのは、冴子が冴子であるからとしかいいようがない。

II

根強い相互不理解（ディスコミュニケーション）の壁をのりこえて会話らしきものが成立しはじめたのは、かなりの時間が無為（むい）に過ぎ去ったのちのことである。

「そろそろ休養も充分とれたころだと思うから、言うけど……」

切り出したのは冴子のほうだった。

「あなた、これからどうするつもりなのよ？」

「……あ？」

どうするもこうするも……。

確かに、狭苦しい部屋のなかで落ちこんでいるばかりというのにも、いいかげん飽（あ）きた。悩みに後悔を上乗せしてずぶずぶと底なし沼に沈みこむ趣味は、希沙良にはないのだ。

しかし何事も、この監禁（かんきん）状態からぬけられないかぎりは。

「選択の余地がないってやつじゃないのか」

仰向けに床へころがりながら、希沙良はそう答える。

「マナイタの上なんだろ、俺は」

「馬鹿ね、それでおとなしく料理されるつもりなのかしら、この人」

「……あのなあ、そう片付けちまったら身もフタもねえだろ……」

「だったら片付けられないような答え方をしてみせなさいよ。選択の余地がないったって考えられるパターンは二通りしかないじゃないのよ。そこから出られるか、絶対に出られないかの

どっちか、だけでしょ」
「絶対に出られねえとかあっさり言うなよ」
「現実から目をそむけてどうすんのよ」
「デリカシーってもんがねえのかよ、おまえは!?」
「だからご愁傷さまだわなんて言ってたりはしないじゃないの！　あたしが訊いてんのは、うまくここから出られたとして次にどうするか、出られなかったらここで何をするかって話でしょ!?」
「んな先の知れない話、できるかよ……」
希沙良は憮然として吐き捨てる。
厄介すぎて考えたくなかったというのが正しい。
どんなかたちであれ、十九郎と冴子の対面が実現した以上、とにかく当初の目的は果たされている。それで喜んでしまえるかといえば……とてもそんな気分にはなれなくて。
わかっているのは、気付いてみれば、ひどく宙吊りの立場に自分がおさまっていたということだけだ。
どこにも戻れなくなっていた、だけだ……。
だからもう、はじめから俎の上の鯉とわりきれば、ずっと楽にかまえていられると希沙良は思うのだ。

「困るわ」
　ぼそりと冴子が言った。
「あ？」
　意外な言われように希沙良は顔をしかめる。
「何だ、それ？」
「あたしが困るのよ」
「だから何が」
「だからあんたが『いち抜けた』しちゃったらこれから先あのバカと十九郎くんてば二人だけで孤立無援で四面楚歌で難題だらけでますます大変なことになるってことくらいあからさまにわかりきってるじゃないの、よくそれで知らん顔してられるわね……！」
「……」
　わかりきっている？
　……十九郎は、水沢諒に協力するつもりだろうか。
　動きだすことをかたくなに拒んでいたはずの、彼が。
（決まってる）
　希沙良は思わず笑ってしまった。自分の馬鹿さかげんに呆れたのだ。笑わずにいられないくらいの。笑いだす以外に何もできないくらいの。

当然すぎる話なのに。
なぜ今まで気付かずに——いや、認めずにおいたのだろう。
「ちょっと……何がおかしいのよ」
しつこく笑っている希沙良に、冴子が不審げな声を投げてきた。たしかにかなり不気味な笑い方だったとは希沙良も自覚している。
「何なのよ、やめてよ、ちょっと！　ねえ……！」
「乱心しちゃいねえよ、別に……」
呼吸をつまらせながら、やっとのことで希沙良は声を出す。
（決まってるくせに）
そうだ、十九郎は今度こそ本気で走りだす。
手加減も、遠慮も、抑制ももう必要ない。
重い足枷がひとつ、はずれて。
自由に。
「元から動きたかったんだ、あいつは」
かすれた喉で希沙良は呟いた。冴子に聞かせようとしたわけではなかった。
「最初から、水沢なんかよりもっとずっと早いうちから動きだせたら、それがいちばんよかったんだ」

誰のために、と問うまでもない。
いつだって希沙良は、十九郎が何をめざして行動を起こすのか、隣で見てきたのだ。
いくら努力を重ねてもその結果に満足しない彼の完璧志向が何に起因するのか、とか。
義務や義理をこえて、なんら見返りもない妖者退治に彼が並ならない力を割く理由、とか。
巻きこんでごめん、とわざわざこの自分に謝ったりしながら……。
（かまわないで、好きにすりゃよかったんだ）
謝られて嬉しい奴などいないのに。
縛りつけられて立ち止まる必要はなかったのに。
けれどもう、それも終わりだ。
「だからさ……俺がこうやってマナイタにのっかってりゃ、あいつはあいつで本望は果たせる、邪魔は入らない、好き勝手に動けて足も引っぱられない、めでたしめでたしって……」
「やめなさいよ」
低く、冴子がその台詞をさえぎった。
「酔っ払いみたいなクダ巻いてめそめそしないでちょうだいよ、みっともない。結局あんたってば、まだ何か誤解してるのよ」
「おまえが口出しできる話かよ……！」
「甘ったれないでよ!!　あんたがそこで、あの人の邪魔をしない、足を引っぱらない、本望果

たす手伝いをしてやるって、それだけ言えればすむ話だってことくらい、なんで気がつかないの、情けないわねえっ!!」

一息で怒鳴られて、希沙良はさすがに返す言葉を失った。

とんでもない叱られ方をした気がする。

何がとんでもなかったのか、釈然とはしないのだが……。

「……おまえさ……」

床にころがったまま、のろのろと希沙良は口をひらく。

他人事だと思って……と言いかけて、やめる。

そもそもおまえの兄貴が……とも言いかけて、再びやめる。

「何よ」

「……おまえさ……もしかして、頭よかったりしないか?」

「……何言ってんの?」

あきれかえった冴子の声が降ってきた。

和泉希沙良の来訪がひきおこした数々の波紋も、一夜あけてみれば、それなりに落ちつきを見せはじめたらしかった。その日、朝から鎌倉の屋敷を占めていたのは、水を打ったように静

かな空気だった。五月二十四日のことである。
平穏というよりは……気味が悪いほどのしじま、だ。
ひっそりとしているのは、いつものことなのだが……。
（何かしら）
濡縁まで足をはこび、冴子は空を見る。
これといって異変はない。森林にかこまれた大気は清浄だ。すがすがしいとさえ思える。
問題は何もない。
何もない——のが、不自然に感じられるのだ。
「失礼してもよろしいでしょうか？」
ふと、庭先から声がかかった。
目をやった冴子は、かすかに眉をひそめる。もちろん、そうと相手に悟らせぬ程度にとどめてあったが。
「どうぞ」
頷いて室内へ戻ろうとした冴子に、
「いえ、お時間はとらせないので、こちらで……」
抑えた声で制止したのは、〈道者〉四人衆の最年長者、咸月陣だった。
「……あまり表沙汰にできないお話？」

彼の態度から読みとって、冴子はそう問いかけた。

わざわざ屋敷の片隅で、それもふたりだけで話したいというわけなのだ。咸月陣がそんなことを言ってくるのは初めてのことだった。

もとより、それほど言葉を交わす機会のある相手ではない。

二十三歳という、すでに社会人として独立していておかしくない年齢で彼がいまだに本家方の護り役など務めていられるのは、国際的規模の巨大重工企業をとりしきる咸月家の長男として彼が生まれ、もはや次期社長の地位を約束されているからである。

たいていのものは望めばすぐ手にはいる環境と、さして努力せずともひととおりのことはこなせてしまう優秀な能力を、はじめから獲得していた人物なのだ。自分以外のほとんどの人間を見下してかかる癖があるのも、当然といえばいえるだろう。

しかし大企業集合体ともいえる七瀬の一族の内で、咸月陣と似たような境遇の者は他にも多数ころがっている。そのなかで彼ほど徹底して他人を目に入れようとしない人物もめずらしかった。

家柄や才能や容姿、だけでは、そこまで傲慢になれないはずだ。

では何が彼の自尊心を支えているのか。……冴子の目から見れば、解答はひとつだった。

彼が〈道者〉と名乗っているゆえん、すなわち斎伽の『血』、である。

術力と呼ぶには弱すぎるが、他の常人にくらべればたしかに特殊な勘のようなものが、彼に

はそなわっている。それを高く評価されてしかるべき、という理屈が彼のなかにはあるのだ。

だからこそ、また、圧倒的な純血の頂点である〈空の者〉斎伽忍に対して咸月陣は過剰なほどの忠誠を惜しまない。……忍という個人に対してではなく……。

斎伽忍自身と直に会うことさえ滅多にない立場で、ゆるぎない尊敬心を抱きつづけているあたりは、実に優秀な親衛隊長と呼べるのかもしれないが……。

いずれにしても、冴子にとってはありがたくない人物だった。あまりにも話が合わない、いや、話が通じないのだ。

「不確定なことなので、何もわからぬ輩に、みだりに騒がれては困るというわけです」

鋭い眼差しを冴子に向けながら、咸月陣はそんな言い方をした。

「不確定？　何がですか」

冴子も他人行儀に訊きかえす。

「それをうかがいにまいりました。冴子殿なら、すでにご承知かと」

「……よくわからないわね」

話題がまったく見えない。冴子は再び、今度は本格的に、眉をひそめた。

なにか厄介な用件であることはわかる。だが闇雲に、もう知っているだろうと決めつけられても困る。

咸月陣は無言でその反応を眺め、やがて目をそらして吐息をついた。

「買いかぶらせないでいただきたいな」
「……咸月殿にしては無礼な言い様じゃありませんこと？」
「失礼。本音は隠せないものなので」
冴子の非難など意にも介さず、ますます無礼な台詞を彼は吐いてみせる。皮肉でも厭味でもなく、本気でそう言うのだ。たちが悪い。
あの方の妹君なら、相応の力を示すべきではないのか——と、咸月陣は訴えたいらしい。
「はじめに『不確定』とおっしゃったのはあなたよ、咸月殿。不審なことなら報告なさればいいし、どうでもいいくらいの瑣末事ならもう聞かないわよ、時間の無駄だわ」
ぴしゃりと言いきって冴子はさっさと踵を返した。まともにつきあっても馬鹿馬鹿しいかぎりだ。
「本当に見えないのか、この不吉な兆しが！」
不意に咸月陣が声を荒らげた。
冷静なポーズをかなぐり捨て、苛立ちをあらわにした声だった。
冴子は足を止めた。少なからず驚いていた。
（危機感？）
体面を気にする優男の『親衛隊長』が、年の離れた小娘相手に——とりつくろいもせず不安をぶつけてくる。

それほどの。

「いったい何が……」

冴子が口をひらいた直後、どこからか、遠雷の響きが届いた。

厳しい表情で、咸月陣は蒼天を見やった。

晴れた空はひどく静かだ。

あまりにも……はりつめて、静かだ。

きらり、と北の方角で白い輝きが閃いた。

なにかが派手に壊れる音がした。希沙良はハッと両の目を見開いた。

最初は、重苦しい夢の延長かと思った。

（地震!?）

床が、まわりの壁が、波のようにゆらめいている。

物理的な震動とはやや勝手が異なることに希沙良は気付いた。

幻が生じているのか？　視覚の軸が狂ってしまったような感じだ。フォーカスのずれた映像

世界に放りこまれた感じだ。

「……おい！」

素早く身を起こし、希沙良は上方に向かって声をはりあげた。

「おい!!　何だってんだよ!?」

返答はない。

希沙良はわずかに表情を曇らせた。さっきの派手な音はたしかに上の部屋から聞こえたのだ。異変はおそらくこの狭苦しい牢部屋だけの話ではない……。

これが自分に仕掛けられたなんらかの制裁手段だとかいうなら事情は違うが。

「おい、ちょっと待てよ……！」

乗り物酔いをおこしそうだ。

どこからも何も、事態を説明する声は届けられてこなかった。希沙良はいまいましく舌打ちする。

（……違うな……）

誰かが、意図をもってひきおこしている現象ではないように、希沙良には思えてくる。

何事かの影響があらわれている……？

仮にもここは斎伽の本家だ。この手の怪事には万全の予防策がうってあってしかるべきだ。でなければ〈空の者〉伽羅王の面倒などおちおち見てはいられないだろう。にもかかわらず

……？

つまらない妖者のいたずらなどではありえない、のだから……。

すると、つまり。

「やばいんじゃないのかよ!?　おい!!　聞いてんのか、畜生っ!!」

そのとき、はるかな天空に炸裂したものは、肉眼にとらえられる光ではなかった。

目撃した者すべてを凍りつかせずにおかない——それは、霊気の奔出。

火柱が頭上から直撃したようだった。冴子はその場に崩れおちてしまっていた。理由はわからない。膝から下にまったく力が入らなくなってしまったのだ。

それが自分だけのショックでないことを、目の前にいる咸月陣の反応から冴子は悟った。蒼白になって立ちつくした『親衛隊長』は、やがて愕然と息を呑み、冴子を見返った。

「……あれは」

乾いた声で呟いたきり、それ以上なにも口にできずにいる。

キッと唇を噛み、冴子は彼を睨みかえした。

「……何してるのよ、さっさと調べに行ったらどうなの!?　あれは東京の方角よ、わからないの!?　早く行きなさいよ!!」

「――しかし……」

咸月陣はまだ動けない。冴子の言葉がまったく届いていないようだ。冴子はひとつ深呼吸をすると、震えのとまらない拳をわざと濡縁の板に思いきりたたきつけた。

「どうしたの、あなたそれでもあの人の護り役なの!? 何があったのかくらい、東京と連絡とればわかることでしょ、行きなさいよ、さあ!!」

「……」

一喝されて、ようやく咸月陣は本来の自分をとりもどした。不快げに眉をしかめ、もう一度、北の空へ視線を投げる。すでに先刻の巨大な波動のなごりを見ることはできなかった。

「冗談では、すまぬ、な……」

低くひとりごちると、

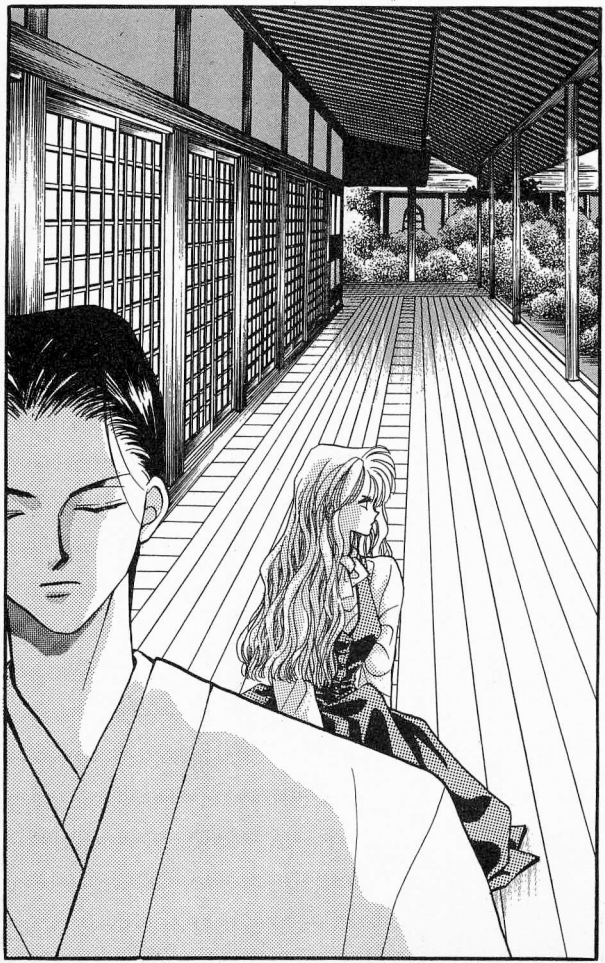
「あなたは部屋へ戻りなさい。下手に今のこと、他言なさらぬように。――ひとりで立てますか」

「当然だわ」

「結構」

冷ややかに言い放って彼は身をひるがえし、足早にその場を去っていった。ふりむきもしない。どうせはじめから手を貸すつもりなどないくせに、と冴子は思う。

無理やり腰をあげ、〈桜〉の間につづく明かり障子を開いた途端――。



嵐が、そこには待っていた。

遠野一真がその異変に遭遇したのも、まったく同じ時刻のことだった。

二十四日、午後二時二十分、である。

成城の自宅から鎌倉の屋敷へと急ぎ舞い戻ってきた、矢先だった。裏庭の妻戸をひらいてひっそりと敷地に踏みこんだ時点で、まず、一真はその場に一瞬だけ足を止めていた。

あくまでも説明のつかないインスピレーション。

(何だ?)

邸内から物音や不審な気配が伝わってきたわけではないのだ。

閑静な環境に、変化はない。

平常どおりの……。

「!?」

がくん、と烈しい縦揺れが唐突に襲いかかってきた。バランスを失って一真は両の膝を地につく羽目になった。

(地震か?)

和泉希沙良と、期せずして同時に同じことを考え、しかし一真もすぐに事態の異常さに気付

いた。

（違う……！）

揺れたのは実際の地面ではなかった。

不意に眼前に現出した――ここにはない別の景色、だ。

二重映しの要領で、どこか見たことのない場所の像が、本来の風景とかさなってないまぜに視界へとびこんでくる。微妙に座標のズレた幻のせいで、どれが正しい地面なのか判別つかなくなる。

本邸の敷地全体をこの異様な磁場が覆っているとしたら……。

「どういうことなんだ……」

こんなことは初めてだ。一真は額に冷たい汗を感じながら、ゆっくりと立ちあがる。

前代未聞――いや、あってはならない。どう考えてもありえない。幾重にも清められ、絶対の防御を保証された、ここは斎伽の聖域ではなかったのか。

不破武人から伝え聞いた不吉な『前兆』の件が、そのとき脳裏にひらめいた。

かっ、と稲妻が体内をかけぬけたようだった。あまりにも痛切な戦慄、だった。

業を煮やした和泉希沙良が最終的に選びとった行動は、後からふりかえれば、かなり無謀な

ものだった。

希沙良自身はそのとき、なにも考えている暇がなかったというべきだろう。迷彩の度を増すばかりの幻と、いくら呼んでも応答のない外部の連中とに愛想を尽かし、彼は自力で状況を変えることにしたのだ。

勢いよく、左の拳が、暗いグレーの壁にめりこんだ。

術力を——すなわち自分の専売特許であるところの『手刀』を——発揮させることに、いわゆる恐怖はまったく感じなかった。もし例の〈道者〉と名乗る護り役たちが牢部屋のまわりに〈禁呪の縛〉をしかけていたら、その両手に光を宿した途端、凄まじい苦痛に襲われていたことは間違いないのだが……。

禁呪の縛どころか、結界のひとかけらさえ希沙良を妨げはしなかった。たやすく、自在に、思いきり手刀を振るうことができる。希沙良にとっては呼吸をするようなものだった。

壁に抉った穴を足がかりにして希沙良は上をめざす。

気がめいりそうに低い天井も、今となってみればありがたいかぎりだ。

(前言撤回だな)

ふと、頭の片隅でそんなことを考えた。

藪、と冴子をののしった一件だ。

半死半生の大怪我からまだ丸一日も経っていないのに、これだけ身体がついてくれれば上出来

である。
術力のほうにも、衰えは見られない。
（充分だ）
すぐ目の前に薄汚れた天井が近づき、希沙良は右手の指を強くかためた。
音もなく――風をきる。
「――の野郎ッ」
ガッ！　と分厚い板と角材が砕けた。
埃まみれになりながら余計な残骸をはねのけ、目指す部屋の床下にたどりつく。こんな真似ばっかりだな俺は、と希沙良は呟いた。
が……。
力任せに全身を引きあげ、やっと上の室内を目に入れた、瞬間、愚痴をこぼす声もたち消えてしまった。
「おまえっ……!?」
部屋の奥、半開きの障子の傍らで、崩れるようにうずくまっている姿は――七瀬冴子のものでしかありえなかった。

III

幻想……？

たどる迷路の先に見出したのは、ひどく現実離れした美貌の青年。

人外の者、化生にして魔——。そう呼ばれるにふさわしい、異質な存在。

あまりに冷たくイミテーションめいた、けれどなにか確固とした意志を秘めた、その不可解な眼差しは……なぜだろう……。

＊　＊　＊

珈織が小学校にあがって間もないころのことだ。

真新しいランドセルを背負って家に戻ると、両親の姿がなかった。

その朝はなにごともなく笑顔で送り出してくれたはずの二人が、いくら待っても、どこを探

しても……帰ってこなかった。
なぜ、と問う珈織に、大阪から駆けつけた祖母は真実を告げなかった。ただ、こんなこともあるのだと――仕方がないのだと、首を横に振るだけだった。
『神隠しだよ』
……神隠し？
珈織自身、生まれたばかりの頃に一度、突然、行方の知れなくなったことがあるという。おまえは神隠しに遭った子だからそれだけ神様に贔屓してもらえるだろうさ、と冗談まじりに笑った父親の言葉を、珈織は憶えている。
（そんなものいらない）
神様の恩恵というものが、こういうことならば。
そんなものいらない。
『おまえは気の毒な子やね。けど自分を情けなく思うたらあかん』
珈織の頭をなでながら、噛んで含めるように祖母は言いきかせたものだった。
『いつも、いつも、お天道様を向いて立てる子でいようなあ』
迷信めいた単語も、この祖母の口から出ればひどく自然に響いた。
人外の者たちは、影がなくて寂しいものだから、優しすぎる人間に近付いてくる。哀れんでしまうと、連れていかれる。気をつけていなければ――。

『珈織のことは連れていかれんように、ばあちゃんがお願いしてやるから』

以来、いつでも、何があっても一番の味方は祖母だった。

成長するうちに、要するに自分は親に捨てられたのだと珈織も気付いた。神隠し云々の祖母の台詞は、厄介払いされた珈織をなぐさめるための方便だったのだろうと……。

思えば両親との暮らしは、常に倹しい日々だった。父親は特に決まった職にもついていなかったようだ。病弱だったのかもしれない。いつもひっそりとして、けれど優しい家庭だった。父と母がたしかに愛しあって築いた家庭であることが、幼い珈織にも伝わるような……そんな空気が守られていて。

それでも、彼らでさえも、ひとり娘を置き去りにしなければならない事情があったということだ。

金か、しがらみか……真相は今となってはわからないが。

大人の都合で子供の世界ががらりと変わることは、実際に、ある。

それを知ったことが、いつか、珈織の目を社会へと向けさせた。現実の矛盾、人と世界のかかわり——その最先端に触れていられるのが〝報道〟ではないのかと……。

捨てられる子供や、子を捨てる親が、どうすれば幸福になれるのか、など珈織にはわからない。どちらにもそれぞれの真実とそれぞれの悲しみがあるのだろうから。

悲しみを生みだす社会機構のどこを正せば良いのかなど、珈織には決められない。

世界中の誰が間違っていて、何が悪いのか、なんて。
不可能だ。一億の人間がいれば一億の、百億の生命があれば百億の正義がある。
たったひとつの正義を選び、その他すべてを裁くことはできない。自分は神ではないのだから。
なにもかも、見極められるとは思わなかった。
ただ、目をそらすことができなかった。
見ぬふりをしてしまうことが、できなかったのだ。

＊　＊　＊

二十三日、「斎伽忍が取材を承諾した」という主旨の言葉を正体不明の〝牙〟から伝えられた、その晩、迎えにきたのはあの崎谷亮介だった。
西早稲田にある珈織のマンションを彼が知っていること自体、謎だった。自宅の住所を一度会ったきりの高校生に教えたおぼえは、珈織にはない。牙にも……勿論、斎伽忍にも。
夜分遅くの来訪をひどく恐縮して詫びたのちに、しかし亮介は、たった今から一緒に来てもらえないか、と珈織に要請した。
「今でなくちゃ駄目なんです」

いくらなんでも無茶な申し出だった。珈織は啞然として彼を眺めた。

深夜零時、妙齢の独身女性が、このシチュエーションでみすみす誘い出されたら、世間からは馬鹿な女と呼ばれることになる。

「あ……あのね、あなたね……」

「すみません……!!」

勢いよく、生真面目なしぐさで亮介は頭を下げた。まっすぐな性格がそのままあらわれた、どこか可愛らしい謝り方だった。

「本当に、すみません、突然こんなこと言いだして……。だけど、珈織さんが勝呂のマークを離れていられるのは今だけなんです、牙が向こうを引きつけてる間に移動しておかないと……」

「え……？」

「――じゃなくて!!　ああ何言ってるんだろう、俺……。そうじゃなくて、だから大事なのは急がなきゃならないってことだけで別に理由は珈織さんに関係あるわけじゃなくて、それで、こっちの都合で急いでくれなんて本当に勝手なお願いをしてるってことは俺も思ってるっていう、それだけ言えれば俺はよくて、ええと……」

「……」

「……」

深刻に頭を抱えこんでしまった亮介に、まあまあ落ちついて、と珈織は助け舟を差しだした。どうにも変なペースだが——しかし放っておくわけにもいかないのだし。

「すみません……なんだか俺も焦ってるみたいで……こんなこと初めてで、うまく言えなくて」

「あたしも全然よくわかってないから、かまわないけれど」

赤面しつつ口ごもる亮介に、珈織もまた今ひとつ嚙みあわない慰めの言葉を返した。我ながら珈織は呆れたが、亮介は気付かなかったようだ。

「すみません……」

「ほら、謝ってばかりじゃ話が続かないでしょ」

「あ、すみ……じゃなくて……」

どうして俺ってこうなんだろう、とひとしきり自己嫌悪した後で、やっと亮介は再び顔を上げる。が、そして真正面からぶつかってきた彼の視線に、珈織は思いのほか動揺した。

直前まで情けなく謝りつづけていた人物のものとは、思えなかった。

濁った部分のまったくない目、だ。

嘘や裏切りをおそれない瞳だ。

「あの……うまく言えないけど、説明はできないけど、俺からひとつだけ言わせてください」

「……何？」

まともに聞いてはいけない気がした。
こんな相手では。
ひきずられてしまう……。
「忍さんを信じてください」
亮介はそう言った。
（え？）
奇妙な話の流れのように、珈織には思えた。
（どういう意味？）
「珈織さんは普通の人だから、巻きこまれちゃいけない、かかわっちゃいけないって……ずっと忍さんはそんな風に考えてきたんです。珈織さんには何も罪がないんだから、そのまま自由でいてもらえば、それでいいんだ、無関係でいられたら、それがいちばんいいんだって……」
「……」
「だけど事情が変わって、急がないといけない理由ができて……意外なところに勝呂がまぎれこんでたこともわかったから」
亮介はそこでわずかに顔をしかめた。何故なのかは、珈織にはわからない。
「このままだと珈織さんまで危ないことになりかねないから、だから、今のうちに、忍さんは俺をよこしたんです」

「……」

次から次へ理屈が飛躍していくばかりで、要するに亮介が何の話をしているのか、さっぱり見えなかった。

ただひとつはっきりしているのは、彼があくまで真剣に言っているということだけだ。

「勝呂……？」

問題の根底にあるらしい単語を、珈織は口の中でくりかえす。人の名前……？

聞いたおぼえも、特に何の引っかかりもなかった。

「駄目だ、俺、またやっちゃった……」

我に返ったように亮介は額に右手の指を打ちつけ、またもやずしりと落ちこんでしまった。

「ごめんなさい、俺が言ってること、もう何が何だかわかんなくなっちゃいましたよね？」

おそるおそる訊いてくるあたり、ここで頷いたら気の毒だろうと思いつつ、亮介の指摘がまさに大当たりだったため仕方なく珈織は頷いた。

「じゃあ、それはそれで好都合だから、そのまんまで俺と一緒に来てもらえませんか」

「……それはそれで好都合って……」

何だ、そのとんでもない発想の転換は？

言ったのが亮介ではなく他の人間だったなら、ふざけるなと叱りつけて、さっさと追い出していたに違いない。

こちらの揚げ足をとらえて隙につけこむような、そんな相手なら。
人の言葉を伝えるだけの、無責任な使い走りにすぎない立場の、相手だったら。
しかし……。
「……どこなの？」
「六本木、です」
タクシー待たせてあるんです、と言う亮介に、なぜか珈織は答えてしまったのだ。
「わかったわ……」
ひどく不思議な、不条理な夜だった。
夢のなかの出来事のようだった。
せめて誰かに——友達でも仕事仲間でもいい——告げてから、部屋を出るべきだった。いくら名目が仕事で、待っているのが取材相手でも。
（あの人は違うのよ）
頭の片隅で囁きつづけていたのは、危険のシグナル。
（普通じゃない）
なのに、どうして。
道中、崎谷亮介はなにも言わなかった。珈織もなにも尋ねなかった。
質問しなければならないことは、本当はいくらでもあった。斎伽忍と崎谷亮介がどのような

関係にあるのか、前にCBSで出会ったとき崎谷亮介は何をしていたのか、あの暴走自動車はいったい何だったのか、連続殺人事件と斎伽忍にはなんらかのつながりがあるのかどうか……。

〝可哀想に〟

（え？）

現実感は失調を来しつづけた。

（空耳……？）

どうやってそこにたどりついたのか珈織は憶えていなかった。

いつタクシーを降りて、どこを歩いたのか。

誰が傍らにいて、何を告げたのか。

〝……可哀想に〟

それは珈織自身の呟きだった。珈織の心の奥底から、突如わきおこった強い念だった。

黒い扉が現れる。珈織の目の前に。

門、だ。
哀れな囚(とらわ)れびとと外界を隔てる、残酷(ざんこく)な入り口だ。
珈織はそれを開かなければならなかった。
巨大な理解と混乱が待ちうけている……運命の境界を。

〝可哀想〟
呪文のように無意識は訴える。ひそやかに、とめどなく。
〝可哀想な貴方(あなた)〟
誰、が……?

IV

部屋の中は目茶苦茶になっていた。

調度品はことごとく本来あるべき位置を離れ、乱雑にあちこちへ散らばっていた。さっき聞こえたのは百合の花瓶が落ちて砕けた音か、水差しが宙をとんで壁に激突した際の音であるかのどちらからしい、と希沙良は室内を一瞥して判断する。

竜巻でもやってきて荒らしまわったとしか見えない様子だ。

人の手によるものではない。――おそらく、特殊な力と方法で……。

それはともかくとして。

「おい……どうした？」

急を要するのは冴子のほうだった。慎重に手をのばし彼女の肩を支え、希沙良は抑えた声で問いかけた。

「大丈夫か、無理に喋んなくていいから楽にしてろ、わかるか？」

冴子は愕然として声の主を見やり、何やってるのよあなた、と唇を動かした。

痛みが突き刺すのは胸の奥――ちょうど心臓のあたり。衝撃が重すぎて、身じろぎも、声を出すこともできない。……こんなことは初めてではなかった。二度目だ。

前の時は、近くにいたのは、あの水沢諒だった。

心臓に疾患があるとか、そういった事実はまったくないはずだ。そんなものではないのだ、この痛みは。それはもっと……。

もっと、何かにかかわるもの。

誰かに。
（あの人に）
共鳴？
どこか遠い、ここではない別の場所で、巨大な力が振るわれている。
圧倒的な光の奔流の、その裏側で、ひそやかに喰いつくされてゆく生命の囁きがある。
瞳を灼く眩惑がかたちどるのは……剣の影？
「待てよ……おい、こっち見とけ!!」
いきなり希沙良の怒鳴り声が、冴子の意識にわりこんできた。
「なっ……」
「おっまえなあ、頭の中身、どっかの宇宙にすっとばすなっ!!　何が始まったかと思うだろ、俺がっ!!」
「な、何なのよ、それ……!?」
声が出るようになっている。かろうじて、だが。いつの間にか。
「あたしが何……」
「何だか知らねえけど、おまえが言いだしたんだろ、テンメイのツルギだのラショウだの古文だか漢文だかわからない言葉ずらずら並べやがって、狐憑きかと思ったぜ、気味悪い……」
「やめてよ、知らないわよ、そんなこと……！」

「たった今だぜ」
希沙良が顔をしかめた。
冴子も負けずに相手のことを睨みかえした。
「でもあたしは知らないのよ」
「つまり、知らないで言わされてたってわけだろ」
「誰が、そんな……」
「おい、いいか？　俺も今、真面目に考えてんだぜ……誰だったらこれだけ大掛かりに目茶苦茶な騒ぎを起こせるかってことをさ……」
さらりとした言い方だったが、冴子をしばし沈黙させるには充分だった。
屋敷全体がなんらかの異変に巻きこまれているのは確かだ。重要な〈桜〉の間でこれだけ激しい騒霊現象が発生したのに誰もかけつけてこないあたりといい、希沙良があっさり地下室を脱出できてしまうほどの警戒の脆さといい――。
なにもかもが不自然で。
「動けるか？」
「まだよく、わからないわ……」
「誰か呼んできたほうがいいんだろうな、こいつは」
「ちょっと、何言ってるのよ!?」

当然とばかりにひとりごちた希沙良に、冴子は呆れた。
「あなた、自分の立場についてちゃんと自覚してるの!? 下手に出てっちゃったりしたら、また、何をされるかわかったもんじゃ……」
「俺のことで騒いでる場合かよ!?」
「騒ぐバカがいるかもしれないからこの家は手に負えないんじゃないのよ!!」
「……」
そういえばそうだった。希沙良はかすかな頭痛を覚えつつ、とっさの方針を断念する。
「面倒臭すぎないか？ この家」
「少なくともあなたには向いてないわね」
だったらどうすれば——と、希沙良が言いかけた時、だ。
新たな現象が到来したのは。
「!?」
ドウッ!! と横なぐりに分厚い波が襲いかかってきた。とっさに自分の腕で冴子をかばった希沙良は、あまりの圧迫感に思わず上体をぐらつかせた。
圧力の源は……オーラか？
方向は、壁の一角からだった。
「鏡……!?」

それを目撃した希沙良が愕然と呟いた。誘われるように冴子もふりむき、そして言葉を失った。

部屋の片隅に、先刻の嵐で破壊されることもなく、無事に残されていた鏡台の、鏡が。

今、それは室内の光景をうつしてはいなかった。希沙良と冴子の姿を反射してはいなかった。

暗い鏡面が宿してみせたのは——ここにはいない、二人の人物の姿だった。

その一方は、見間違えようもない美貌の主。

斎伽忍だ。

彼と対峙して立つ、もう一方の人物を——大人びたひとりの女性を、希沙良が見るのは初めてだった。冴子も同様だ。

ゆえに彼らは知らなかった。

工藤珈織、という彼女の名前も。

彼女の姿が、それまでの珈織のものから大きく変化していたことも。

アンドロイドのように無機的な、他者を寄せつけない、冷ややかな美しさを彼女が身につけはじめていた、その理由も。

だがそこに見えるのは斎伽忍と同質の空気ではないだろうか？

何事か、ひどく象徴的で重大な場面が伝えられようとしている。希沙良にもそれはわかっ

た。鏡が映しだす景色は、あの六本木にあるマンションの室内のものだ。なんらかの力の作用が、ここ鎌倉と、斎伽忍の居室とを、一枚の鏡によってつないでみせたというわけか……。

（こいつがいるからか）

希沙良は冴子を見やって、そう想像する。

化け者めいた斎伽忍ほどの力はなくとも、正真正銘、血のつながった——それも斎伽の純血だ——実の妹なら、これくらいの同調現象をひきおこしても不思議ではない。

「何……どういうことなの……」

冴子は顔色を変えていた。

謎めいた現象に対する驚きよりも、さらにまさる衝撃が、その声を占めていた。

「どうして」

冴子が見ていたのは、隠しがたい斎伽忍の衰えにほかならない。

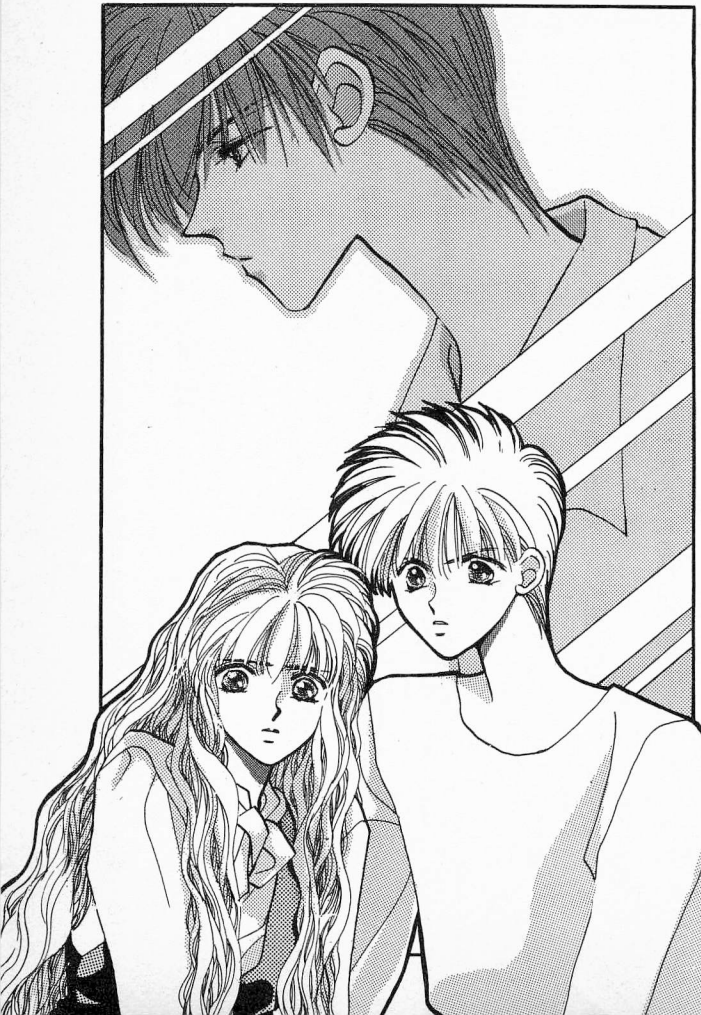
その身を病みさいなむ苦しみに耐えつづけているような、いたましくやつれた彼の姿だ。勝機のない賭けにのぞむような、悲壮な、そして凄惨な空気だ。

彼は何に敗れ、何に絶望したというのだろう!?

「可哀想に」

ふと、珈織が呟いた。

はっきりと、その声は鏡ごしにも聞こえてきた。



希沙良も冴子も、まるで間近に居合わせたように彼女の声を聞いた。あくまでも傍観することしか彼らにはできなかったのだが……。

かすかに眉をひそめながら、珈織が言う。

「可哀想な伽羅王」

＊　＊　＊

六本木CBSにおける戦闘や、その幕切れの様子などについて、珈織は何も知りはしなかった。

水底から浮きあがるように、彼女は認識しただけだ。目覚めた瞬間に。

彼の目的を。

（哀れなこと）

愚かしくも、哀れな……。

「どうなさったの、伽羅王。あなたともあろうものが、この有様……」

珈織は微笑した。返答を期待した問いではなかった。

「今一歩で決着はついていたでしょうに、手控えられる理由があろうとは」

忍は無言を通している。

暗い、光の閉ざされた室内で、なにもかもは凍結されていた。時間も、意味も……感情も。
妨げが入る余地はない、両者だけの空間。
眼前に立つ青年の姿を、珈織もまた無言で見つめた。
本質を透かし見る……叡智の瞳によって。
「やはりあなたは……」
（相克）
（あってはならぬ矛盾を内包する）
ふわり、と慈悲に似た表情が彼女の双眸に宿りおちた。それは女神の笑みだった。
はかなく脆い存在を、いつくしみ、許容する——聖なる者の視線だった。
「そう……。よろしいでしょう、あなたの名を呼んではならないというわけですね、伽羅王と……」
なぜなら伽羅王は、ここにはいないからだ。
この青年の内側で常に抑えられ、闇の部分として葬られているからだ。
「哀れなこと……」
「私が？」
初めて、忍が口をひらいた。
「よろしければ、お聞かせいただきたい。貴方が哀れむのは私であるのか、それとも私に巣喰

う精神体の側であるのか」

物静かな言葉だったが、問うている内容は……。

「荒んだ物言いをなさるのですね……」

女神の表情に、ゆらぎはなかった。むしろさらに優雅に、悠然と、彼女は答えてみせた。

「誰に、とは申せません。あなたはあなた、私は私、それ以外に真理はないのですから」

「では何をもって哀れと？」

「業、ですわ。あなたの負われた業の深さが……」

彼女は両の瞳を閉ざす。遠い何者かを悼むように。

星が星であるように、人が人でしかないように、〈空の者〉もまた〈空の者〉でしかありえない。真理とはそういうものだ。

神であり、なお人であろうとすれば相克が生じる。選びとらなければならない……誰もが。

（けれど貴方はこのようなかたちで――）

（己自身にすら裏切られようというのですか）

（伽羅王）

存在に理由など求めてはならないのに。

「だれも、天さえも答えはくだせますまい。私たちが何のために遣わされたのか――」

「因果などありえないと言われるのですか」

「否、なにものにも知りえないと」
彼を見据え、彼女はそう宣告した。
かすかな笑みが、忍の口元に浮かんだ。
「私は欲深いということか……」
正しくないと、彼女は言うのだ。
伽羅王の意識を否定しながら闘うことは不可能であると。
空者である自らに疑問を抱いてはならないのだと。
――皮肉なことに彼女が。
それは、言葉にするまでもなく、思い知らされるまでもなく、絶対的な真実。だが……。
「だが遅すぎる」
さらりと忍は漆黒の髪を揺らす。遅すぎる。残された時間はもうわずかだった。
やがてこの部屋には彼らが――崎谷亮介や里見十九郎が、たどりついてしまう。おそらく真っ先に、水沢諒が。
（正しさ、など、とうの昔に踏み外した道のひとつにすぎない）
今さら……語るべきことは何もない。
雷将勝呂との激闘において最後の切り札を使いこなせなかった以上、斎伽忍がとるべき手段はたったひとつだった。

彼女もそのことは承知しているのだ。
なぜなら忍の選択は、九百年前の伽羅王の選択と、まったく変わらないのだから……。

しかし彼女は逃れようとはしなかった。
なにもかも承知した上で、確かに、珈織は斎伽忍の瞳の色を見つめていたのだ。
淡い光線を受けて変化する、その双眸が近付くのを。
冷えきった、白い腕がさしのべられるのを。
「伽羅王」
囁くように彼女が問いかけた。
「悲しむ人はいなかったの」
……今生に。
彼女の頬にのばした指を、わずかにすべらせて、斎伽忍は美しく微笑した。
いや、その笑みは誰のものだったのだろう……？
「それなら、貴女だ」
低い呟きが、問いに答えた。
「待っていた……君に会うために」

「なぜ……？」
「なぜ？」
忍の声がその言葉をくりかえす。
わかりきった理由しか、そこには用意されていないからだ。
あまりにも当然で、ひそやかな……。
「君を愛していた」
静かに、彼がそう告げた。
「ずっと、君だけを愛していた。今まで」
……そしてこれからも。
言葉を返そうとした彼女の唇に、その時、斎伽忍は自らの唇を重ねた。
薄闇に二つの影が揺らいだ。ほんの一瞬のことだった。
「!!」
不意に、轟音とともに巨大な合わせ鏡が粉々に砕け散った。天空が雷鳴によって激しく裂かれたのも、まさに同じ瞬間だった。

V

がっ、と自動的に鏡面が砕けた。前触れもなく、唐突に。
空間のつながりを、無理やり断ち切られたようだった。
「……え……？」
思わず、希沙良は口の中で呟いている。
この兆しは……良くない。前後関係はわからなくても、その程度のことは誰にでも見てとれる。すべてのお膳立てが不吉な方角を向いている……。
「あの野郎、いったい……」
まさか救いようもなく馬鹿な考えを起こしていたりは、と言いかけたところで、希沙良はハッと息をつめてふりむいた。
「冴子っ……!!」
最初に気付くべきだった。

鏡のつないだ映像は、そしてその喪失は、斎伽忍に関する重大な危機を暗示する。そんなものを直に、目のあたりにさせられた冴子の状態は……。

「おい……!!」

希沙良の呼びかけは、冴子の耳まで届いていなかった。

激しすぎるショックが、すべての感覚を締め出してしまったのだ。

現実を否定しようとする働きだけが、視界を覆い、音声を消し去り、精神を凍りつかせる。

どうあっても信じられない、認められない事実を前にした時に——人はこんな風になる。

(違う、まだだ!)

さらにその上があり得ることに、希沙良はなぜか思い至った。なぜひらめいたのか、希沙良自身は知らない。どんな記憶がその想像を導いたのかは……。

「待てっ!!」

「!!」

制止した瞬間、それが爆発した。

冴子の内側に燃えあがったオーラが、不意に勢いを増して一気に全身から放たれたのだ。衝撃にひきずられた暴走だ。室内に火柱が現出したも同然だった。凄まじい紅蓮の炎を希沙良は幻視した。

壮絶な赤。

「よせ、死んじまうぞ!!」
ぞっとしながら希沙良は大声をはりあげる。
死んでしまう。
ありったけの生気を使い果たして。
「聞こえないのかよ……!!」
まったく自覚がないままにやっているのか。冴子は見返りもしない。何も見ていない。それしかできないのだ。泣くことも叫ぶこともなにもかも。
どうすればいいのだったか。こんな時。
(ああ……そうか)
希沙良は舌打ちした。
単純なことではないか。
「抑えりゃいいんだろッ……」
電源の切れた機械人形のように、床に座りこんだきり冴子は動かない。その身を包みこむ要領で両腕をまわし、彼女のオーラにあおられながら希沙良は思いきり自分の結界を発動させた。ズンッ! と抵抗がきた。
こんな風に術力が暴走してしまったら、近くにいる術者が自分のオーラを使って抑えてやるしかない。

しかしなにしろ相手は限界を超えて突っ走っているのだ、止めるほうも決して楽ではない。力まかせにつかまえてねじふせるのが、精一杯だった。これが結界の使い手である里見十九郎なら、もう少し優雅な抑え方もできたのだろうが……。

（そうだ、十九郎だったんだ）

漠然と希沙良は思い出す。

確かに、これと似たようなことはあった。昔……？

「おい……」

しばらく様子を見てから、そろそろと希沙良は口をひらいた。

とりあえず紅蓮の火柱は影をひそめた。あとは本人の正気がどの程度、回復しているかだ。用心深く、希沙良は彼女の細い肩を抱え起こしてやった。

「大丈夫か、わけわかってるか？」

「……」

返答はない。

希沙良は溜息をついた。期待はしていなかったが。

よほどひどいショックを受けたわけだ……。

なにか、考えたくもないほど厄介なことになっているのは確かだった。

いったい何が起こり、斎伽忍は、そして彼の近くにいるはずの連中は、どうなってしまった

のだろう？

——こつん、と肩になにかが当たった。希沙良は無言で視線を移した。

「……くやしい……」

希沙良の肩に、倒れこむように額を押しつけて、かすれた声で冴子が呟いた。

「何もできない……くやしい……!!」

「……」

目の前のウェーブの髪を眺めやり、視線をそらしながら希沙良は低く答える。

「……おまえは悪くない」

それはすべて、冴子のせいではないのだ。

「泣くなよ、だから……」

＊　＊　＊

そして——彼女は今、独りきりになっていた。

内面を支配していた巨大な精神は消えうせ、今や彼女を導く声はなかった。

不意に空虚になった自分自身にとまどいながら、彼女はゆっくりと立ちあがる。深い影の落ちる、寒々しい室内に。

なぜこうなったのか、彼女にはまったくわからない。
わかっているのは、魂をひとつ削り落としたような痛み。……それだけだ。
やがて彼女は、眼前の光景を理解する。
息絶えて横たわる彼がなにものであったのかを、悟る。
だが、そこまでが限界だった。
混迷と惑乱が彼女を圧しつぶす。
こんなはずではなかった。
こんなことを望んだわけではなかった。
なにもかもが……。

第二章　稲妻

I

〝死は解放。
いつか誰もが裁かれる。
それだけは、あらゆる者に、わけへだてなく許された、たったひとつの……〟

＊　＊　＊

里見十九郎とともに、遅れて六本木のマンションにたどりついた亮介は、九〇七号室に足を踏み入れ——そこで、一生目にするはずがないと信じていた場面に遭遇することになった。
少なくとも自分の前でそんなことが起こり得るはずはないと、なぜか亮介は信じてしまっていたのだ。だからこそ、こんなかたちで心臓を一気に粉々にされたような痛みを与えられるなんて……考えてもみなかったのだ。

……水沢諒が、泣いていた。

なにも語らずに。

足元に膝を落としたまま、身動きもせずに。

どれほど重い過去をつきつけられても、どれほどの苦しみを負ったときでも、決して涙だけは流さずにいた彼が――今、亮介の目の前で、声を殺して泣いていた。

声をかけることさえ、亮介にはできなかった。なにも言えなかった。すべてを拒む、彼の後ろ姿を、ただ立ちつくし見つめていただけだ。

初めの衝撃の時点で、驚愕や悲しみといった感情はほとんど麻痺していたのだろう。明らかになった事実に対して、亮介の精神はひどく冷静だった。感じ方がわからなくなってしまったまま、状況を認識する能力だけがかろうじて働いていた。それが精一杯だった。

フローリングの床に、斎伽忍の亡骸は、手を触れられることもなく穏やかに横たえられていた。

すでに息がないことは、一目でわかった。

彼から常に放たれていた光のようなものが……圧倒的な存在を示す力のような、独特の空気が……そこにはもう感じとれないのだ。

もういない。彼は、どこにも。

水晶に似た石のかけらが、亮介の手中に残された。彼の〈使〉である牙が姿を消し、このち

っぽけな水晶片に収められてしまった、あの瞬間に——真実は伝えられていたのかもしれない。とうに結果などわかりきっていたのかもしれなかった。

（あの方を）

牙が最後に何を告げようとしたのか、なんて。

（どうか、あの方を……救って）

誰も救えはしなかったよ、牙……。

牙に詫びなければならない——と思い到った瞬間、枷が外れたように亮介の両眼から涙が溢れた。

こんなことがあってはいけないのだ。

こんな幕切れが許されてはいけない。いったいどうして。

（どうして？）

涙を振り落としながら亮介はそのことに気付く。わかっているのは結果だけだった。

それ以外のすべてが闇の中だ。理由も、経緯も、忍の目的も。

目的などないのだろうか？　それとも。

なにもかも放棄して、彼はひとり解き放たれることによって終わらせようとしたのだろうか？

ひとりきり、解き放たれて。

だとしたら……。

「崎谷君、確かめたいことがある」

ふと、肩に手を置かれて、亮介は我に返った。

そのとき里見十九郎がどのような表情で問いかけたのか、亮介ははっきりと見ていない。

「この部屋に来ることができる人間が、俺たち以外にも存在した、可能性は……あるのか？」

「……あ……」

亮介は息を呑んだ。

重大な問題が頭から消え去っていたのだ。

「違う……！　あの人がいたのに……」

そして――工藤珈織の行方は、今や、まったく知れなかった。

＊　＊　＊

鎌倉の本邸に直通の回線をつないで自分のことを呼び出した相手が誰であるのか、遠野一真には予測がつかなかったし、あえて考えようとも思わなかった。この際、さらに何が起きても不思議はなかったからだ。

「ああ……君か……」

一真は、わずかに疲れた声を出す。

その相手に抵抗があったわけではない。むしろ逆だ。混乱が増していくばかりの今の状況で、確実に多くの情報をつかんでいるはずの里見十九郎がコンタクトをとってきたのは、不幸中の幸いというべきだった。

だった、のだが……。

「そちらが把握(はあく)している事実がどの程度あるのか、教えてくれ」

前置きもなく十九郎はそう切り出した。

完全に感情を排除した、硬質な言葉だった。

ため息をつきながら一真は受話器を持ちかえる。

「君に悪意があるなら、そう言ってもらったほうが僕にはありがたいんだよ、十九郎」

和泉希沙良(いずみきさら)を傷つける企てに参画した罪を、責める気が十九郎にあるのなら……だ。

「一真、ありもしない話ができるほど器用でもないんだよ、俺は……」

十九郎の声が返る。

(ならばその造り物めいた話し方をやめてもらいたいな)

そう一真は思いつつ、しかし自分が話題の本筋を外れていることも自覚していた。何をやっているのか、自分は……。

(把握している事実?)

発生しているのは現象ばかりだ。この鎌倉においては。不可解な、そして不吉な幻ばかり。

「六本木のテレビ局で戦闘が起きた件なら、今、都内と連絡をとって詳しく調べている最中だ。鎌倉では連鎖的な磁場の歪みが生じて、さまざまな幻視に陥る者が続出した。これらの現象は、つい先程、すべておさまった。我々は事後処理と事実の究明に忙殺されているといったところだよ……それで満足か？」

「よくわかった。ではたった今から、その問題はこちらに一任してもらいたい」

「――何だって？」

一真は自分の耳を疑った。

「どういうことなんだ……!?　君はいったい、自分が何を言っているのか……」

「これは正式な要請だ。意味はわかるだろう？」

あくまで冷静に、しかし信じがたいことを十九郎は言ってのけた。

手を引け、と十九郎は言っているのだ。

要するに邪魔をするなと……本家の護り役たる〈地の者〉たちに、ひとりの術者として命令しようというのか？

「事態の収拾はこちらですべて引き受ける。かわりに、本家の内部に余計な動きが生じるのを、一真たちの力で抑えてもらいたい」

「……それはあの方の命令なのか？」

こわばった声で一真は問いかける。
十九郎は、そこでかすかに沈黙を置いた。
「いいや。俺の判断だ」
「判断？　君はまさか、君ひとりの判断にあの方の命と同等の価値があるとでも思っているのか!?」
だとしたらとんでもない増長だ……!!
あってはならないことだった。いくらそれが里見十九郎であっても。
いくら彼が優秀な術者であろうと、そのことによって斎伽忍に重用されていようと……しかし許されない一線というものはある。
伽羅王の意思を独占すること、そして彼と同等であろうとすることだ。
「それとも君に、あの方の代弁者たる資格があるとでもいうのか!?」
「俺にはその権限が許されていると、俺は解釈している」
「……!!」
不敬だ、と一真は呟いた。
「君の言葉はすべて……我々と、あの方に対する、裏切りだ……！」
「それは一真の判断だろう。裁きたいなら好きにすればいい。ただし今は駄目だ。こちらにはこちらの都合がある」

自分の話している相手が誰なのか、一真にはわからなくなってきた。
これほど横暴な物言いをするのが本当に、あの里見十九郎であり得るのか。バランス感というものを、彼はかなぐり捨ててしまったのか？
「……君の『要請』はそれだけか」
苦い予感を覚えながら、一真はそう確認する。
「いや……用件は、ふたつだ」
「聞くだけは聞いておこう、もうひとつは？」
「戦力の問題だ」
「……」
今度こそ、まぎれもなく純粋な怒りが一真の胸を襲った。やはり結局は、そういうことなのだ。
「囚人の解放か……！　つまりはそれが初めから君の目的なんだろう？」
「完全な布陣が必要だと言っているんだ。数少ない術者のひとりでも欠けてはならないことくらい、わかるだろう。旧態依然の制約は、今は必要ない。……あのふたりを自由にしてもらいたい」
「……君は……！」
十九郎の要求がひとつきりであれば、一真もここまで憤りを覚えなかったはずだ。

「それはすでに君のエゴだよ、十九郎」

どちらか一方であればともかく……！

斎伽忍の信頼を盾にとり、虎の威を借る愚をおかしておきながら、他方では、利用できる戦力としての和泉希沙良を再びとりもどそうと……そういうことではないのか？　彼の狙いは……。

「君が弄しているのは論でも理でもない、君自身の狡さを正当化する言い訳にすぎないんじゃないのか!?」

……もしもまだひとかけらでも互いの間に友情が存在したなら、この自分の一言はそれさえ完璧に打ち砕いたろう——と、一真は思う。

本来なら、人として、言ってはならない類の台詞だ。しかし……。

原因を作ったのは彼だ。

「僕は、和泉希沙良にさえ、同情する」

すべてを断ち切るように吐き捨てた一真に……だが、十九郎は短く、あっさりと、答えてみせた。

「それがどうしたんだ？　一真」

「——」

あらゆる声を、一真は失った。



何を言っても彼には意味を持たない。無駄、なのだ。

どうして十九郎がそうまで捨て身でいられるのか、真相を一真はまだ知らない。もはや、知りたいとすら思っていなかった。

「……君の要求を完全に満たそうとすると、永続的な保証はできない。時間的な限界は、考慮してもらえるんだろうね。本家のお偉方を黙らせておけるのは、せいぜい二十四時間が関の山だ。それくらいは認めるだろう？　君でも」

「三日は抑えてほしいところだよ」

「冗談じゃない、二十四時間だ!!　これでも我ながら信じがたい譲歩だ、変更はきかない。せいぜい君のお手並みを見せてくれ。後々どんなことになっても覚悟の上で言っているんだろうからね……!!」

がしゃり、と激しい音をたてて一真は受話器を降ろした。その激しさがそのまま彼の怒りの深さであることは、十九郎にもよくわかっていた。

……よく、わかっていたのだ。

II

感傷に浸る間も置かず十九郎が行動を起こしたことは、亮介から見れば驚異的でもあり目が醒めるような事実でもあった。

自分の内側ではまだ、思考など凍りついてしまっていて次に何をするべきかもわからずにいるのに……。

「崎谷君、ついてきてくれ、君に訊きたいことがいくつもある」

そう言って彼はまず奥の扉をひらいて書斎まで足を運び、そこで直通回線の電話を使って鎌倉の七瀬家本邸と連絡をとった。

マンション全体の電源が落ちてしまっているので、窓のない書斎のなかは真っ暗だった。十九郎はどこからかライターを取りだして、その場の照明代わりにする。なんでこの人ライターなんか持っているんだろう、と亮介は漠然と考えるが、口に出すほど重要なことではまったくない。十九郎がひどく確かな言葉で、鎌倉の遠野一真を相手どり何事かを交渉しているのを、

横でただ聞いていただけだ。

「覚悟の上……か」

呟きながら、十九郎は受話器を本体へと戻す。そして彼は亮介のほうをふりむいた。

「なんとか間に合ったと思う。これで本家の介入はしばらく防げるはずだ。二十四時間、と期限を切られたけれどね……」

「本家の介入？」

亮介はその言葉をくりかえす。

「ここで本家に出てこられたら台無しだ……！」

独白なのか亮介への返答なのかはっきりしない語調で十九郎は言い、素早く踵をかえした。再び居間につづく通路を通り、元の場所に戻る。

「電源を戻そう。多分、下のブレーカーだ」

「あ……はい」

十九郎は立ち止まりもせず、さらに歩を進めて部屋の外に出てゆく。反射的に答えてから、亮介はハッと気付いて背後を見返った。

「……諒」

窓際の、その場所から、諒の姿は動こうとしなかった。

自分の声が彼に届いているのかさえ、亮介にはわからなかった。

向けられた背中からは、どんな意思も伝わらない。遠すぎる……。

「諒」

こんなことは初めてだ。

どうしようもなく遠いところに、諒を感じてしまうのは。

もしかしたらそれが、亮介が知らずにいただけの、諒の本来の姿なのかもしれなかった。けれど……。

「崎谷君」

十九郎が呼びかけてくる。亮介は無言で唇を噛んだ。結局、なにもできないのだ。

自分には自分のことしか。

「……行ってこい」

ふと、諒の声が、前触れもなく、そう呟いた。亮介は目を見開いた。

「大丈夫だから……」

「……」

大丈夫……？

いつもその言葉を味方につけているはずの諒が、今、それなのにかえって独りに見えるのは何故だろう。

ほんの小さな一言だけで崩れてしまいそうに見えるのは、何故だろう。

部屋を出て、亮介は階段をおりる十九郎のあとを追った。
「すみません、待たせて……」
「いいよ」
十九郎は首を横に振る。足早に一階の配電室をめざしながら、ひとりごとのように彼は言い加えた。
「泣けるなら、泣いておいたほうがいいんだ……誰でも」

何か巨大な力の余波によってブレーカーが降りてしまったのだろう、と十九郎は停電の理由を説明した。彼の予測通り、ブレーカーのレバーを戻した瞬間から、特に異常もなく電流は全館をめぐりはじめた。
（巨大な力？）
問題は、その力が誰によって何のために放たれたのか、だ。なぜ鏡は粉々に砕けねばならなかったのか……だ。
「ひとつ、考えていることはあるんだ」
一階のエレベーターホールで立ち止まり、十九郎はそう言った。
「真相をたしかめるためにね……。ただ、それが本当に正しいことなのか、俺たちに許されて

いることなのか……そういった自信は、俺にもまったくない。それでも手を打とうと思うのは、もうそれ以外に俺にできることがないからだ。打つべき手が残っていると考えているうちは、正気を保っていられそうだから……それだけなんだ。こういう動機で何かをするのは、不純なことかもしれないな……どう思う？　崎谷君」

「……どう、って……」

突然の問いかけに、亮介はうまく答えることができなかった。

十九郎の言い方はかなり観念的で、要するに彼がこれから何をしようとしているのかはまだわからないのだ。コメントのしようがなかった。

「真相をたしかめる……？　どうやって？」

「〈雷将〉勝呂を呼び寄せてみようと思う。ここに」

「……え？」

亮介はまばたきをした。

ここに呼び寄せる？　――『鷹木文彦』を。

「そんな……そんなことをしたら、危険、なんじゃ……」

「その『工藤珈織』という女性の正体が君の言うとおりなら、少しは違ってくるかもしれない。勿論、それでも無謀なやりかたであることに変わりはないけれどね……。ただ、俺はこんな風に思うんだよ……最大の敵は、同時に、最大の理解者でもあり得るのではないかと……」

「……」

去り際の勝呂の様子などを思い返しても、あの〈雷将〉が現在のような結果を――一方的に押しつけられる結果としての、伽羅王の消滅を――望んでいたとは、十九郎には考えにくいのだ。

何世紀にもわたって空者の軍勢と、殊に総帥・伽羅王と正面きって戦いつづけてきた妖者方最高の将だ……彼は。この事態に対し、彼ならばなんらかの解答くらいは提示してみせるのではないだろうか？

「……でも……」

亮介は深く息をつき、言葉を選んだ。

「珈織さんがここにいたことを、勝呂が知ったら、勝呂はどう思うか……。珈織さんの居場所も、もうわからない。もしかしたら忍さんが……何か……」

そこから先は、口に出せない。亮介はかぶりを振る。

「とにかく……！　そのことで勝呂が冷静でいられなくなったら、つまり、怒りをかうだけで終わってしまったら――危険すぎる」

「それはよくわかるんだ。だから……」

ふっと十九郎は視線を上へ投げた。九階の、あの部屋を、見透かすように。

「その役目は俺がやる。崎谷君は、水沢を連れて、ここを離れてくれればいい」

「……！」

瞬間、亮介の胸にわきあがったのは、自分でも驚くほど激しい、凄じい感情の嵐だった。さまざまなことが、その時、すべてひとつのベクトルにまとまり、堰を切って噴出したようだった。

「里見さん……里見さん、違うんだ……!!　それじゃ駄目なんだ!!」

迷わずに亮介の手は十九郎の胸元をつかんでいた。懐へとびこむように、全身からぶつけるように、亮介は声をはりあげていた。

「それじゃ繰り返しにしかならない……!!　俺が間違えたのも！　忍さんが間違えてるのも、全部、そのことなのに……!!」

「崎谷君……」

十九郎が呟く。

「間違えて……。だって、それでまた里見さんの身に何かあったら、そうしたら俺たちは、どう……」

そうだ、斎伽忍は間違えているのだ。

あまりにも強く、亮介はそう確信した。はじめから間違えていたのだ。彼も、自分も。

「里見さんだって本当はわかってるじゃないか……!!　だって、そうしたら、里見さんがそんな風に考えたら、そしたら、諒と同じで今度は……」

震える息を、亮介は吸いこんだ。
「今度は希沙良が泣くんだ」
「……崎谷君、俺は……」
わずかに眉をひそめ、十九郎がなにかを言いかけた。
「今の俺は、希沙良にとっては……」
「違う!!　違う、それを里見さんが決めちゃいけないんだ!!　誰もそんなこと決めたらいけないんだ……!!」
かぶりを振りながら亮介は涙まじりの否定をたたきつける。何のための涙か、自分にもよくわからなかった。
「人の心なんて、どんなに近くにいたって、どんなに知ってるつもりでいたって……!!」
斎伽忍は、少しでも考えただろうか？
あんな風に諒が泣くなんて。
とりのこされた者たちが何を思うか、なんて。
「忍さんはわかってない……」
周りにいるすべての人間、でなくてもいい。
ひとりだけでもいい。
諒にとって、だけでも、忍がどれほど大きな存在だったか、忍がどれほど必要とされている

のか——忍自身が本当に知っていたら、こんな残酷な、こんな惨い別れ方はできない。さしのべられた全部の手を振りきって、たったひとりで解決をつけてしまうような……そんな真似はできない。してはいけないのだ。

「だって、本当なら、忍さんはひとりにならなくてもよかったんだ。こんな風に、ひとりで、寂しく行ってしまうような人じゃなかったんだ……!!」

皆、いつだって彼を待っていたのに。

諒も、十九郎も、冴子も、夏江も——そして牙も。

「里見さん、俺が言ってること、なにか間違ってますか!? 俺、ひどく無茶なこと言ってますか!? 俺には今、こんな風にしか考えられない……それって俺が感情的になってるからなんだろうか!?」

「崎谷君……」

沈痛な色をよぎらせて十九郎は目を伏せる。

「……崎谷君……君が言っていることは、厳しいことだが真実だと、俺も思う。けれど不思議だよ、君がそういう風に考えつづけていられるということが……」

「……」

十九郎の真意は、亮介にはわからなかった。

あえて十九郎も語りはしなかった。

ただ……亮介のこだわらなさが、十九郎にとっては信じにくいものだったのだ。十九郎自身からは物理的に、斎伽忍からは精神的な意味で、どちらからも亮介は殺されかけた立場にあるのに、それらの事実は亮介の内でまったくマイナスに作用していない。

「君は……強い人、なんだな……」

「いいえ、俺は……!!」

間髪をいれずに亮介は首を横に振った。

「俺が……本当は俺が、いちばん最初に間違えたから……それが、全部の……」

忍との企てを制止しようとした諒に向かって、自分が何を言ったか、亮介ははっきりと憶えている。

自分は本気だし甘えているつもりもない、と。

いちばんいい方法なら、それで自分が役に立つならかまわない、などと……。

よく言えたものだ……！　なにも知らなかったから、なにも本当のことに気付いていなかったから、だからあんな無責任なことが言えたのだ。英雄気取りで。そうすることで誰かを守れると、誰かが傷つくのを防げると、安易に決めつけて。

「里見さんが俺に言ってくれたことを、俺はわかってなかった。わかったつもりで全然、自覚してなかった」

「……俺が？」

いつの言葉か、とっさには十九郎も思い出せなかった。
まっすぐに目を上げて、亮介はその言葉をくりかえしてみせた。
「楽な自己犠牲に逃げるのも弱さだ――というんです」
……ああ、と十九郎は呟いた。胸をつかれていた。
「これからどうすればいいかなんて俺にはわからないけど、でももうこれ以上、誰かが泣くのは嫌だ……！　できるんだったら忍さんを引きずり戻してきて殴ってやりたいくらいに、俺は今……ああ、何言ってんだろう、俺……」
「うん……いいよ、崎谷君、わかるよ……」
抑えた声で、十九郎は亮介の言葉に応えた。ほとんど意志とは無関係に止まらなくなってきた涙を、亮介は両手で覆い、しばらく沈黙した。
（正しいか、役に立つか、誰かを守れるか……それだけじゃないんだ）
もっと単純な、もっと大切なことが、すぐ近く、目の前の、手の届くところにあるのに――
どうして――どうして、何のために、絶対に悲しませたくない相手の心すら犠牲にして自分を捨てることができるだろう!?
斎伽忍は間違えている。
神として、ではなく、人間として。
……残酷だ。

電話のベルが、不意に、鳴りはじめた。
その音が耳に入り電話の呼び出し音として認識されるまでに、まずかなりの時間がかかった。
普通ならとうに切られている頃になって、ようやく……ふっ、と諒は半身を動かした。ベルはしつこく鳴りつづけていた。
だが、なぜ、ここに電話が来る……？
電源は回復したが、亮介と十九郎はまだ戻ってこない。
もう三コールほど、諒は無言でやりすごした。無視しようと思ったわけではない。誰からの呼び出しか判別がつかぬまま、うかつにこちらの状況を悟らせては……。
（あいつか？）
ある可能性が、漠然とひらめいた。
おそらく二十数回目のコールで、諒の右手は傍らの受話器をとりあげる。あくまで慎重に。
「……はい」
低い声で、それだけ答える。
だが返ってきたのは、予想していた人物の声ではなかった。

『もしもし……』

ふわりと、電話回線ごしにさえ包まれそうになる……静けさの空気。

その一瞬、諒は自分の呼吸が止まるのを感じていた。これまでにあり得ないことだった……彼女からの電話など。

信じられずにいながら、しかし相手の名を確認する。とっさに、それしかできなかったのだ。

「……彩……？」

III

この場所なら知っている……。

突然、珈織はそう気付いた。

いったい今まで何を考えていたのだろう？　どうして自分が六本木の街を走りぬけているのか、珈織にはまったくわからなかった。

すぐ近くは職場だ……中央テレビ。CBS。

（ああ……あそこは壊れたのよ）

何だ？　なぜそんなことを自分が知っているのか、それを知っても驚きもしないのか、自分自身が説明できない。

何のために走っているのだろう……。

疑問が次々と生じて、珈織はふと足を止める。ガゥンッ!!　と轟音が真後ろで鳴りひびいたのは、その直後だった。

「え!?」

見知った大きな本屋のディスプレイが、一気に爆発した音だ……ということは、ふりかえってすぐにわかった。

だが何も反応している暇はなかった。歩道の脇を走りぬけてゆくポルシェが急にハンドルをとりそこねたのか悲鳴をあげてスピンした。

立ち尽くす珈織の真横で、だ。

クラクションの断片を残して数台の後続車が不幸なポルシェカレラを直撃した。たちまち凄絶なショックと耳をつらぬく音響が、ドッと波状をなして珈織にたたきつけられてきた。

「え……え!?」

ニュース映像ではないのだ。

現実の光景。

騒然とする通行人たちのなかで、珈織の存在だけがなぜか異質だった。

驚愕や恐怖や野次馬根性で立ち止まる彼らと違い、珈織にははっきりした自覚があったのだ。

（あたしだわ）

それらの狙いは……目当ては。

ドッ!!　と足元が不意に唸った。珈織は息を呑んだ。

数センチの誤差でつまさきに突き立ったのは、交通標識の文字板だった。

頭上を走る首都高速のどこかから、はねとばされてきたというのだろうか……？

「あ……」

珈織は一瞬たたらを踏むように後ずさり、そしてまた全力で走りだした。どこに行けばいいのかは知らない。しかしこのまま逃げずにいたら、変な現象はますます、際限もなく降りかかってくる。

オートバイのショーケースが砕け、乗り手もいないＴＺＲが重力を無視してはねあがり宙を舞う。

「いや……!!　やめて!!」

方向転換して、珈織は大通りをそれてさらに走った。がしゃん、とどこかのビルの鼻先に例

のTZRが突っこんだ。

（どうして!?）

なぜこんなことになってしまったのか。

前にも、似たような現象ならあった。CBSのスロープで無人自動車に轢かれかけたのだ。

あの時は、けれどその一度きりで全部おさまっていたのに……。

誰の仕業？　スケールは段違いに大きくなっている。珈織ひとりを危機に陥れる程度ではすんでいないのだ。

（他人まで巻きこんで）

漠然とした怒りを珈織は感じる。

許せない。こんな理不尽なこと、許されてなるものだろうか。

誰のせいで、こんなことが。

――斎伽忍？

（でも、あの人は死んでしまったのに）

「!?」

はねあがった心臓を抑えこむように、珈織はその場に立ちすくんだ。

自分は今、何を考えた!?

……嘘じゃない。そうだ、斎伽忍は死んでしまった。目の前で。留めおくこともできぬま

ま。

珈織はそれを知っている……。

頭上を走る電線に、火花がとび散った。ショートする。片手で耳をふさぎ、珈織は再び走りだした。わけもなく泣きだしたかったが涙は乾ききっていた。

助けてほしい、と彼女は祈る。

誰でもいい。この状況から救いだしてくれるのなら。

悪い空気を吸いこんだように、胸元が苦しくなってきた。走りすぎたせいではない……周りを占める、得体の知れない毒気のせいだ。

がんがんと、頭まで痛みはじめた。悪夢ならまだましだ。まとわりついて離れない、この濁りきった空気を振り払うには、いったいどこまで逃げればいいというのだ。

（帰らなくちゃ）

大阪の実家で待っている祖母のことが、ふと脳裏に浮かんだ。脈絡も何もなかった。

ただ、大阪に行きさえすればなんとかなると思ったのだ。

（帰らなくちゃ……!!）

その時だった。

渦を巻いて、大気中の不浄な気配が——そう、『妖気』が——珈織をめがけて凝縮されてきたようだった。珈織は声にならない悲鳴をあげた。圧し潰されてしまう……！

「不埒者めらが!!」

突然、しなる鞭ほどに鋭い、若者の声がそこへ割りこんだ。

足音もたてず、頭上からひとつの影が降り立った。珈織の目前に着地したのは、厳しい眼光を有する、ハイティーンの少年だった。

「非礼を心得よ、雑魚ども!!」

現れるなり、どこへとも定まらず彼は大声で呼ばわった。一喝、というにふさわしかった。

「ここにおわす方がどなたであるか承知の上の狼藉か!! 身の程をわきまえよ、たちどころに消え失せるが良い!! さもなくばこの剣司、たった今きさまらを一掃してもかまいはせぬのだ——どこへなりと散り去れ!!」

どどう、と大気がどよめいた。

重苦しい毒素が不意に離れてゆくのを、珈織は感じとった。

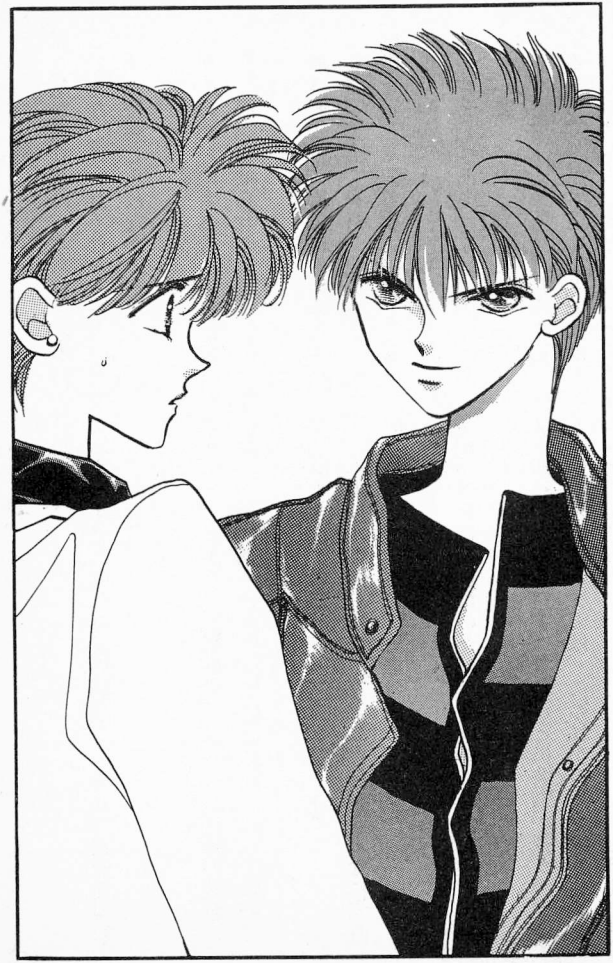
あまりにも速やかな効果だった。何者であろうかと、珈織はその少年の姿を見つめた。

「ご安心を。御味方です」

ふりむいて、彼はまずそう言った。うやうやしく珈織の手をとりながら。

「よもやこのようなかたちで再びお目にかかれようとは……!! 望外の喜びにして……我が身の震え、いまだに収まりませぬ……!!」

せいぜい十八、九にしか見えぬ若者の口から出るには、それらの言葉は違和感に満ちてい



た。

勝ち気な顔立ちの、すらりと背中ののびた少年。

見覚えなどまったくなかった。だが彼からまっすぐに向けられる熱烈な、そして誠実な視線に、偽りは感じられなかった。

「今のは……？」

「道理のわからぬ者どもが妄動に走った様子……。名もなき低級妖者の念が、貴女様の波動にひかれて導き寄せられてしまったのです。私がお側にあるかぎり、もうあのようなことは起こりませぬ」

説明されても、珈織には何のことかよく理解できなかった。

少年は『再会』を喜んでいるようだ……。人違いかもしれない。だとしたら、こんなに素直に感動を示している相手にはとても申し訳ないことのように、珈織は思う。

「……ごめんなさい、何もわからないのよ……」

正直に告白するしかない。おずおずと珈織は口をひらいたのだが、彼は落胆の色をのぞかせもせず、あっさりと頷いてみせた。

「急かずとも……覚醒が進むうちに、すべて明らかとなるはず。これほどに波動が強まっておられるなら、それも遠いことではありますまい。時が到るまでは、この私が万死を尽くしてお守り申しあげる。二度と、あの憎き伽羅王などに妨げられはいたしませぬ！　なにとぞ我が忠

心、お疑いめされぬよう……！」

「……」

驚くほど情熱的に訴えられて、珈織はなにも言えなくなってしまった。

珈織のことを信じきった、真摯な瞳。

「……あなたは？」

「これは御無礼を……。申し遅れたことをお詫びいたしましょう――〈炎将〉剣司にございます」

「剣司……」

「どうぞ早くお気付きになられますよう……九那妃様」

喜びと期待と哀しみが一体となった表情で、剣司はそう呟いた。

九那妃様、と。

だが珈織にはわからなかった。その意味も、それが誰の名であるのかも。

「……私は、行かなければいけないのよ」

ぼんやりと思い出したのは、自分の目的だった。

戻らなければならなかったのだ。大阪に。

「お供いたします、どこへなりと」

剣司が答える。

この時、他の二将に珈織の行き先を伝えてやる気は、もとより剋司にはなかった。——特にあの『鷹木文彦』には。

（愚（おろ）か者め）

文彦、すなわち〈雷将〉勝呂が、伽羅王との一騎打ちに及んだことは剋司も知っている。腑（ふ）抜（ぬ）けでもわかろうというものだ、あれだけの騒ぎになれば。

戦闘の結果については、もはやどうでもいい。彼らが派手にやってくれたおかげで、自分はこの僥倖（ぎょうこう）をつかめたというわけだ……それで充分だ。

この女神は、自らの手で守りぬいてみせる。

（せいぜい伽羅王と遊んでいればいいのだ、奴は！）

……二十四日、三時三十分。現状に対し、剋司もまだ、その程度の認識しか得ていなかったのである。

＊　＊　＊

「彩？」

諒がそう問いかけたのと、亮介が九〇七号室へ戻ってきたのとが、ちょうど同じ瞬間だった。

「……えっ……!?」

耳を疑い、亮介が小さな声を漏らした。受話器を握りしめたまま、諒がふりかえる。

亮介は息を呑みながら彼を見た。とっさに言葉は出なかった。だが戸惑いを消せないのは諒も同じだ——それは互いに目を合わせればわかった。

どうして彼女が。

（あ……！）

彩は、諒が相手ではなにも話すことができない。亮介はそのことに気付き、慌てて一歩前に出た。

『もしもし……？』

もう一度、はっきりと彩の声が呼びかけた。

「……ああ、兄ちゃん、ここにいるよ」

亮介の気遣いはわかっていたが、諒はあえて普通の応答を口にした。

逃げても仕方がない。それでも駄目になってしまったら……その時が亮介の出番だろう。順番を間違えてはいけない。

「聞こえてる……」

回線のむこうからは、動揺は伝わってこなかった。恐れも。

『あの人は……いなくなったの？』

それが、彩の言葉だった。
諒は無言で両眼を見開いた。
なぜ、どうやってそれを、という疑問だけが先走った。しかし——。
牙、か？
「そうだよ」
声を抑えながら諒は短い答えを返した。
「……そう、なんだ……」
超感覚的な方法で、彩はそのことを察知したというのだろうか。牙の消滅を。——そしてその原因を。
なにかを伝えている時間など牙には許されなかったはずだ。にもかかわらず……？　彼らふたりのつながりはそこまで深いというわけなのか？
「？」
ふっと諒はその時、彼女の電話の背景に違和感を抱いた。余計な音が……雑音が。
「おまえ……どこにいる？」
まぎれてくるのは人々のざわめき……!?
「今、どこにいる!?」
『おおさか』

邪気もなく、さらりと彩が答えた。諒は愕然とした。

「大阪!?」

彩がひとりで広島を離れるなど、とても考えられない事態だった。ひとりでは、家を一歩出ることさえ危うい子なのに。

「爺ちゃんたちが、何か――」

『違うの、呼ばれたから』

「呼ばれた……!? 誰に」

『蘭』

「……ラン?」

次から次へと不可解な言葉ばかりだ。

『蘭が、言うの。あの人はまだいるから、教えてあげなさいって。だから電話したの。今はそれだけ……。蘭と会えたら、またかけるね。さよなら』

「なっ……おまえっ……彩っ!?」

話すだけ話したら、もう満足したというように、彩はあっさり通話を打ち切った。

『また、ね……』

「……」

「諒……?」

亮介が問いかけた。唇を結び、諒は首を横に振りながら受話器を下におろした。

「彩、だった」

「本当に？」

「だと思う……」

何かが動いている……どこかで。

すべてを終わらせるため、その非常手段として忍は死を選んだのではなかったのか。たった今まで諒はそう信じていた。……結局、すべての根源は忍の存在ひとつなのだから。

遠い過去からつながる宿命の輪を断ち切るのに、もっとも簡単で効果的な方法は、根源そのものを消滅させてしまうことでしかないのだから。

だが彩からの接触（コンタクト）は、それらの前提を揺るがしはじめるものだった。

まだ流れは止まっていない、ということだ。

終わっていない何かがあるのだ。

（あの人はまだいるから）

（蘭と会えたら、またかけるね）

何だ……!?

これではまるで……斎伽忍という存在を失っても、まだゲーム盤の上には駒（こま）が残されているようではないか……。

IV

終わらせてしまうわけにはいかない、と十九郎はふたりを前にして呟いた。亮介から伏せられていた事情のいくつかを、諒からは先刻の電話の内容を、それぞれ聞き出した後のことである。

「終わらせるということは――つまり、俺たちがここで全部あきらめて手を引くということは、こういうことだ。俺は今すぐにでもこの一件を本家に報告してしまえばいい。そうすれば彼らは、この事実さえ、伽羅王の下した決定として処理することができる連中だ……これが絶対真実に必要な『神の定めたこと』だとして受けいれるのに苦痛も疑問も感じないはずだ。当然、誰も、逆らおうとは思わない。伽羅王の選んだ死に異議など唱えてはならない……」

「当然って……」

つまり誰も、悲しみもしないということだろうか？　亮介にはよくわからない。

「納得する理由に事欠かないということだ。そこに『意味』がもう用意されているということ

だよ、崎谷君。それをあえて否定して、違う意味を見つけだそうとするのは、彼らにとっては無駄な努力だし、さらにいうなら、不敬、でもある。伽羅王に対する冒瀆行為と見なされる可能性さえある」

「え……？」

「難しいかな……。だからもう、『鷹木文彦』や『工藤珈織』や、それから水沢の妹さんが、この件にどう関わっているのかなんて、考える必要はなくなるんだ。何も、考えなくてよくなるんだ」

あとは、本家の連中が、彼らなりのやりかたで事後処理にまわるだろう。

口封じだ。

大金をばらまき、情報を操作し、あるいは実力行使によっても。

それはすでに、一介の術者には関与できない世界の話だ。

「でも……妖者が……」

「戦わずに〈妖の者〉たちと共存する方法くらい、本家はとうに見つけているんだよ」

さとすように十九郎が答えた。亮介はその真意を読みとることができなかった。

「人身御供をさしだしとけば身内は助かる」

ぽつりと、横から諒が言い添えた。

「え……え!?」

「水沢の言うとおりだ。見て見ぬ振りをすればいいんだ、一般の被害についてはね……」
唖然とする亮介に、十九郎までがあまりにも恐ろしいことを口にした。
亮介はなにか言い返そうとして、結局、深いため息をつくのが精一杯だった。なまじな妖者たちよりもよほど、斎伽本家の発想のほうが非道に思えてならない。
「けれど俺は何もせず呑みこまれるのは嫌なんだ。せめて……今だけでも」
十九郎は、そう言葉を続けた。諒は無言でそれを聞き、亮介はふたりの表情から事態の複雑さをさらに強く思い知らされた……。
「本家が乗り出してくるまでに、二十四時間だけは確保した。鎌倉にいるふたりも、その間なら自由に動けるはず、だ」
私情を排した言い方で十九郎が告げる。はっ、とその時になって亮介は胸をつかれた。
そうだ、あのふたりが来る。
まだ彼らがいる。
絶望に浸るより先に。
不思議な感じだ。恋しいような、怖いような思いだ。
「じゃあ里見さん、二十四時間のあいだに、俺たちにできることって……」
亮介が尋ねようとした——その瞬間、だった。
真一文字に、鋭い雷光が窓の外をつらぬいた。音はなかったが、カッ、と室内が蒼白に染ま

った一瞬だけで、亮介たちが異変を悟るには充分だった。
嵐はもうやんだはずだった。すると今の稲妻は。いや……雷ということは……!?
「崎谷君、退がるんだ！」
十九郎が指示するのと、諒が亮介の腕をつかんで部屋の入口近くから奥の窓際まで一気に跳びのいたのとが、同時だった。
「……！」
反射的に自分のそれまでいた場所をふりかえり、亮介は息を呑んだ。
新たな人影が、不意に、そこには出現していた。両腕を組み合わせ、悠然とたたずんで。
亮介はその相手を知っていた。
——鷹木文彦、だ。

雷光をともなって訪れた鷹木文彦は、ひどく苛立った空気を総身にまとっていた。
ただの不愉快ではすまない。今にも噴出しそうな怒りをぎりぎりで自制しているような……
そんな姿だった。
迎える側も、もとより平和的な態度ではありえなかった。
亮介をコンマ数秒で窓際まで押しやっておいて、諒はすべるように体勢をたてなおす。ぶ

ん、と彼の右腕が唸るのを亮介は聞いた。朱雀剣の光が発現する兆し、である。

一方で、十九郎も足元を蹴って窓のほうへ後退し、亮介と斎伽忍とを同時に庇える位置で床に片手をついていた。いつでも結界を支えることができる……。

忍の身体は、諒の手によって、すでに床からソファの上までは移されていた。だがそれ以外に何もできずにおいたことを、十九郎はこのとき後悔していた。せめて事前に目くらましの手ぐらいは打っておかねばならなかったのだ。

〈雷将〉勝呂の前に晒すには、この状態はあまりに無防備にすぎた。……どうする？

険しいままの表情で、文彦は室内の様子を一望する。

「……やはりそうか」

いまいましく吐き出したと思うと、術者たちの姿など目にも入れずに彼はまっすぐ足を運んだ——ソファに横たわる斎伽忍の傍らへと。

「触るなっ!!」

制止したのは諒の声だった。かっ、と眼光に炎を宿らせて文彦が見返った。

「ぬけがらに用はないわ!!」

殺気に満ちた一喝だった。たたきつけられた気魄の凄絶さに、亮介は痺れすら感じるほどだった。

王、なのだ。この人物の本質は。

「水沢……やめておけ」

十九郎がその場を抑えた。ここで戦闘に持ちこんでも意味がない。むしろ彼の来訪をプラスの結果へつなげなければならないのだ。期せずして、亮介に語った例の案が現実のものとなっているのだから。

文彦は無言で十九郎を見やり、そして再び視線を本来の目的へと移した。氷像のように虚しく存在する、斎伽忍――伽羅王の亡骸へ。

「物わかりがよくて結構だ……。今さらここで戦端をひらこうとは私も思わぬ。時間が惜しい」

一点に目を留めたまま、彼は重い声で呟く。

憎しみとも憤りともつかない、不透明な色が文彦の横顔を占めていた。

それは、痛み、にさえ似ている。

宿敵が斃れたことに、彼はなんら喜びを見出していないようだった。すべての結果が彼の望みを裏切っているようでもあった。

「卑怯者め……！」

独白とともに文彦は腕をのばし、生命の火が尽きてもなお凛然として美を失わない『伽羅王』の冷めた頬に、自らの左手を添えて上向かせた。

どれほど非難しても、どうやって呼びかけても、反論も返答も戻りはしない。そんなことは

初めから文彦も知っているはずだった。

「……貴様はいつまでも卑劣で傲慢だ。だがそれが何度でもこの私に通用すると思うな!!　今度こそ、貴様のその思いあがりを覆してみせよう、我が誇りのすべてを賭けて……!!　それこそが私の報復だ!!」

文彦の一言一言が、実際の刃よりも鋭く亮介には感じられた。心に突きささる何かを、それらの言葉は確かに内包していたのだ。

「ぬけがらに用はないんじゃなかったのか」

冷ややかな声を諒が投げたのは、その時だった。

文彦は口元だけで微笑すると、ふっと左手を退けて忍の身から離れた。ごく自然に。

「可愛いなあ、君はさっきから」

がらりと調子の変わった台詞が、文彦から発される。

「まさに忠犬というわけだな。泣かせる話だな、いや実に」

「あんたに泣いてもらっても嬉しくもなんともないんですが」

苦い表情で諒が言い返した。雷将勝呂は現在、あえて『鷹木文彦』の仮面を活用することにしたらしかった。

「そう拗ねるなよ、少年。これでも俺は重要な話を持ってきてやってるのさ。あまり噛みつかないほうが後々のためかと思うぜ。そこのお利口なお兄さんを見習って謙虚な態度を身につけ

たまえよ」

「……だそうですが、里見さん」

にやにや笑う文彦の相手役から諒はさっさと手を引き、後の運びを十九郎に任せた。文彦を前に、冷静に、しかも相手の機嫌を損ねずに会話を進めるなど諒にはどう考えても不可能である。

「評価していただけるのは有難い……とでも申しあげよう」

そんな呟きを返しながら、十九郎は立ちあがり、文彦に向かって一歩前へ出た。

「重要なお話とは？」

「せっかく誉めてるんだからもっと嬉しそうにしてほしかったな、俺としては」

「時間が惜しい……とあなたがおっしゃった。違いましたか」

……やれやれ、と文彦は肩をすくめてみせた。

だがおどけた仕種と裏腹に、彼の両眼には切迫した状況があらわれている。不意に笑みを消し去り、まるで意を決したかのように文彦はその取引を申し出た。

「つまりこれは取引だ。俺は貴様らに伽羅王を取り戻してやる……その代償として貴様らはあの方を俺に引き渡すのさ、九那妃様をな……!!」

V

話の発端は、現代より九百年の昔にさかのぼる。

歴史の裏に秘められながら連綿と、絶えることなく繰りひろげられた大戦が、まったく唐突に、強制的に流れを断ち切られた――その原因が何であったか、ということだ。

あまりにも長きにわたる年月と、あまりにも多くの犠牲とが、戦いの進行にとって大きな妨げとなりはじめていたのは事実である。それでいて熾烈さを増すばかりの局地戦は、本来の両陣営の思惑をはずれ、無辜の民びとを、すなわち普通の人間たちを災禍に巻きこむことも度々だった。それらは疫病や大火、洪水といったかたちで害をなすこともあれば、人間同士の戦乱を誘発し世の政に影響を及ぼすこともあった。

十一世紀後期――京の都を尋常ならざる大火が襲った。この事実はまた、闇の内側において、空者方と妖者方の大規模な激戦が生じていたことを示している。

この戦闘によって、空者総帥〈伽羅王〉は彼の同胞にして部下であった空者二名を失った。

転生する器を得られなかった者、あるいは完全に転生を封じられた者――それらすべてを含め、失われた空者の数は八名まで達していた。

敵方の妖将もすでに残すところ三名……そして味方勢の空者は伽羅王を含め四名である。

戦局は、決して、絶望的とはいえなかった。しかし希望もまた揺らぎはじめていた。敗北せずにいることと勝利することは、必ずしも同義ではないからだ。

そんな折のことである。

日々に倦みつつも、誰もがいまだ、この戦いの続くことを信じていた……その間隙をつくような出来事だった。

出会うはずのない宿敵同士、伽羅王と九那妃がなぜか邂逅を果たしたのだ。

いかなる思いで彼らが再会し、そこでどのようなやりとりが交わされたのか、それは彼ら自身しか知らぬことである。当事者となりえなかった者たちは、後に、確定した現実だけを知らされることとなった。

すなわち――伽羅王は、自らをもって九那妃を封じたのである、と。

＊　＊　＊

鷹木文彦が、CBSを離れて間もなく異変を察知したのは、『前回』の記憶が強すぎるほど

鮮明に灼きついていたからにほかならない。

工藤珈織の足どりを見失った、と悟ったあたりから、文彦は自分自身の不用意さに気付きだしていた。

激闘の果てに、斎伽忍はなぜか最終的な決着を避けた……。その理由を自分は読み違えていたのではないかと、ふと文彦は思い到ったのだ。

伽羅王とその〈使〉とが語った言葉の、どこまでが真実で何が偽りであったのか、たしかめるすべはなかった。

彼女は奪われたのか、奪われていないのか。自分は情けをかけられたのか、それとも——体よく追い払われたのか。

自分が六感の触手をのばせる範囲内に、珈織はいなかった。どこにも。

その代わり。

CBSからさほど遠くない、マンションの一室が、突然、存在感を増したようだった。それは奇妙なことに感じられた。

六本木の周辺については、万全の調べがついている。少しでも、珈織の覚醒にとって余計な要素などがまぎれて来ないよう、『下見』と『掃除』は入念にすませてあるのだ。……それが例の『吸血鬼』騒ぎと関わっていたりもするのだが……その件はともかくとして。

つまり文彦すら見ぬけない類の結界がその場を保護していたということだ。それが現在、な

んらかの理由で、保護を失った状態に変化した……？

この時、文彦は自分の失敗を知った。思い知った。これら物事の流れには、覚えがある。

再び、なのか、と。

また出しぬかれたのか——奴に。よもや伽羅王が、最悪の策に手を出すとは思えなかったが……しかしそれは伽羅王が正気であればの話だ。

だからこそ文彦は来たのだ。ここへ。

そして現実は彼の想像を裏付けただけだった。

過去を、くりかえすことしかせずに……。

＊　＊　＊

「要するにくりかえしだ……九百年前に、伽羅王の打った手とまるきり変わりはしない」

不機嫌な表情を抑えもせず、鷹木文彦はそう説明した。

歴史をさかのぼって語られる真実に、亮介は言葉を失うしかなかった。

斎伽忍は自分自身を、九那妃の封印へと化してしまったのだ。

「……よく……わからない。正確に、どういうことなのか、理屈として」

慎重に、乾いた声で、問いを発したのは十九郎だった。



「伽羅王が、自分自身の生命を触媒に代えたということなのだろうか……」
「面倒に考える必要はない。ある部分を覆い隠すのに、同じ大きさの物を被せる……そういう理屈だ」
工藤珈織の内に存在する九那妃の『識格』に対し、同等の重みをもつ別の『識格』をあてがってしまえばいい。それらは互いに存在を相殺するだろう。
残るのは、宿体である珈織の『識格』だけだ。
珈織という女性の存在はそのままに、九那妃という部分だけが消し去られる。一方で、自らの識格を彼女の内に移したことによって斎伽忍という存在は成立しなくなってしまう。
結果的に、伽羅王と九那妃はともに現世から消滅したように見えるのだ。
ただし封印の効力は永続的なものではない。もしその方法が本当にすべてを終わらせるものならば、今生において九那妃が復活し、伽羅王が転生をなす……そのどちらも起こりえない。
それは九百年前の時点から、とうにわかりきっていたことだった。
「だから奴は卑怯だというのさ」
荒々しく文彦は吐き捨てた。
解決にならないのだ。戦いの結論を先送りにするだけのことだ。それがいかに不毛なことであるか斎伽忍が知らずにいたはずはない……。
（だが純血は絶える）

十九郎はひそかに、そう胸中で呟いている。
おそらく、このまま時を経れば、さして長くかからぬうちに斎伽の純粋な血はすべて絶えるだろう。空者の転生を受けいれる土壌はほぼ完全に失われるだろう。
だとしたら……これが、伽羅王にとってさえ、真実の死となるかもしれないのか。
「そこで、取引だ」
文彦の言葉が、解説の役目をひととおりこなした後に、当初の用件へと戻ってきた。
「利害の一致が生じている、とは気付かないか？」
「……」
それぞれの沈黙が、その場を占めた。
亮介は、他のふたりの表情をうかがった。
すでに文彦は『取引』の内容を口にしてはいる。だが……。
可能なのか？　伽羅王と、九那妃とを、ともに取り戻すことなんて。
なぜか十九郎からも諒からも、明確な意思の表出は見られなかった。亮介は視線を文彦へと戻した。ふたりがなにも言わないのなら、自分で問わなければならない。
はじめから、文彦がこちらを見向きもしていない——つまり、交渉の相手と認めていないことはわかっていた。亮介の自主性を、彼は評価していないのだ。
無理はないかもしれない……斎伽忍にあっさりと自分自身の主導権まで売り渡すような、そ

んな操り人形のように見られていても仕方はないかもしれない……。

「それは、つまり……」

発言しやすい空気ではないと知りながら、だからこそ亮介は言わずにいられなかった。自分の言葉で。

「忍さんのかけた封印を、俺が中和すればいいということなんですか」

「！」

愕然として十九郎がふりむいた。

「駄目だ……それは駄目だ!!」

すかさず否定の言葉をたたきつけてきたのが、諒だった。亮介は一瞬、かっと頭に血がのぼるのを感じた。

「どうして……!!」

理不尽ではないのか。まだ何もわからないうちから否定されてしまうのは。

「崎谷君、そのやりかたについては俺も賛成できない。……無理だ」

十九郎さえが、首を横に振るだけで、亮介にそれ以上の発言も許さなかった。

「……困った保護者に囲まれたものだな、坊や」

口の端にかすかな笑みを乗せて、文彦が呟いた。

「意外とまともな頭を持っていると感心したのだがね……これでは動きもとれないだろう。ず

いぶん不自由な身分に甘んじているようだ、少々息苦しいんじゃないのかい。何だったら俺が連れ出してやってもいいんだぜ……この連中から」

「……!?」

亮介は眉をひそめた。文彦の発言は、それはまたそれで、理不尽の域を出ていない。

「そんな必要はない……」

文彦についていく必要なんて、ありえない。

亮介は低い声で言い返した。だが語尾にまとわりつく迷いを消し去ることはできなかった。

「そうだ、その必要はない。――〈雷将〉勝呂、あなたのお話がそういうことならば、我々がそれに乗ることはない。これで終わりにするべきだ。時間を無駄にするだけだ」

亮介の言葉を引き取って、文彦にそう宣告したのは十九郎だった。

「なるほど……」

軽く、文彦は笑ったようだった。

「……なるほど、傑作だ。傑作なお答えだ！」

がしゃん、と不意に彼は足元にあったガラステーブルを蹴り倒した。激しい高音が、光沢の破片とともに飛び散った。

「聞いたか、伽羅王よ……奴らの言い様を」

苛立ちと嘲笑とが同時にこめられた声で、彼はわざと問いかける。

「ではこちらから逆に尋ねよう、他にどのような手があるというのか!!　伽羅王の仕掛けた封印を、まさかたやすく解き放てると考えてはいるまいな!!　このままでは九那妃様は、九那妃様でありながら九那妃様ではなくなるのだ……!!　わかるか、在るべき精神を失えばあの方は混乱と狂気に呑みこまれてしまう!!　たった今から手を打たねば、あの方が生命を落とすようなことにでもなれば最後、もはや我々にはどうすることもできぬ!!」

時間がないのだ。

工藤珈織としての、宿体である存在にまで、危険が及ぶことになる。

すぐにでも珈織を見つけだし、そして封じられた『識格』を、あるべき場所に取り戻さなければ……。万一、珈織が死んでしまったら、その時こそ、九那妃はもとより伽羅王も、ともに遠い輪廻の宇宙に消えるだろう。永い、永い眠りの世界に。

そうなっては遅すぎる……!

「貴様らも伽羅王の忠臣であるなら……」

「俺たちは忍の家来じゃない」

文彦の言葉を冷ややかに遮って、そんな言葉がそこに投げ返された。亮介は目を瞠った。

諒、だ。

「だからそんな風には考えられない。……足掻くくらいなら、諦めたほうがましだ」

「貴様……」

信じがたい眼差しで文彦はそれを聞き、そしてカッと怒りの色をひらめかせた。
紳士的な態度をとっていられるにも、限度というものはあるのだ。
「……小僧、あまり私を怒らせるな、今の私は何をするかわからぬ……！　この卑怯者に肖るなら、卑劣きわまりない真似でさえ、実行に移せるのだ……」
ばちっ、と文彦の指先で気がはじけるのを十九郎は見てとった。
文彦の立つ、すぐ傍らのソファには——彼が、いる。
「たとえばこの『器』を壊してしまえば、伽羅王は、封印を解いたとしても戻ることはならぬ。……どうだ？」
「……待ってくれ……」
かすかに息をつきながら、再び十九郎は両者の間に割り入った。
「待ってくれ、水沢も……」
冷静に考えれば、そんな暴挙に走ることは、文彦にとっても決して得策ではない。その瞬間に、あらゆる協力体制は成り立たなくなるからだ。中和者である亮介の協力も。
しかし正論がいつでも効果的であるとはかぎらない。
「あなたの言いたいことはわかった……検討する時間が欲しい」
文彦に向かい、十九郎はそう切り出した。
「有益な話を教えていただいたことには、感謝している……。なんらかの方法で、お応えしよ

う。ただ、今は無理だ」

「……うまくかわしたな」

噴出しかけた妖気を抑え、文彦は面白くもなさそうに呟いた。

「どのような手を打つかは定まらなくても、彼女を発見するのが第一条件であることは変わらないと思う。だからあなたが彼女を追う過程に、こちらは決して妨害をしない……それだけは、今の時点で約束できる」

「さらにお利口で結構だ。合格点ギリギリだが、少しはものが見えている」

互いに好意のかけらもないやりとりだったが、衝突の危機が回避されたのは事実である。

方針が決まった後の彼の行動は早かった。

珈織の行き先には、心当たりがないでもない。彼女を見つけだす役目を他人に譲る気は、文彦にはなかった。

「俺のナンバーだ。何かあったらこちらに情報をまわせ」

「何です？」

「奇妙かな？　携帯電話さ」

文明の利器は活用する主義なのさ、と笑ってのけて、そして文彦は来たときと同様、風よりも素早くその場を去った。

……ばん、と亮介が床に両手を叩きつけたのは、その直後だった。
「どうして……!?　何がいけないのかわからない……!!」
怒りの声は、目の前にいるふたりに向けられていた。諒と十九郎のふたりに対して、これほど不可解な念を抱いたことは、前例がないように亮介は思う。
理解できない。大変な岐路に、今、自分たちは立たされているのに……！
「だって他に方法がないじゃないか!!　忍さんの封印なんて、あの人の力で作られた封印なんて、どんなに強い術力で対抗したって解けやしないじゃないか!!　それをまだ、何もしてないうちから――頑張ってもいないうちから……!!」
「崎谷君……この問題は複雑すぎるんだ」
十九郎が答える。亮介とは目を合わせずに。
「利害が一致してしまう……。封印をとくということが、九那妃の復活にもつながってしまう……」
「だから!?　だから何なんですか!?」
さらに憤りが増すのを亮介は自覚した。
九那妃が復活しようがしまいが、それと比較にならないほど大切な目的の前で、ためらう必

要など見つからない。

「じゃあ里見さんは……！　里見さんは、九那妃が封じられてるんだったら、それで、もう、忍さんのことなんてどうなったってかまわない――」

「亮介!!」

鋭く制止したのは、十九郎ではなく、諒のほうだった。唇を嚙んで亮介は見返った。

「何がいけないんだよ……!?」

さっきから、諒の言っていることがいちばんわからない。

わからない。

諦めたほうが良いと言ったり。

すべて頭ごなしで。

「わからせてみろよ!!」

全身の力で、亮介は怒鳴り声を吐き出した。

ふっ、と影がかかった。

すぐ近くまで諒が歩み寄り、膝をつき、正面から亮介の目をのぞきこんだからだ。

「なら、言ってやる」

「……」

わからない。

顔を見ても、瞳の内側を見ても、伝わってこない。それが諒であることが。
ひどく遠い所に彼が離れてしまった。どうしたらいいのかわからない。
「忍が、そうしたくて死んだんだ」
諒が言った。静かな声だった。
「満足して死んだ奴を、連れ戻す権利なんて、誰にもない……」
「……」
そんな……。
そんな理屈で。
「違う……!!」
亮介は首を横に振った。感情が言葉にならない。けれど違う。絶対に、それは違う……!!
「……そんな考え方、もっとわからない!!」
一声、その場にぶつけるなり、亮介は立ちあがって部屋をとびだした。どこへ行こうと思ったわけでもなかったが、そうせずにいられなかった。
(満足!?)
吐き気がする。
(権利……!?)

「崎……」

駆け出した亮介を、十九郎はすかさず追って制止する——つもりだった。今の状況で、亮介をひとりで外に放り出すのは、あまりに危険すぎる。場合によっては実力を行使してでも止めなければと……思っては、いたのだ。

ふと十九郎がそれを中断したのは、諦めたからではなかった。

何かのはずみのように感覚へとびこんできた、新たな存在のせいだ。

すぐ間近に読みとれるのは、亮介とは異なる、別人の生気。

そしてその波動を、十九郎は昔からよく知っていたのだ……。

エレベーターを使わず階段を九階分かけおりたおかげで、一番下にたどりついた頃には衝動の勢いもややおさまっていた。とにかく無意味なかたちで発散したかったらしい、と亮介は自分の行動をふりかえる。……ただの馬鹿だ。

何も、ちゃんとした理屈を返せずに逃げ出すだけなんて。

ぐらぐらになった膝を押さえて、亮介はエレベーターホールの壁を背に、がくりと座りこん

だ。

意味がないことはわかっている。なんとかしなければならないことも。けれど、どうすればいいのかわからない。

どうしたらあのふたりを動かせるのか。どんな言葉なら彼らの言葉に勝てるのか。誰に、そんなことが可能だろう。

「よりによって……里見さんと、諒で……」

その両方を説得するなんて、至難のわざとしか思えない。

かと言って、鷹木文彦についていくことはできない。

自分ひとりだけでできることといったら……。

（駄目だ……!!）

戦う力も身を守るすべもないくせに、闇雲に突っ走ったりしたら、また例の英雄気取りの二の舞いになる。ドンキホーテが許されるのは、失敗しても誰も傷つかない時だけだ。

……八方ふさがりだ。

見通しが、絶望的に閉ざされかけた……そんな時だった。

「おい、何だよ、おまえっ」

いきなり怒鳴られて、亮介は愕然と顔を上げた。

「なあに泣いてんだ、馬鹿、さっさと立てっ！」

「……希……」

名前も呼べないうちに、強引に襟首つかんで立たされた。

「人がせっかくここまで来たってのに、いかにも悩んでますって面で出迎える奴があるかよ、馬鹿野郎っ。ほら背中のばせよ、それから阿呆みたいに俺の顔ばっか見てないで言いかけのセリフ終わらせろ、こっちが落ちつかねえだろ!?」

「……希沙良……」

ようやく亮介は、それが幻でも想像でもなく、本物の和泉希沙良であることを確認した。

「あ……そうか……そうだったんだ、希沙良が……希沙良たちが来るって、俺、知ってたのに……」

まだ目の前の実物が信じられない。

突然、どこかから光明がさしてきた気がした。奇跡のようなタイミングで。

「そうか、そうなんだ……そうか……あ……どうしよう、俺、嬉しいのか驚いてるのかわからな……っ」

「おい、やめろよ、おまえ、そこでまた……」

泣ーくーなー、と希沙良が唸った。

「ちょっと、あなた何なのよ、なんで亮介ちゃんを胸で泣かせてるのよ!?」

「俺のせいかよ、これがっ!!」

さらなる来訪者の声が割りこんで、亮介は希沙良の怒鳴りつけた相手のほうに、慌てて首をねじまげた。

「冴……子、ちゃん……」

――救いの天使に見えた。

彼女が。

「大丈夫よ、亮介ちゃん、もう何があったって驚いたりしないわよ、覚悟は充分にできてるのよ」

まっすぐに亮介を見てそう言ってのける、彼女のつよさが。

「だから……話して。何があったのか、どうしてここで亮介ちゃんがひとりで泣いてなきゃならないのか、その理由も全部」

「……」

亮介はふたりの姿を見つめ、そして頷いた。強く、力をこめて。

第三章　桜舞い

I

「つまりだ、おまえが俺たちにものすごく話したいことがあるのはわかった、何が何でも今すぐここで言いたいのもわかった、わかったから焦るなっ、まず落ちつけっ、おまえ慌てると元からわからねえ話がますますわかんなくなる奴だろうがっ！」

かくのごとく希沙良に叱られつつ、

「そんな頭っから怒鳴ってるだけじゃ亮介ちゃんがますます何にも言えなくなるじゃないのよ、あなたデリカシーってものが大量に不足してるんじゃないの!?　ただでさえ亮介ちゃんってのは繊細な人なんだから、気を遣うにしたってやりようってもんがあるでしょ!?」

と、かくのごとく冴子には庇われながら、亮介は今ひとつ要領を得ない話運びで、現在の状況を彼らに説明した。

ずっと鎌倉の屋敷に足止めされていたはずの彼らが思いのほかすんなりと数々の事実をのみこめたことは、亮介にとって救いとなった。鎌倉を襲ったいくつかの現象と、そして鏡ごしに

見せられたヴィジョンとが、そこに大きく貢献していたのだが、それを亮介が知るのはもう少し後になってからのことだ。

実は希沙良にも冴子にも、ここでまず亮介から得られるだけの情報を得ておかねばならない事情があったのだ……ということも、そのとき亮介は気付いていなかった。

やっと自由の身になった彼らが、それぞれに何を思いながら、何を恐れながら、この六本木までたどりついたのか……ということも。

「要するに……」

亮介の話に一区切りがついたところで、口をひらいたのは希沙良だった。

「斎伽忍はまだ死んじゃいないってことだろ。……上等じゃねえのか、そいつだけで充分」

「……」

冴子は何も言わない。亮介はうまく反応できずに、目の前の希沙良の顔を見上げただけだった。——がつッ、と直後に頭を殴られた。

「そこでボーッとしてんなよ、いいか!? 俺はなあ、とっくの昔に斎伽忍なんざこの世とおサラバして、それでおまえら皆して奈落の底に道連れになってても全っ然おかしくないってくらいのことは考えてきたんだぜ!? それに比べたら何なんだ、おまえら、全員無事でいるわ、雷将勝呂とやらと休戦協定できてるわ、本家の邪魔も入らないわ、おまけにこの俺が来てやるわ……」

「俺たちの間違いじゃないの」
「この俺に余計なおまけまでついてくるわ、基本的に上々の条件だろうがっ!!　考えて損したっ、神経性胃炎おこしてタクシーん中で何回吐きそうになったかわからねえんだからな、俺はっ!!」
「……あ……」
亮介はさらに、どう反応していいか考えられなくなってしまった。
「あ……あ、ご、ごめん俺……」
なにもわかってなくて、と言いかけた瞬間に、再び希沙良の右手が亮介の後頭部を小突きたおした。かなり本気で。
「もう一回あやまったら殴るぞ。今度は手加減なしで」
「……あ……わかった……」
なんだかこの相手は凄いかもしれない。
亮介は心の奥底で、そう認識しなおした。前から知っていたつもりなのだが……これほどたやすく周りの空気を変える人物だっただろうか？
「そうよ、亮介ちゃんにまで謝られちゃったら、こっちの立つ瀬がどこにもなくなるから、そういうことは二度と考えないで！　それより……」
毅然として言い放ちながら、冴子は両腕を組みあわせる。

「問題はつまり、『工藤珈織』っていう人が今どうなってるかっていうことなのね？　無事でいるのか、無事だとしたらどこにいるのか、そういうことよね？」

「うん……」

亮介は頷いた。

「勝呂は、珈織さんの行き先にはいくらか心当たりがあるみたいな感じだった……。まず珈織さんを見つけないことには、どうにもならないって、そんな風に言っていたから、今頃はもう捜しはじめてると思う」

「それからどうするかは、その後に考えるってやりかたね」

呟いてから、冴子は隣にいる希沙良と目を見合わせた。『工藤珈織』がイコール例のヴィジョンにあらわれた謎の女性なら、話はつながる。彼女の姿は、他人と見間違えない程度には憶えている。——条件としては悪くない。

「で……亮介ちゃんの考えはどうなの？　どうしたいと思うの？」

冴子の問いかけは、甘いものではなかった。

仲間として個人的に意見を訊く、といった段階では、今はないのだ。

亮介に求められているのは、鍵となる人物からの、決断の一言だった。

すなわち、唯一の、中和能力者として。

「……うん」

その意味は亮介にもわかっていた。ふたりを前にして、亮介はしっかりとその重さを受けとめようとしながら口をひらいた。

「俺は……少しでも可能性があるなら、勝呂のいうとおり、忍さんにも珈織さんにも帰って来てほしいから……忍さんには、こんなやりかたじゃなくて、もっと別の方法を選んでほしかったから……勝呂のやろうとしてることには賛成したいんだ。敵に協力するなんて本当は許されないだろうけど、だけど俺は自分に何かできるって知ってて知らない顔はできないと思う……」

「……」

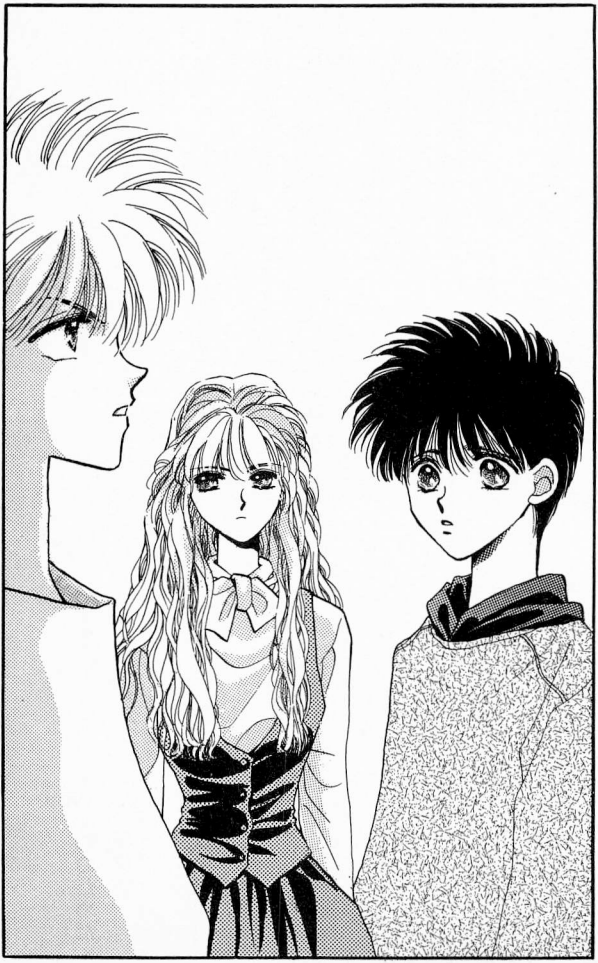
冴子も希沙良も、すぐにはそれに論評を返そうとしなかった。だがその沈黙は否定的なものではなかった。

「……いいぜ、俺もその話、乗ってやる」

ぽつりと、希沙良がそう答えたのが、先だった。

亮介は両の目を見開いた。ひどく簡単に、何の迷いもなく手をさしのべられた感じだった。

「驚くことないだろ、それが当たり前だろ？　いいか、勘違いするなよ、こっちが頼んでもいねえのに、ひとりで自己完結して勝手に決着つけやがったのは斎伽忍のほうなんだからな。何の挨拶もないうちに、いきなり九那妃は消えました、もう心配いりませんよなんて言われてラッキーって喜べるかよ……人をここまで巻きこんどいて、そいつは無責任の極致ってやつじゃ



ないのか?」
眉をしかめながら希沙良は言う。
「だからそんなお節介なお膳立てはひっくりかえしてやったほうが、あの大馬鹿野郎のためだってことだろ。そうでもしなきゃ何度あいつ生まれ変わったって、わかりゃしないぜ!?」
「……」
希沙良らしい明快さにつらぬかれた台詞に、亮介は思わず笑ってしまった。笑えるなんて予想もしていなかったのに。
「何だよ?」
「うん……希沙良のそういう所、やっぱり好きだな……」
「あ?」
「すごく好きだな……」
もっと早く気がつけばよかった。
斎伽忍に関してこんな言い方ができるのは希沙良だけだ。
自分がもし、希沙良のような言葉を、忍にぶつけていられたら、何かが変わっていただろうか……。
「なんでおまえって、いちいちいちいちいちいちいちっ、暗いほうに考え持っていくんだ?」

亮介の表情を読みとり、希沙良が呆れはてた声を出した。
「あっ、ごめ……」
「二度めっ」
ばきっ、と約束どおり希沙良は亮介の頭をはりとばし、返す手でぐいと襟首を引き起こしてそのままエレベーターの内にひきずりこんだ。
「おい、おまえ、どうする？」
何かのついでのように、そこで希沙良は問いかける。冴子に。
「愚問だわね」
一言、あっさり答えてから冴子はふたりに続いてエレベーターに乗りこんだ。
「え……？」
動きだしたエレベーターのなかで、亮介はそろそろと希沙良の顔をうかがった。これから彼が何をするつもりなのか、今ひとつ展開が急すぎて……。
「挨拶くらいはしてから動くのが筋ってもんだろ」
金属扉の継ぎ目を睨むようにしながら、ふりかえりもせず希沙良が答えた。

II

時計の針はすでに五時をまわっていた。

刻一刻、許された時間が残り少なくなっているということでもある。焦ってはいけないと思いながら、心臓のどこかが痛むような錯覚を、亮介はふと意識する。

（！）

エレベーターが九階にたどりつき、ドアが開くときのチャイムを聴いた瞬間、それまでの緊張感をはるかに上回る動悸が胸を襲った。亮介は目を瞠り、そしてそれが自分自身の感情というよりは外側からの影響によるものだと気付いた。——要するに伝染してきたのだ……誰かの気持ちが。

（希沙良？）

目の前のドアがひらいたとき、亮介にもようやくその理由が理解できた。

今頃になって、というべきかもしれない。

なぜなら彼がそこにいることなど、亮介にはとうにわかっていなければならなかったからだ。あまりにも当然のこととして。

「……話し合いに、少し時間がかかったみたいだね」

静かな呟きが迎えた。

希沙良を。

九〇七号室の扉の前で。

「……」

少しだけ顔をしかめてから、希沙良は強引に亮介の背中を前へ押しやり、それに続くかたちでエレベーターを降りた。

「そっちの『お話し合い』に進展はなかったのかよ？」

ごく普通の口調で希沙良が反問する。

あっさりと、十九郎は首を横に振った。

「話し合う余地がない……」

「それって要するに何もする意志がないってことかしら」

確認した声は、冴子のものだ。だが十九郎がそれに言葉を返すより早く、亮介の背中から手を離して、希沙良がまっすぐに歩きだしていた。

亮介はその場に足を止めて、希沙良の後ろ姿を見ていることしかできなかった。

誰もそこには割りこめない気がした。
ふたりの間をつないで見える、はりつめた心の場所には。
冴子が考えたことも同様だったのだろう。彼女もまた、亮介の隣に立ち止まり、それからの成り行きを見守っていた。
黒い扉を背にして、十九郎は何も言わず待っていた。
どのような運命でも受けいれようと、そう自分自身に課した時なら、今の彼のような表情を浮かべられるだろう。亮介はそう思う。いっそ穏やかと呼べるほどに冷静な態度だった。
けれど、だからこそ、どこかに……。
「何だよ?」
不意に希沙良が口をひらいた。
「まだ何か余計なこと考えてるんだろ、どうせ」
「……それが『余計なこと』なら、多分そうなんだろうな」
「俺はもうつきあわないぜ、おまえのやりかたには」
切りこむような言葉に、亮介はどきりとした。
驚いた様子もなく、十九郎は目を伏せる。初めから知っていたといわんばかりに。
「わかっている。仕方のないことだと思う……」
ちっ、と希沙良が舌打ちしたのはその時だった。彼の左手がいきなり十九郎の喉元をとらえ

て、そのまま背後の扉に勢いよく押さえこんだ。扉が派手な音を響かせたが、かまいもしなかった。

「おい、わかってんのかよ!!　本当にわかってんのかよ!!　ハンパに逃げてんじゃねえよ、覚悟しろよ!!　俺は俺で勝手にやるって言ってんだぜ、おまえがいっくら余計なこと考えたって、いくら邪魔したって、俺は俺で勝手におまえについていくって言ってんだぜ!?」

背中からドアに叩きつけられても、十九郎の態度は揺らぎはしなかった。が――一気に吐き出された言葉の終わりで、その彼さえが目を瞠ったのは、亮介の見間違いではないはずだ。

「だから覚悟しろよ、おまえの都合だとか迷惑だとか考えないぜ、俺は！　おまえがあれこれつまらねえこと考えてる間に、俺がやってやる……おまえがやりたいことなら全部！」

「……」

宣言なのか脅迫なのか、今ひとつ判然としがたい態度で希沙良はそう言いきってみせた。

十九郎からの返答はなかった。答えようがなかったのかもしれない。

（おまえがやりたいことなら）

そうだ、建て前は関係ない。

彼の望みなら叶える。

彼が必要とするものならば手に入れる。

それだけの、単純なことだ。それだけのことを今まで、できずにいただけだ。

「見くびるなよ、今は俺のほうがおまえよりよく知ってる。おまえが一番、どうしたいかなんてさ……」

言いながら、希沙良はゆっくりと左手の指をほどいて、十九郎から身を離した。

（だから……）

がんっ！　と今度は靴底で思いきりドアを蹴りつけ、希沙良は声をはりあげる。部屋の内側にいるはずの水沢諒にも聞こえるように。

「おい、そこで聞いてんだろ、田舎馬鹿っ!!　てめえが落ちこんでんのはてめえの勝手だ、好きなだけやってろ!!　けど俺はごめんだぜ……!!」

なにも言葉を返さない、黒い扉のむこう側とこちら側の、両方に届くように。

「俺は認めないからな、こんな終わり方は!!　絶対に認めないからな!!　おまえらがあきらめるんなら、俺がひとりででもあの女を捜し出してやるっ……!!」

「あたしも行くわ」

さらりと、冴子がそこに続けた。

「……またね、諒」

そして希沙良が背を向けエレベーターに戻りはじめても、冴子が亮介の腕に手を添えて同じ方向に進みだしても、十九郎はそれを制止しようとはしなかった。

誰もが無言だった。エレベーターに乗りこむ三人も、それぞれに沈黙を保っていた。

だが……。

ふと冴子の手をふりきって通路へと逆戻りしたのは、亮介だった。

「ごめん、すぐに行くから……！」

「おい……」

希沙良がなにか言いかけた。だが冴子はさっさとボタンを押して扉を閉じてしまった。

「じゃあ、下で待ってるわね」

「ありがとう」

ぴたりと閉まるドアの隙間から、かろうじて亮介の声がすべりこんだ。

「何よ、なにか文句ある？」

下降するエレベーターのなかで冴子は問いかける。

「こういう役目ってば亮介ちゃん以上に適してる人っていないと思うわよ、あたしは」

「里見さん……！」

彼のところまで駆け戻ったとき、自分が何をやろうとしているのか、亮介自身もはっきりわかってはいなかった。

ただ、そうしなければならないと思っただけだ。このままにしては行けないと……。

「あの、里見さん、俺……」
「……崎谷君？」
急きこむように言葉を捜す亮介に、十九郎は落ちついた瞳を向けた。
「あ……」
亮介は声をつまらせた。なぜか、それまで用意されていた台詞がすべて、その瞬間に消えてしまったようだった。
その、十九郎の目を見た瞬間に。
「いいんだよ、崎谷君、ここのことはいいから……」
なにも言えずにいる亮介に、十九郎はそう語りかけた。
「君は君の思うとおりにすればいい。今はもう、誰だって、そんな風に自分のめざすとおりにしか動けないだろうと思う……」
「……里見さんは……」
じっと彼を見上げながら、亮介はぎこちなく口をひらく。
「里見さんは……？」
「……」
無言で、十九郎は首を横に振った。
「俺は、君たちと一緒には行けない……ずっと、ここに残るつもりでいるよ」

「……」

亮介が再び沈黙する。

言葉が言葉にならない時間が、しばらく続いた。

だが亮介がうつむいてしまうより先に、十九郎が静かに言い加えた。

「あの人を『護る』のも俺たちの仕事だと思う……。わかるかな……」

「……えっ……」

亮介は両眼を見開いた。

穏やかな表情は変えず、十九郎がさらに告げる。亮介から視線を逸らさずに。

「崎谷君が崎谷君にしかできないことをやろうと思うように、俺も俺に課せられたことを考えているんだよ」

亮介が中和能力者として、今の現実と戦おうとするように。

なにが求められているかということだ……優れた『静』の術者としての里見十九郎には。

「あ……」

そうか、と亮介は呟いた。

「ああ……そうなんだ、それで……」

考えもしなかった。

走りだす亮介たちの後ろ側で、ここを守らねばならない必然性は、たしかにある。そしてそ

れができるのは十九郎だけだ。そういうことなのだ……。

「だから、君たちは自由にすればいい。ただ、今が本当に複雑な状況だということだけは、いつも意識しておいてほしいと思うよ……」

「……はい」

亮介は頷いた。もっとなにか言いたいことならあったが、うまく言えなかった。

(そうなんだ)

彼もただ立ち止まっているわけではなかったのに。

(里見さんは、里見さんのやりかたで)

そしてそれぞれがそれぞれの方法で戦うなら……それは間違いじゃない。

決して、間違いではないはずだ。

「水沢のことも、崎谷君が立ち止まってふりかえる必要はないんだ」

十九郎はそんな言い方をした。

「結局、水沢がどうするかは、水沢が決めるしかないんだ。崎谷君が、自分で自分のことを決めるのと同じように……」

「……」

「俺に言えた義理ではないかもしれないけれど……」

そう前置きして、彼はまっすぐに亮介を見る。

「今、崎谷君が水沢に対してできることがあるとしたら、それは信じることだけだと思う。崎谷君が決められるのは、崎谷君自身がどれだけ強く信じられるか、その気持ちだけなんじゃないのかな……」

「……」

「なんて……やっぱりそらぞらしくなってしまうだけだね、俺が言うのは」

「そんなことは……！」

亮介は慌てて頭を振った。とてもそんな風には、自嘲的に十九郎が呟いてみせたようには、考えられなかった。

「絶対に……そんなことはなくて……里見さんの言うとおりだって、思って……」

「ほら、これで言質をとられたよ、俺に」

あっさりと十九郎が指摘した。亮介はとっさに何を言われたのかわからなかった。

「……え!?」

「そろそろ行ったほうがいいんじゃないのかな、下でふたりが待っているんだろうしね」

「さ……里見さんって……」

啞然としながら亮介は、意味もなく呟きをくりかえす。

「里見さんって、里見さんって……うますぎる……」

「この性格だけで世の中を渡っているものだからね」

本気で言っているとしか聞こえないコメントを返し、それから十九郎は亮介の肩に手を置いて、エレベーターまでの通路を並んで歩きはじめた。すっかりペースをつかまれたかたちで、亮介はそれに従うしかなかった。

「……正直なところ、俺には水沢の考えはよくわかるし、いまだに自分自身、解答を出せずにいる部分はあるよ」

歩みを進めながら、十九郎はそう語った。

「多分……必要なのは、時間なんだと思う。俺にも、水沢にとっても……」

「……」

「いつも、俺は君を羨んでばかりいるみたいだ。情けないことだと思うよ……」

「……俺は……」

亮介は迷わずに答えを返した。

「俺は里見さんのことを尊敬してます。ずっと、そう思ってます」

「……ありがとう」

エレベーターの前で立ち止まり、そこでふたりは互いに目を合わせた。決して笑えるような時では、今はなかったが……けれど、どこかにまだ希望があると思えることが、亮介には嬉しかった。

「あの……さっきは俺、里見さんにひどいこと言って……すみませんでした……！」

不条理さにいらだって十九郎に激昂をたたきつけた、あの言葉のことだ。
「あれはあれで仕方ない……。崎谷君が本気で怒ったらどうなるか、よくわかったよ」
「……すみません……」
「違うよ、あそこで本気で怒れるから、崎谷君には誰もかなわなくなる」
十九郎の評価は奥が深すぎて、はたしてそれで誉められているのか貶されているのか今ひとつよくわからない。だがその台詞の後に彼からさしのべられた右手に、亮介はただストレートに感動した。
「気をつけて……。できるだけ細かく、連絡を入れてくれ」
「はい……！」
その右手をしっかりと握りかえしながら、亮介は頷いた。それは静かな握手だったが、まるでそれによって十九郎から力強いオーラを分け与えられたような気がした。
そして十九郎はこんな言葉で、エレベーターに乗る亮介を送り出した。
「希沙良と冴子さんに伝えてくれ、いずれ近いうちに俺が援軍を送りこむから……。俺だって、いつまでも水沢に居座られたら鬱陶しくて仕方がないからね」

III

いきなりの電話で、何の説明もせずに呼び出したのに、神原亜衣は驚くほど早く待ち合わせの場所まで駆けつけてきた。東京駅の構内、新幹線コンコースのすぐ傍らにある小さなカフェテリアが約束の店だった。

小柄な彼女の姿がまっすぐに目の前まで近づいてきたとき、亮介は思いもよらず涙ぐみそうになってしまった。ひどく久しぶりに会う気がしたから、というより……こんな時でも、何がどう変わっても、しゃきっと背筋ののびた彼女の態度だけは決して変わっていなかったからだ。

「崎谷君!?」

現れるなり愕然としたように、亜衣は亮介に呼びかけた。

「やだ、どうしたの……？」

「え？」

「すごく参ってるって、顔に描いてある」
カウンターテーブルの椅子に腰かけて亮介と並びながら、亜衣は一言で指摘してみせる。
「あ……違うよ」
亮介は首を横に振った。
「違うって何が？　嘘ついたって説得力がないんだから、崎谷君の場合」
「だから嘘じゃなくて……かなり参ってたけど、もう平気になったから、今」
過去形を使って言う亮介に、亜衣はかすかに目をまるくした。
「……崎谷君って少し、凶悪になったかも」
オレンジジュース取ってくるから、と彼女は立ちあがりオーダー受付に向かう。亮介は店の壁にかかった時計の針を見上げた。午後六時三十五分。
亜衣の言うとおり、亮介が『すごく参って』いたのは確かだった。六本木のマンションを出るなり貧血をおこして希沙良に「自分がヤバいかどうかくらい自覚しとけっ!!」と思いきり叱られたあたり、言い訳ができない。結局、そんな理由もあって、そこから希沙良はひとり新宿方面へ向かい、亮介と冴子は東京駅に直行して、後にこの店で合流することにしたのだ。
「取ってきたわよ、切符。大阪行き三枚」
窓口から冴子が戻ってきた。
「七時発。強権発動で個室キープしたから」

「……個室って何?」

旅慣れない亮介が問いかえすのと、グラス片手に亜衣が現れるのとが同時で……途端、

「きゃあああっ、亜衣ちゃんじゃないの、嬉しい、ずっと会いたかったのよあたしっ」

「いやだ、嘘、冴子さんがいるならいるって言ってくれなくちゃ駄目じゃない、崎谷君ってば、もうっ」

女性同士の感激の再会および麗しの抱擁がくりひろげられることになり、亮介は口を出すタイミングすら失ってしまった。どうして女の子たちというのは、いつでもどこでも即座にこの状態にはまりこめるのだろう?

「冴子さん、それはとりあえず」

「置いといてってことでしょ」

「大阪って何なの?」

あっという間に切りかえて、亜衣が尋ねてきた。

「それにCBSの事故。今、大騒ぎになってるけど、あれってもしかしなくても……」

「うん……今から説明する」

亮介は頷きかえす。

なにもこちらからは知らせていないのに、きちんとCBSの一件をつなげて把握しているところが凄いと思う。亜衣は亜衣なりに事態の流れを見守っていたということだ。

「実は、亜衣ちゃんに頼みたいことがあって……」

＊　＊　＊

凄まじいスピードで明治通りを北上する、真っ赤なオートバイがある。改造車だ。

カウルにはなぜか派手な猫マークのステッカーが貼られている。妙に可愛らしい絵柄が、その暴走ぶりと不釣り合いだった。

明らかな制限速度違反、しかも二人乗り、さらに同乗者はノーヘル、という警察を敵にまわしきった態度で、その赤猫バイクは悠然と都心の渋滞をつっきった。

「じゃあ目白通り、入ったトコで、止めりゃいんだよねえ!?」

メットの内側から運転者が確認の声をはりあげる。

「何だっていいから無事に着かせろっ!!」

「乗っけてもらっといて言うセリフがそれー!?」

交差点を大回りして歩道に乗りあげ、まあまあ中流といった風情のマンションの正面でバイクは停止した。

スピードが落ちるなり、まだ車体が完全に停まらないうちに、後部シートから勢いよく背の高い影が着地した。——和泉希沙良である。

「サンキュ、助かった」
「落とし前よろしくねえ、和泉だから乗っけてんだからね、あたし」
「わーかった、礼は今度まとめて払うから待ってろっ」
「あたしすっげえ期待して待っててていいかなあ!? ちゃんとカラダで払ってよね、カラダでえっ」
「こぉの不良娘っ!!」
はじめっからラーメン大盛おごりっつー約束だろうがっ、と怒鳴りながら、希沙良はさっさとマンションの入り口に走りこんでいく。
「ちぇ——っ!! 一回くらいやらせろよ、ばあかっ!!」
桃色のヘルメットをずらして、ショートカットの少女が叫んだ。
ガラス扉の前でふと立ち止まり、ひらりと希沙良は片手を振ってみせた。
「でもマジで助かってるぜ、陽子っ。ラーメンにアイスクリームつけてやるからさあっ」
「あああ、そうかよ、楽しみで涙が出らあっ」
「だから帰り道も頼んだ、東京駅までなっ」
「こぉの女たらしっ!!」
たどりついたマンションは、亮介から場所を聞き出した、工藤珈織の住まいである。
独り暮らしの人間を対象にした、ワンルームだけの集まった建物だ。希沙良は一息に四階ま

での階段を駆けあがった。つきあたりの、他の部屋の並びからは少しはずれたところにあるのが、めざす目標のはずだった。

大手テレビ局の前途有望アナウンサーにしては、あまり住居に金をかけていないようだ。建物の造りから希沙良はそう判断する。珈織がその収入からいくらかを差し引いて大阪の実家への送金にあてていたためなのだが、そこまでは希沙良にはわからない。

重要なのは、工藤珈織の実家が大阪にあり、そしてそこ以外に珈織に帰れる場所はないという現実だ。

さらにその同じ場所『大阪』に、なぜか異様なタイミングのよさで水沢諒の妹がたどりついているという……暗示的な事実もある。

ふたつの要素がどこまで関わっているか、予測などはまったくつけられないが……。

「!?」

階段をのぼりきったところで、希沙良は足を止めた。

人気のない踊り場で、眉をひそめる。

「おい、なんだ、おまえら……」

呼びかけた相手は、実体を持った存在ではなかった。

常人の目には映らないものだ。

工藤、と表札のついたドアの左右を守護するように、それらは暗がりにひそんでいた。

陽炎のように像の輪郭は今ひとつ定まらない。

だがそれは、けもの、だった。半透明な気によって姿を構成された、それらは二頭の獅子だった。

いや……獅子に似ているが、どこかが違う。あらあらしい双眸を埋めこまれた、幻の化け物。一対の、大柄な犬の組み合わせ……。

(狛犬か!?)

ようやく、希沙良は腑に落ちた。

見覚えがあると思ったら、そういうことだ。

「居場所まちがえてないか、こいつら」

希沙良の呟きに応えるように、左右の幻像はオーラをゆらめかせながら身動きした。

「神社だか寺だか知らねえけど、元から似合いの所に戻ってたほうがいいと思うぜ」

言いながら希沙良は両の手を持ちあげる。

この二頭が侵入者を阻むために配置されているのは明らかだった。いったい誰の差し金なのかは、まったくわからなかったが……。

邪魔を入れてくるなら、こちらはこちらで遠慮する理由なし、である。

それが誰でも関係ない。とりあえず今は。

「急いでんだよなあ、今はっ!」



ふっ、と拳を握りしめた瞬間、強烈な銀光がそこから発された。
研ぎすまされた力が、光になる。自らの両手に鋭利なオーラを集中して、希沙良は片膝を下に落とす。重心を下げたほうが、次の瞬発に役に立つ。そして……。
仕上げは宣戦布告の一言。
「来るならまとめて来いよ……そっちのほうがケリが早いだろッ!?」

＊　＊　＊

「なんだか……」
手短にひととおりの事情を説明された亜衣は、さすがに戸惑ったようだった。
「いつの間にか、あたしの考えつきもしない所まで、話が行っちゃってるみたいで……」
「うん……」
それは亮介自身の感想でもあるのだ。
もう、今は、誰にとってもその条件は同じなのではないだろうか……。
だからこそ里見十九郎も言っていたのだろう。——こうなったら誰もが、自分のめざすとおりにしか動けない。
「あたしにもわからないな……どうするのがいちばん正しいのか、とか……。みんなが戦った

り危ない目にあってたり、そういうのは嫌だと思ってるけど、でも崎谷君たちが諦めたくもないことを無理に諦めちゃったりしたらね……それはそれで嫌だと思うの。だってそうしたら崎谷君はもう、前を向いて進めなくなるじゃない？　どうして諦めたんだろうって後悔しながら、これからずっと暮らしていくことになるじゃない？　……そういう崎谷君を見なきゃならなくなるのは、つらいと思うし……」

「……そうだね。俺も後悔してる顔をずっと亜衣ちゃんに見せてたら、きっとつらくなると思う」

亮介は頷き、ふと思いついたように言った。

「でも……それって大切なことだよね。それが大切なことなんだよね。亜衣ちゃんが俺のことを見ててくれるんだって、俺がいつも忘れないでいるってことが、つまり……あれ……？」

口ごもる亮介の横で、いきなり亜衣はがくりと両肩を落としてしまった。

「ちょっと待ってよね、崎谷君、そういうことに今頃……」

「ご、ごめん、気がつくの遅い……よね」

「遅すぎるわよ、めちゃくちゃ遅いわよ、大遅刻よ!?　あたし昔っから、最初っから、崎谷君にはずっとそのことを言ってきたってのに……！」

はあああ、と亜衣は大きなため息をつく。亮介は恐縮して頭をさげた。

「ごめんなさい……」

「……だけど崎谷君が自分でそうやって気がついてくれたんだから、それがいちばんいいのかも」

亮介を見つめかえしながら、亜衣がそう言った。え？　と亮介が呟いた。

店の外で待機状態だった冴子が亮介たちのいるカウンターテーブルまで歩み寄ってきたのは、その時だった。

「亮介ちゃん、ちょっとおかしいわ、こんなに時間かかるはずじゃないのに……」

「あっ……もう七時前？」

亮介は慌ただしく立ちあがった。……希沙良がまだ到着しないのだ。

確かに、それは少し妙だった。ただでさえ時間感覚にうるさい希沙良が、なにごともなくて遅刻してくるとは、あまり思えない。これがあの水沢諒ならともかく。

「手間どってるのかな……」

「にしたって、たかが家捜しでそう時間かけられるもんじゃないわよ」

冴子が言う。亮介は眉をひそめた。

「……とにかく……時間ギリギリまで待って、それで駄目だったら、その後のことを考えるしか……」

「和泉君ってどこに行ってるの？」

亜衣が傍らから問いかけた。

「なんだったらあたしがここにいて待ってるから、崎谷君たちは先に出発してもらっても……」

「それができればいいけど、そうはいかないのよ。あたしたちの『行き先』ってば、その和泉君が調べてきてくれないことには決まらないものだから」

難しい表情になって、冴子が答える。

知りたいのは工藤珈織の『実家』の場所なのだ。

自宅ならば亮介が一度足を運んでいるのだが、大阪のほうの住所まではわからない。CBSは大崩壊した直後で、社内から情報を引き出すには無理がある。

どうせだから様子見も兼ねてひとっ走り行ってくる、と……そう言って希沙良は新宿区方面に向かったわけなのだが。

「まさか……」

口元を片手で押さえながら亮介は呟いた。

「珈織さんが、部屋に……戻って、いたりとか……」

「だとしたらまず勝呂がチェック入れたと思うわよ、真っ先に」

「ああ……そうか、そしたら違うよね、やっぱり……」

冴子に指摘されて、ますます想像の余地がなくなってしまった。亮介は頭を抱えたくなったが、とりあえず店の外に出てすぐにでも動ける状態を保つことにした。

この期に及んで、もっと悪い想像なんかしたくないものだ。

（今でもう充分なんだから）

にもかかわらず亮介は成り行きで、ふと考えを別の問題まで飛ばしていた。ひらめいたことがあったのだ。決して良くない想像が。

勝呂はまったく単身で行動しているようだったが……それは何故なのだろう。

誰の手助けも必要ないといった風情で。

よりによって三将軍のひとりが、どうしてあそこまで何もかも自分だけで事を運ぼうとするのだろう……？

ということは、たとえば『皓』や『剣司』は……。

「崎谷君、崎谷君……!!」

亜衣に袖をつかまれて、亮介は我に返った。

「あ……」

指差された方向には、希沙良の姿が見えていた。人の流れに邪魔されながら、まっすぐこちらへ走ってくる。これといって何もダメージはないようだ。亮介は自分が深々と息をついているのに気がついた。

（怖いな……）

心臓に悪いことばかりだ。多分これからしばらくの時間、ずっとそうなのだろう。

「悪いっ、遅れたっ!!」
「遅すぎるわよ、発車まであと五分ないじゃないのよっ!!」
一喝したのは冴子のほうだった。
「わめくなよ、一分ありゃ間に合うだろッ」
「極端すぎる基準を他人にも押しつけないでほしいのよね……」
「じゃあ、行こう。とにかく間に合ってるんだし」
亮介の声がその場をまとめる。はっとしたように、亜衣が目を上げた。
「……ホームまで一緒に行っていい?」
亮介は少し意表をつかれてふりかえり、それから頷いた。急ぎゃいいんだろっ、とこぼしながら希沙良が新幹線改札口をめざして、先に立って走りだす。はぐれないようにと亜衣の片手をとり、亮介もそれに続いた。
「あ、おまえ、これ持ってろ」
走りながら希沙良が紙の束を冴子に放りやった。受けとって冴子は顔をしかめる。
「これって——手紙?」
「差出人のとこ見てみろ、それ」
工藤珈織さま、と記された封筒を裏返して、冴子は差出人の住所と名前を確認する。
「大阪……『工藤らん』……!? えっ、ちょっと、これって……」

「なかなか凄いだろ!?」

改札をぬけて、ホームに上がるエスカレーターに足を進めて、そこで希沙良は冴子をふりむいた。

「収穫はそいつだけど、変な歓迎もあったぜ、ぶっ潰してはきてやったけどさ……」

「結界でも張られてたっていうの!?」

「でかい門番が二匹！」

「変じゃない、それって!?」

「変だから言ってんだろ!?」

珈織の部屋はもぬけの空、そして電話の留守録にはCBSからの呼び出しだけが入っていた。誰かが出入りした気配はなく……。

それなのになぜ、そこに余計な妨害など用意されていなければならないのか。

「なんだか面倒なことになってるんじゃないのか……？」

希沙良はそう呟く。

まだこちらに見えていない要素が、残されている……？

「だからって、あたしたちはあたしたちで止まるわけにはいかないわ、違う!?」

きっぱりと冴子が言いきった。

見事に立ち止まってる奴もいるぜ、と言いかけて、結局希沙良は何も答えずにおいた。

今はそれが語られるときではないと、希沙良も知っていたのだ……彼なりに。

IV

「かぁごめ、かごめ
籠のなかの鳥は
いついつ出やる……」
夕映えのあざやかな空を見上げながら、橋の欄干にもたれて、彼女は小さく唱えている。
背後の車道を、高速で何台もの自動車が走りすぎてゆく。橋の上から見える景色は、雑然とした建物の大群。緑の少ない、都会の街並み。
幼女のように邪気はなく、誰にも気付かれぬほどひっそりと、彩は呟く。
「籠の、なかの、鳥は……」

＊　＊　＊

……置いてきた駒がひとつ、潰されたようだ。

〈炎将〉刻司はひそかに眉をひそめていた。あえてそれを報告して女神を動揺させるつもりもなかったが。

（追っ手がかかっているというわけか……？）

おそらくは例の、いまいましい伽羅王の配下の者たちが。

あの小煩い術者の連中が、刻司は嫌いだった。世の中に、好きな対象よりも圧倒的に嫌いな対象のほうが多い刻司としては当然なこととも言えたが……だが本来なら、ただの雑魚どもに対して明確な感情など抱く必要はないのだ。

にもかかわらず『彼ら』には、刻司の憎しみを向けられるだけの資格が存在した。その理由があくまで自らの私怨であることは、刻司も承知している。

一将たるもの、側近ひとり消されたことにいつまでも拘泥すべきではないのだ……。

「しかし、これは……私が奴らを蹴散らしたとしても、理に適うということだな？」

ふと刻司はひとりごちる。小声で。

広い駅の構内で、その呟きは騒めきに呑みこまれた。

すぐ傍らで公衆電話にコインを入れている彼女――工藤珈織には、なにも聞こえなかったはずだ。

無言で、剋司は笑みを浮かべた。この分だと面白いことになりそうだったのだ。いくら〈雷将〉勝呂とて、異は唱えられまい……この件に関しては。放っておいたら奴らが女神に害をなすのだ、それを妨げるためにいかなる手を打ったところで勝呂に『邪魔』呼ばわりされる筋合いはない。

（私はついている）

そんな確信が、彼に力を与えた。自らの幸運を、剋司は信じきっていた。

すべての幸運の源は、このとおり間違いもなく、たった今、眼前に姿を見せているではないか……。

「もしもし……もしもし!?」

慌ただしく十円玉を挿入口に呑みこませながら、珈織は呼びかけをくりかえした。

急がなければならないとは思っていた。なぜそう思うのか、遅れたら何がどうなるのか、まるでわからないままで。

「あ……あたしです。珈織です……！　今ね……大阪まで来てるの……帰ってきたの……それ

で、だから今……」

『……姫様……!!』

不意に返った声は、珈織の知っている、祖母の声ではなかった。愕然として珈織は自分の握っている受話器を見つめた。

祖母の声ではない。

もっとずっと若い女性の、声だ。

(何……!?)

『姫様、あれほど……あれほど申し上げましたものを……！　近づいてはなりませぬと……!!なぜもっと早く戻られなかったのですか……!?』

それは叱責の言葉だった。

激しく、真摯な……。

(どういうこと!?)

混乱が脳裏に渦巻いた。珈織は全身が震えるのを感じた。——誰の声!?

信じていた世界の軸が、突然、消滅してしまったようだった。自分の立っている足元が危うくなる感覚。目眩。

ここが何処で、今が何時なのか。

目に見えるもの、耳に届くもの、それらの何が真実で何が嘘なのか。

わからない。すべて。なにもかもが。

『姫様？』

……狂ってゆく。

「あ……！」

気がつくと、珈織の手は自動的に受話器を降ろしてしまっていた。じゃらり、と余った十円玉が二枚、受取口に落ちてくる音がした。

電話をかけなおす気にはなれなかった。

ただの間違いかもしれない。ただの幻聴にすぎないのかもしれない。もう一度、冷静にダイヤルすれば、そうすれば今度は元通りの日常が……。

けれど。

「？」

はっ、とそのとき珈織は最大の衝撃に立ちすくんだ。目の前の広告ガラスに映った、自分の姿が——自分自身の姿が、その原因だった。

なぜ今まで、今になるまで気付かずにいたのだろう。

ほんのわずかも。

「……私……!?」

そこに、珈織の憶えている珈織の姿は、見つからなかった。まるで別人のように……いや、

すでに別の存在と化した女性が、けれどそこには、工藤珈織として、確かに、立っていたのだ……。

V

桜。

風に舞い散る、一面の桜吹雪。

窓辺に切りとられた外界の景色と、そして穏やかなその空気を憶えている。

迫りくる春の声を、今でも憶えている……克明に。

『決めたわ』

ウェーブの髪を激しい風になびかせて、迷いのない瞳で冴子が告げた。

『忍様は、あたしの自由にすればいいって言ってくださるから……だからあたしは……』

冴子の自由なら、忍は全力をかけて守っただろう。どれほどの障害が一族の内から差し向けられてこようとも。

普通の高校生として暮らせばいい。彼女にはそれが許されていた。まるで忍自身には許されなかった時間を、代わりに取り戻そうとするように。

『だからあたしは忍様のために働きたいの』

――だからこそ平凡な女子高校生としての生活は、冴子の未来から排除されることになったのだ。

忍の手助けができるのなら、それで良いのだと……彼女の姿勢が語っていた。

どんな自由にも、彼の手足として働いていられる、その実感がなければ意味はないのだと……。

殉教者（じゅんきょうしゃ）めいた彼女の言い様に、賛同する気持ちはまったくなかった。反発と疑問とが共に生じた。それだけだった。

（女は都合がいいんだ）

いくらでも感傷に浸れる。献身に酔うことができる。女なら。

どこまでもついていってやればいい。あの独善的な神の化身が進んでゆく、寒々としたその道を、気のすむまで。……いっそ世界の終わりまで。

『あなたはどうするのよ、決めたの？　これから先のことを』

願わくば尋ねてほしくなかった言葉が、容赦なく冴子の口から発される。
彼女には関わりのないことだろうのに……。
『もう、あなただって自由になれるのよ』
関わりなど……。
『自由になっているのよ。——諒』

ごう、と風が鳴った。渦を巻いて花弁が身をとりまき、走り去っていった。
早咲きの桜に埋められた庭は、がらんとして、いかなる来訪者のことも拒まずにいるようだった。あまりにも不用心に、あっけなく、あっさりと解放されていた。
立ち入るものが春嵐であろうと歓迎されざる客であろうと、誰も咎めることはない。
なにものが訪れたところで、さして重要ではないようだった。それが天使であれ、あるいは死神であれ……。
斎伽忍が別宅として利用するには、ひどく簡素な、そして寂しげな屋敷だった。なぜ忍がその春を高尾の別宅で過ごしていたのか、なぜわざわざ冴子が同行していたのか、諒は知らない。ただ彼がそこにいるという事実だけを電話で知らされて、いくつかの電車を乗りついでたどりついたら、冴子がそこにいた。単にそういうことだ。

『忍様なら奥の部屋にいらっしゃったわ、今なら他に誰もいないわ。相談があるなら済ませていったら？　――そのために来たんじゃなかったの？』

人の心の裏側を見透かすような物言いは、初めて出会った頃からずっと冴子の専売特許だった。そんな傍若無人にいちいち腹を立てずにいられる程度には、諒も彼女のやりかたに慣れはじめていた。

……すでに、もう、春なのだ。

出会いは夏だった。

すべては彼の出現から始まった。

破壊と救済とを両の手にたずさえて降り立った、冷酷な黒衣の使者――。

息苦しい日常は、完膚なきまでにたたきのめされた。望んでいた解放は、望んでもいないかたちで与えられることになった。

喪失の二文字によって。

気がつけば、眼前にあったのは、振り払いたかった重荷でもなく、保護すべき対象でもなく、ただひとり――斎伽忍という名の青年だった。

それから空白の秋が過ぎ、偽りあった冬が過ぎた。言葉さえ失いつづけていた心は、まず憎しみを取り戻し、反抗することを学び、痛みを認識し、やがて会話の方法を摑みなおした。なにもかもがゆるやかな時間のなかに守られていた。いつかその場所を卒業する時が来るなど

と、想像することさえ避けられていた。

いや……感じてはいたはずだ。

あの閉ざされた部屋のなかで、きっと自分も、そして忍も……知っていたはずだ。

終わらせなければならないことを。

誰も、立ち止まりつづけてはいられないことを。

（言えばいい）

重い扉をひらき、人気（ひとけ）のない洋館に諒は足を踏みいれる。まっすぐに暗い廊下がのびている……奥の部屋まで。

（忍から言えばいいんだ）

こちらの意向など、忍が問う必要はないのだ。

忍はただ一言、告げればいい。選択の余地は残されていない、と。

おまえが立ち上がって動けるようになったなら、それは好都合なのだ、と。

はじめから、そうして自在に操れる術者としての価値しか、おまえにはないのだ——そのためにこそ遠い広島（ひろしま）からおまえを拾ってきたのだから、と。

わからせればいい。いくらでも腕ずくで。強圧的に従わせることなら、大の得意でいるくせに。

そうすれば、どれほど自分は楽になれるだろう……。

（楽に）

不意に、ずきりと胸を刺す感情を諒は自覚する。桜舞う景色が幻のように瞳に灼きついて、そのせつなさを助長した。

何故だろう……!?　憧れに似た感情の理由を、苦しいほどの衝動の行方を、諒はまだ知らない。

……まだ何も。

唇を噛みながら、けれど開かねばならないドアへと諒は近づく。

だが把っ手を動かした瞬間だった。部屋の内側からの圧力が、自動的に扉を手前へとおしひろげた。意表をつく強い勢いに諒は目を瞠り、そしてその犯人が窓からの風であることを知った。

やわらかい、桜まじりの春風が、正面から吹き抜けてくる。なぶられた前髪を片手でかきあげながら諒は室内に目をやり、その部屋の主を捜した。

意外なことに彼の姿は、すぐには見つからなかった。彼からの声も投げられてこなかった。ひどく静かな、穏やかな空気だけが、桜色に溶けこむように広がって……。

古びた本棚が並んでいるほかには、ろくな調度も装飾もない部屋だった。大きな窓からのぞめるものは庭の木々と、緑と……。

（!!）

諒の息が止まったのは、そのときだった。

なぜ最初に気付かなかったのだろう。

斎伽忍は、そこにいた。諒の目の前に。窓際に据えられた木製の椅子の上に。

その双眸を閉ざし、優しげな風に身をゆだねるようにして。漆黒の髪を、さしこむ陽光と透明な大気とに晒しながら。

微睡みのなかに。

（……忍？）

呼びかけようとした名前は、声にならぬうちに抑えられた。

あまりにも彼の眠りが……儚くて。

触れただけで崩れる宝石を前にしたような、そんな気分だった。それはひどく貴重な、繊細な、そして侵しがたい瞬間の……。

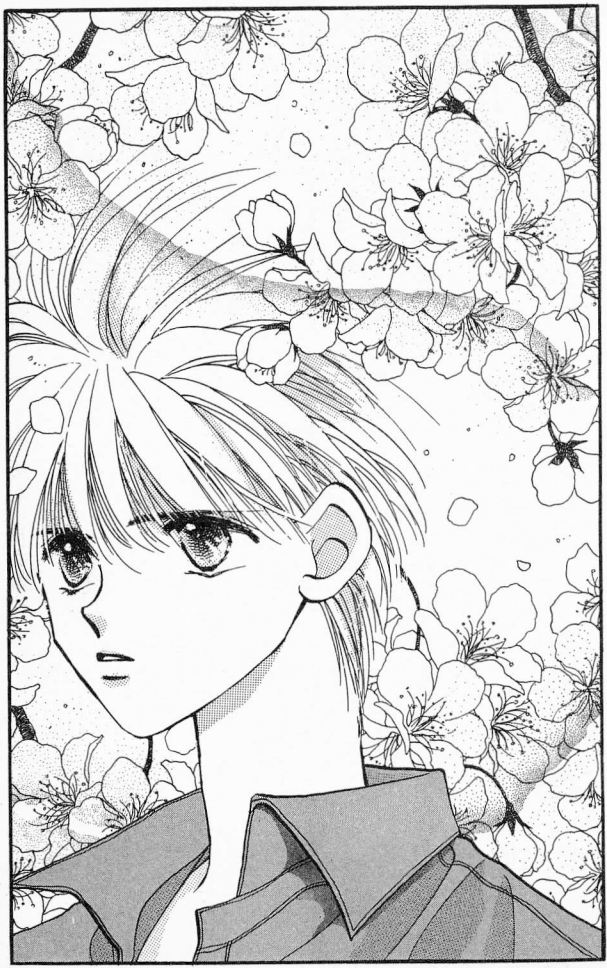
聖域。

雪のように舞いこむ桜と、枝ずれのざわめきと。

遠くから届く、小川を流れる水音。

必要なものはそれだけの。

瞬きもゆるされぬほど、わずかな影さえも落とせぬほど、その光景はうつくしく現世に存在していた。すでに時間は無意味なものと化していた。ひらいた扉に手をかけたまま、諒はいつ



までも立ち尽くしているしかなかった……窓辺から目を離せずに。

（どうして）

ふと胸に浮かんだのは、素材ともいうべき、ひとつの疑問だった。

（どうしてこいつは生きているんだろう？）

……なぜここに在るのだろう。

こんなにもこの世に不似合いな、〈天〉や〈神〉に近すぎるものが、どうして今、自分の目の前にあり得るのだろう？

それを奇跡と呼ぶのなら……。

彼が今ここにいる事実より、さらに確実な未来を、諒は知っていた。けっしてはずれようのない予測として、すでに知っていた。

きっと彼は死ぬのだ。遠くない将来に。

最後には、誰もが平等に裁かれる。どんな運命をたどろうと、用意される結末はかならずひとつだ。……忍はそう言った。

けれど特別製の翼を与えられたイカロスは太陽の高みまで飛翔（ひしょう）して、そのまま生命を奪われたのではなかったか。

まるで「奇跡」とひきかえに。

突然、胸元に風がおしよせた。淡い紅(べに)のはなびらが流れ、視界をさえぎった。間を隔てられる……彼と。

『……忍……!?』

静寂を壊して呼びかけたのは、そこに恐怖が生まれたからだ。

『忍……!!』

叫びたくなど、なかったのに。

本心をあらわしてしまうこと、など……。

『……どうした?』

あくまで平然と、何事もなかったように、声が返った。開かれた瞳はまっすぐに諒を見つめ、嵐が去った窓辺に腕を添え、さらりと忍は応えたのだ。

『どうした? 桜が怖いのか?』

いつもどおりの口調で。

『――それとも僕が?』

あえて挑発するような、そんな言葉で。

どう答えてみせたか、諒は憶(おぼ)えていない。ろくな返事はできなかったということだ。だがあ

のときの光景が、あのとき自分が感じた思いが、なにかのきっかけになったことは確かだった。

なにかが生まれ、なにかが終わった。

諒が、忍の指示の下に全国をまわりはじめるのは、それから間もなくのことなのだ……。

＊　＊　＊

崎谷亮介を送り出した時点から、次の行動を起こすまでに、十九郎にはしばしの時間が必要だった。

片付けなければならない用件は、まだいくつかある。……それはわかっている。

（あとは……）

吐息しながら、痛みつづける額を十九郎は右手の甲でおさえた。かすかな頭痛がずっとまとわりついて消えないのは、蓄積された疲労のためか、それとも神経に残っているショックのせいなのか……他にも心当たりがありすぎてどうとも定められない。いずれにしても今はかまっていられない。

動きだすのだ。一刻も惜しまずに。

こんなところで立ち止まっている場合ではないのだから……。

「！」

意志に反して、十九郎の肩は通路の壁に打ちあたり、そこで動きを止めた。壁に手をついて身体を支え、十九郎は舌打ちする。ひどい醜態だ……気をぬけばまっすぐ歩くことさえできなくなる。

これが実情だ。いくら取り繕ったところで、自身がこの状態では……。

（水沢を戦列に送りこむどころでもないだろうに）

それどころか十九郎のほうが中途で戦線離脱ともなりかねない。冗談ではすまなかった。斎伽忍が失われた現在、彼の指揮下にあるべきだった術者たちの采配は、誰かがなんらかのかたちで代行しなければならないのだ。その役目が自分のものでしかありえないことも、望みもしないのに十九郎には見えてしまう。

上着の内側から煙草の箱をとりだし、壁にもたれたまま一本ぬきとって十九郎は火をつけた。希沙良あたりにはあまり見せたくない姿だ。あの従弟は煙の匂いが嫌いだから……。

（覚悟しておけ、だって？）

ふと、十九郎は両眼を細める。

まだ残っている。喉元に――思いきりつかまれた、その掌の感触なら。

どうやって希沙良はひとりで、あんな結論までたどりついてしまえたのだろう。

本当にわかっているのだろうか？　彼自身の言っていることが、それがどういうことなのか

……正しい意味を。

（歯止めがきかなくなるんだよ、希沙良）

いつか。

これから先に。自分たちに未来があるとしたら、その未来をさらに進めた場所に。

（目茶苦茶になるんだよ……。きっと、おまえは……俺のせいで）

それでも——それでもかまわないと、彼が言うのなら、自分は……。

「……俺は」

裁く神が本当にいるとしたら、いくら懺悔しても足りない。けれどそう承知のうえでなお求めずにいられない存在なら、罰されてもなお得るだけの価値がそこにあるなら……。

（そのためなら、自尊心なんて捨てられる。いつでも）

遠野一真の指摘は間違っていない。

それはすでに自分のエゴにすぎない。理屈も論理も関係ない。自分はただ、共に求めずにいられないのだ。どちらも手放せずにいるだけだ。

伽羅王も。

一対をなすべくして生まれついた相手のことも。

（どちらも択る——両方だ）

半ばまで火の進んだ煙草を足元に落とし、十九郎は靴の底でそれを踏み潰す。

ごまかしなど、もう通用しない。誰もが今は、偽りのない立場でしか動けない。

壁際から身を起こし、しっかりと両足で立つことを自らに命令して、十九郎は閉ざされた黒い扉に手をのばした。現在の自分自身の目的のために何が必要で何をするべきなのか、十九郎はいやというほど知っていたのだ。

＊　＊　＊

「水沢」

呼びかけの声は、初め、水沢諒の耳には届いていなかった。

ちょうど十九郎が部屋に戻ったとき、諒は斎伽忍の身体を――〈雷将〉勝呂に言わせるなら『抜け殻』を――両腕に抱えあげたところだった。

長身の彼の腕のなかに、意外なほどたやすく、斎伽忍の華奢な身体はおさまってしまうようだった。やわらかい漆黒の髪が宙に浮きあがるのを、十九郎は無言で見てとった。

「水沢……？」

「いつまでもこのままじゃあんまりだと思いませんか」

どうするつもりなのかと言外に問いかけた十九郎に、諒はそんな返答をよこした。あっさりした声で。

「いつまた例の鷹木文彦氏みたいなお客さんが来るかもわからないし……そうでなくたって、部屋のど真ん中にこんなもの飾っとくのも悪趣味ってやつじゃありませんか、里見さん……違いますか？」

話しながら、すでに諒の足は奥の扉に向かっている。

寝室へ運ぶ気だ。十九郎はそれを悟り、ゆっくりと歩を進めて諒のあとにつづいた。

「そうだな、水沢の言うとおりだ」

「……だけど変な感じがするな……俺はね、人間ってのはこんな死に方をするもんじゃないと思ってて……」

暗い通路をくぐりぬけ、諒は独白のように呟く。

「人間ってのは死んだら最後、あとは土くれみたいなもので……のこるのは、気味の悪い象りっていうか……意味がない細胞の塊みたいなものだけが放りだされてるもんだと……。つまり、残骸は朽ちはてるのみっていうか、それはひどく醜い姿のはずで……。待てよ、おかしいな、なんだか詩的なことを言っているな俺は……」

「俺が聞いているよ。……それで？」

十九郎はそっと促してやる。

「ああ、それで……そう、それなのにこいつは、どういうわけかこいつは……触ってみれば立派に冷たくて、心臓も動いちゃいないし、息もしてないってのに……だけど、こうやって抱い

てやるとまだ本物みたいに柔らかいし、顔色がよろしくないのも相変わらずで、やたらめったら軽すぎるところも変わっちゃいないもんだから俺はもっと食って体重増やせ馬鹿野郎なんて叱りたくなるし……わからなくなるんだ、俺には……本当に、何がなんだかわからなくなるんですよ……」

「……」

わずかに眉をひそめながらそれを聞き、彼が立ちどまるのにあわせて十九郎も足を止めた。小さな、ほとんど殺風景というべき寝室で、あまり使われていなかったと思われるベッドのうえに諒は斎伽忍の身体をおろす。

安置、という表現が十九郎の脳裏には浮かんだが、あえて口にするようなことでもなかった。

そう……今は、水沢諒の前においては。

「水沢、それはこういうことだ」

論旨を頭の内で組み立てたうえで、十九郎は口をひらいた。

「イメージが合わないのはあたりまえだ。水沢だって聞いていたはずだ……これは本当の『死』とは違うものだ。俺たちは、普通の物差しでこの人を計ってはいけないことを忘れている……。〈雷将〉勝呂が言っていたとおりに事実が運んでいるのなら、水沢が被せようとしている『死』のイメージは、この場合にはあてはまらない」

「……変だな、里見さんまで言ってることがおかしくなってきてませんか」

諒はぎこちなく笑って結論をはぐらかしただけだった。……彼が、思った以上に深刻な痛手を――精神的に――抱えていることを、十九郎は認識せざるをえなかった。

このまま彼があてどなく笑いつづけたりしたら、それこそ危険信号だ。そんな自分自身のくだらない予測能力そのものに疲労を覚えながら、十九郎は無理やり苦い言葉をつむぎだす。

「とりあえず俺は正気だよ、今はまだ……腹が立つくらいにね……」

「その言いまわしってば、まるでどこかの誰かさんみたいな……。知らなかった、里見さんがそういう喋り方をすると忍にそっくりになるんですね」

――そんなことにまで水沢諒の許可を得なければならないのか!?

十九郎がそのとき呑みこんだものは、本質的な怒りに近い。

だが当の本人にはかかわりのない怒りだ。決して直にあらわれてはならない、理屈にあわない感情だ。

「それは多分、影響くらい受けているんだろう、当然……」

「里見さんはこいつみたいになりたかったわけですか」

「……人を尊敬するというのは、そういうことでもあるんじゃないのか?」

「なるほど……。ああ、でも、忍もきっとそれは本望だっただろうな、もともと里見さんにはそれだけの素養と能力がありますからね……」

斎伽忍の影響を受けられるだけの素養と能力？

（慰めの言葉にはならないな）

冷ややかに十九郎は考えるが、まともに答えていたら会話がはてしなく空転しつづけることもわかっていた。

本当に……状況判断をすっかり狂わせてまで、自分自身をどこかに置き忘れてまで水沢諒がショックに陥ちこみたいのなら、それはそれで仕方がないのだ。彼がどこまで失調しようと彼の自由だ。もはや崎谷亮介の手に負えないのも、ここまで状態がひどければ道理というものだ。……しかしその『道理』をうごかすことこそが、今の十九郎の役目だった。

「君の口から、そんな言葉を聞けるとは思わなかったな」

おもむろに、十九郎は話の方角を変化させた。

「期待されていたのは君だろう、水沢。いつだって君のほうだ、知らなかったのか？　俺は君に言ったはずだ、君は初めからイレギュラーだった……『計算外』だったんだ。この意味がわからなかったのか？」

「……」

わざと本筋をそらしていくような諒の返答は、このときだけは沈黙にとってかわられた。

十九郎の指摘には、彼を黙らせるに足る真理が含まれていたということだ。どこかに、なんらかのかたちで。

「案の定だな……。君があたりまえに受けとめている君自身の立場がどれだけ特殊な条件下にあるのか、少しも考えてみなかったんだろう。俺は水沢と出会ってからはあまり長くないけれど、水沢の『雇用主』にあたる人のことは君よりも昔から知っているつもりだ。そして俺には疑問がひとつある……崎谷君が現れるまで、俺は君の存在について、斎伽忍という人の口から一言の説明も聞かされたことがない……。それが遠因となって実際に同士討ちがおこったにもかかわらずだ。俺の言っている意味がわかるか？」

「……」

「勿論、本家方では、君のことは多少の噂くらいにはなっただろう。それでも君が承認も排斥もされずにいたのは、なりゆきとしては不自然だ。君がずっと、巧妙なやりかたで保護されていたということだ。それは結局、どこにも組み込まれていない状態の水沢こそが重要だったからだと俺は思っている」

いかなる勢力にとっての重要性でもない。

――あくまで、個人である斎伽忍にとって、だ。

「君はどんな立場にも属さないで、ただ君が必要だと判断したとおりに動く。血のしがらみも、一族の問題も、名誉欲やプライドも、歴史や前世や過去のことも、なにもかも水沢には関係ない。破格なんだ。だからこそ君の存在には意味がある。……それを守るためなら、いくらでも秘密主義を貫いたということだ……ここにいる、この人は」

「……」

「君がその立場にのっとって現在の方針を選んでいるなら、俺にはなにも言う資格がない。俺自身はどうあがいても、決まった枠の内側でしか動けない人間だと知っているからね……。俺が水沢にかなわなかったのは、そういうことなんだ」

たたみかけるように、十九郎は一気にそこまで語り尽くした。

少なからず、それらの言葉は刺激剤として水沢諒の内側にまで届いたはずだった。不安定だった彼の視線がまっすぐにこちらを向き、まともに焦点を結ぶ過程を、十九郎はあくまで冷静に観察していた。

「……里見さん、それはつまり……」

「俺が嬉々としてこんな話をしているとだけは思わないでくれ。俺は君が望むほど優しい人間でもないし、俺には俺の都合があるからこそ言いたくもないことを言っているんだ」

その視線を振りきりたい衝動にかられながら、つきはなす口調で十九郎は釘をさす。

「けれど君が今、なにかを見落としているとしたら、それに気付けるのは君だけだ」

「……」

「ひとつ……俺は俺で考えていることを言おうか？　俺なりにね。……俺の頭の中では、パズルのかけらがまだ全部そろっていない。欠けている部分があるんだ。今、進んでいる事態には、はっきり計算されていない要素がある。〈雷将〉勝呂も説明していかなかった……いや、

おそらく説明できなかったことだ。何だと思う？」

「……本家の動きですか」

「違う。あとふたりいるはずの『将軍』の動向だ」

すらりと十九郎は答えてみせた。諒がふと目を瞠ったのは、そのときだった。

「勝呂が俺たちにまであんな取引をもちかけてくるのは、将軍とはいえ今の勝呂は孤立無援でいるからだと思う。俺たちはあとふたりの将軍を知っている。九那妃の復活がかかっている、この重要なときに、彼らがまったく動かずにいると考えるほうが不自然じゃないのか？　……そしてあのふたりがこちらに都合よく動くとはかぎらないだろう」

「むしろ面倒なほうに……？」

「ただでさえ混乱している状態だ、それぞれの思惑がどう転んでも、敵味方の関係は簡単にくずれるものだと覚悟しておいたほうがいい」

すべての動きを統制する『神』は、今はどこにもいないのだ。

さらに〈炎将〉刻司も、〈幻将〉皓も、かつて斎伽忍を敵にまわし辛酸をなめたものたちだった。その経験を下敷きに、彼らがどう動こうとするかは……。

「まだなにもわからない。ただ肝心なのは、それでももう崎谷君たちは動き出してしまっているということだ。とても目立つかたちでね」

ここまで材料を与えれば充分だった。

もともと水沢諒という人物は、十九郎の知るかぎり、亮介や冴子が危険にさらされていると教えられてそれを無視していられるはずがないのだ。

そして希沙良と同じような戦い方は、水沢諒には必要ない。水沢諒でしかなしえない役目というものがあるからだ。

「どうする？　君が走りだすつもりなら、俺が走らせる側をひきうけてもいい。ただし、俺がこんなことを言えるのは今だけだ」

考えている余裕も、許してやるわけにはいかなかった。

今だ。

この機会をのがしたら水沢諒の存在はもう、布陣から切り離して考えるしかない。

十九郎にはそれだけの覚悟があった。諒に対する諦めというより、自分自身の資質に否定的結論を出すしかないということだ。

斎伽忍であれば走らせられるものが、自分には不可能であると、ただ、そう思い知らされるだけだ。

「……」

数秒間、諒は無言を保っていた。選択の岐路に立たされていることは確かだった。

少なくとも、即座に背を向けてあらゆる戦いから遠ざかってしまえるほど、彼の精神は孤独になれないのだ。

迷わざるをえない程度には。

辛抱強く、十九郎はその返答を待った。両腕を組みあわせ、身じろぎもせず、じっと彼は水沢諒の反応を待ちうけていた。……それによって彼自身、審判をうけるというように。

実際に消費された時間そのものは、ごく短いものであっただろう。

心理的には、それはひどく長い空白だった。双方にとって、それぞれに重い瞬間だった。

「なら、里見さん……聞いてもらえますか」

やがてそんな風に、諒が口をひらいた。ゆっくりと、そこにいる里見十九郎を正面から見据えるようにしながら。

十九郎は表情をゆるがせることもなく、それを聞いた。はじめから通しつづけている冷静な態度に、微塵の傷もつけずに。

……これからの彼らふたりの命運をさだめるであろう、その結論を。

――つづく――

『天冥の剣』第三回緊急対談

《里見十九郎・神原亜衣編》

（作者注・もはや何も申しません……とほほほほほほ）

神原亜衣「と、いうことで、恒例の……」

里見十九郎「対談です。ああ、神原さん、わざわざ時間外労働につきあってもらって申し訳ないけれど」

神原「いいえっ、里見さんこそ御苦労様です。あたしのほうはまだいいんですけど。本編のほうで、ほとんどまったくと言っていいほどっ、出番ありませんから。ふふふ」

里見「いや、要は出ているページ数じゃなくてインパクトだから」

神原「そう言いつつ作者にプレッシャーかけてるでしょ、里見さんの場合」

里見「まさか。プレッシャーっていうのはね、かけていると気付かれずにかけるのが本物なんだよ。だから……なんて、説明すると作者に足元すくわれるからやめよう（笑）」

神原「……奥が深いですねえ」

里見「とりあえず、そういったことは対談が終わったあとで個人的に……若木さんの見ていな

いところで話しあうとして、大切なことを先に、読者の皆さんにお伝えしておかないとね」

神原「里見さんからでいいですよ」

里見「……なにも俺に全部まかせなくたっていいんだよ」

神原「いいえ、こういうことは里見さんがいちばんの適任ですから！　ほら、きっと読んでいる皆さんも、今頃かたずをのんで里見さんを見守ってますから。ねっ」

里見「君ねぇ……。（咳払いひとつ）じゃあここで、作者を代弁して、俺の口から、読者の皆さん及び関係者の方々に、深くお詫びしなければならないことをいくつか述べさせていただくということで……」

神原「……（神妙に頷く）」

里見「まずは三巻の発売日の件ですが……ラインナップに発表された後にもかかわらず発売を一か月遅らせてしまったこと、それにより各方面に多大な混乱、ショック、心痛、落胆、怒り、憤り、心配、その他さまざまな波紋を呼びおこし、たいへんなご迷惑をおかけしてしまったことを、あわせてお詫び申し上げます」

神原「本当に申し訳ありませんでした……」

里見「それから、さらに、これまで『天冥の剣』は全三冊で完結するだろうとお知らせしてきたわけですが、ご覧のとおり、『天冥篇』は到底一冊にはおさまらないことが判明し、物語は四巻へとつづきます。お約束が守れなかったことを、ここに重ねてお詫びいたします」

神原「作者はひきつづき四巻を鋭意執筆中ですので、もうしばらくだけお待ちいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします」

里見「なんでも一時は『三巻を前後編にわける』なんて話もあったんだけどね、結局、いさぎよく『四巻』を出すことにしたらしい」

神原「まあ……それはそうですよね……。だってもし、もしもですけど、四冊目で終わらなかったらそれこそ大変なことになっちゃうんじゃ……」

里見「さすがにそこまでは……。大丈夫、絶対に四冊目でおさまるよ、俺がそう期待しているからね……聞こえたかな、俺は何も言わずに信頼していますからね、若木さん」

神原「ああなるほど、そう持っていけばいいんですね（ポンと手を打つ）。若木先生、あたしも心の底から信じていますから、なにも心配なさらずに書いていてくださいね。もちろん若木さんが身にしみてわかっていることは、言うまでもありませんものね。まさかわかってないってことはありえませんから、当然ですよね。ええ、大丈夫に違いありません、ちゃんとあたしは知ってますから、ね。ふふふ。……だいたいこんなものですか？　里見さん」

里見「そうだね、それくらい言っておけばいやでも効いてるよ」

神原「最初から崎谷君たちもこの方針でいってればよかったのにね」

里見「人には向き不向きがあるからね。……それにしても気が合うみたいだね、我々のとりあわせだと」

神原「こんなに和やかに対談が進んでるのって珍しいですよね」

里見「若木さんは、前回の二回分だけで対談を終わらせたがっていたんだけど、どうしてそんなことを考えたんだろうね」

神原「あら、どうしてかしら、謎だわ……」

☆

神原「それにしても今回も若木さんがあとがきを書いてくれないものだから、かわりに読者の皆さんにお知らせしなきゃならないことが山積みになってて……この分だとあたしたち、雑談してる暇がないんじゃないかしら……。実はちょっと、せっかくの機会だから里見さんにお訊きしたいことなんかがあるんですけど」

里見「早めにお知らせをすませて、なるべく後ろに時間を残せばいいんじゃないかな。あとの運びは神原さんにまかせるから、どうぞ」

神原「いいんですか？　それじゃ、今年のバレンタインの結果発表からいきますね」

里見「……いきなりその話？（苦笑）」

神原「あっ、やっぱりこういう結果って、当人にとっては複雑なものなんですか？」

里見「複雑って……。いや、そうでもないけど……あえて言うなら、有り難さと申し訳なさが

並び立つ感じかな」

神原「……『有り難さ』はわかるんですけど……その『申し訳なさ』って、誰に対して思うんですか？」

里見「それはまあ、いろいろと。立派なものをいただいても何もお返しができないと思うと、心苦しいしね……」

神原「つまり特定の相手に申し訳なく思うわけじゃなくて？」

里見「特定って……。それはもちろん、崎谷君あたりならそういう発想もするだろうけど、俺はね……。いや、やめよう、この問題を追及するのは。そのほうが平和だから（笑）」

神原「あたしは別に平和じゃなくてもいいんですけど。まあ今はいいです。それでは一九九三年のバレンタインにいただいたチョコレートやプレゼントの数を、あくまで贈られた方の宛て名どおりに厳正に集計した結果の順位を、ここに発表します。

一位　水沢諒　90票
二位　和泉希沙良　77票
三位　里見十九郎　74票
四位　斎伽忍　54票
五位　若木未生　47票
六位　崎谷亮介　27票

七位　叶省吾　13票
八位　イズミ　12票
同点九位　牙、七瀬冴子　8票

以下、十一位・渡辺拓己、シグマ（7）、十三位・早水京平、早水真砂（6）、十五位・ザザ、来生閃（5）、十七位・如月士郎（4）、十八位・来生貢、師英介（3）、二十位・来生あきら、来生衛、ガディス、ゼロ、里見夏江（2）、二十五位・神原亜衣、松島周、山岸部長、剣司、鷹木文彦（1）……という結果となりました。皆さんどうもありがとうございました！」

里見「本当にありがとう。それから、ご苦労様でした」

神原「でも里見さんは、今年はちょっと残念でしたよね……三票差で、それも集計が終わる間際になって強引に逆転されちゃって」

里見「いや、とんでもないよ。自分がこんなに大勢の人から応援されていることのほうが不思議だから、俺にとっては」

神原「とことん謙虚な人なんですね」

里見「そんなことはないよ、外面がよくて誤解されているだけらしいから」

神原「……もしかして拗ねてたんですか？　それって……」

☆

神原「じゃあ今度は漫画のほうに話題を移しますけど。こちらはもう、里見さんの守備範囲だからおまかせするとして」

里見「そんな、他人事みたいに言ってられないんだよ、君も……（笑）。でも確かに俺からも、読者の人たちには、実際、なにかのかたちでお礼を言いたかったから……。漫画版のオーラバスターには本当に大きな反響をよせていただけて、出演者のひとりとして、とても嬉しく思っています。どうもありがとうございました。『十戒』はこの夏には単行本になりますので、雑誌で読みのがしたという方も、もちろん連載中に読んでいてくださった方も、ぜひ手にとってみてください。七月十九日、発売です」

神原「雑誌掲載は白泉社の『ララ』、単行本は同じく白泉社の『花とゆめコミックス』です。読者の皆さんはもうご存じだと思いますが、念のため」

里見「おかげさまで、その後、アンコール企画として『アニバーサリー』がすぐ漫画になってね……。で、そうなったら次はいよいよ、本来の主役が出てこないとね……」

神原「そんなことになればいいなあと期待はしてましたけど、本当に実現するとまでは思っていなかったです、あたし……」

里見「それを可能にする力がオーラバスターの読者にはあるということなんじゃないかな。それは誇るべきことだと俺は思うよ。……そんなわけで、『天使はうまく踊れない』がララ八月号（六月二十四日発売）から連載されます。もう間もなくだから、お見逃しのないように」

神原「いちばん大忙しなのは杜真琴先生ですよね……。お身体だけは大切にして、頑張ってくださいね♥」

里見「とりあえず原作者のほうは、過去に書いたものにはあえて加筆や訂正はしないで、アレンジはすべて杜さんにまかせる方針らしいから、この原作者様にはさっさと『天冥』の四巻を進めてもらうということで、他に問題はなにもないね」

神原「そうですよね、若木さんには大急ぎで四巻さえ書いてもらえれば、なにも問題はないんですよね。ねっ若木さん♥」

☆

里見「少し殺気立ってきたかな（笑）。敵の目を攪乱（かくらん）したほうがいいよ」

神原「そしたらやっぱりこの話題ですね。――すでに雑誌などでご存じの方もいらっしゃるでしょうが、ハイスクール・オーラバスターのイメージアルバムが、この夏、パイオニアLDCから発売されます。初のイメージアルバムということで、作者本人が本腰を入れて、企画段階

からかなり我が儘をとおして作ってもらったものなので、ぜひ聴いてみていただきたいとのことです。……もともと若木さん、音楽ものが好きですからね……」

里見「ミーハーを自称するわりには、音のクオリティにはうるさいしね」

神原「楽曲は、元グラスバレーのキーボード奏者・本田恭之さんと、フェンスオブディフェンスのボーカル（兼ベース兼シンセサイザー担当のマルチプレイヤー）西村麻聡さんが、それぞれ四曲ずつ提供してくださってます。発売予定日は七月二十四日。もちろんCDのジャケットは杜真琴さんのかきおろしイラストです。今、この対談をやっている時点では、ちょうど製作途中で、まだアルバム全体の完成形は見えてないんですけどね」

里見「でも凄い人たちに曲を書いてもらえて、すでに作者は幸福に酔いしれているようだし、この分なら心配ないよ。なにしろ希望したとおりのアーティストがふたりとも揃ってしまったから……あの人はしばらく夢見心地から降りてこないと俺は読んでいる（笑）」

神原「ですよね。舞いあがってますよね、雲の彼方に行ってるもの、一気に」

里見「なんにしても……オーラバスターという世界のイメージを狭めないように、とても慎重かつ大胆に製作しているアルバムだから、いいかたちで皆さんに届けられることを俺としても祈っています。できあがりを楽しみに待っているという感じだね、今は」

神原「完成したアルバムについては、四巻のあとがきで、作者本人がコメントしてくれるでしょうから……って、えっ、今度こそ『あとがき』ありますよね!?　いくらなんでも」

里見「まあ、自称『あとがき大好き作家』としては、そろそろ禁断症状に泣いているはずだからね、乞う御期待、と言っておいていいと思うよ」

☆

神原「こんなところで、お知らせはひととおり終わり……ですね」

里見「そうだね、だいたい、急ぎの話題はこれくらいで。……それで？　なにか質問があったんだったよね、俺に」

神原「ええ、いいですか？　実は……これって、知りたいのはあたしだけじゃなくて、けっこう大勢の人が若木さんあてにお手紙で訊いてくることらしくて、だから里見さんのファンの人たちを代表して、ここで真相に迫りたいと……」

里見「なんだか重大な問題みたいだね。いいよ、ちゃんと答えられるよう努力するから」

神原「重大っていうか……。里見さんの女性関係についてなんですけど」

里見「女性関係……（言葉を失う）。凄い言いまわしだね、それは……」

神原「（おそるおそる）やっぱり訊いたらまずいことなんでしょうか……？」

里見「……いや、別に、まあ……普通のことだし……。必要ならば、いずれは、なんらかの機会にわかることだし……」

神原「あの……オーラバスターの本もこれで九冊目になりますよね。もう他のメインキャラの人たちは、だいたい恋愛的な部分とか、背景とか、そういうものが少しくらいは読者の皆さんにも見えてきているんですけど、里見さんにかぎってはその手の話題がまったく出ないものだから……実はしっかり特定の恋人がいるのに隠してるんじゃないのかとか、秘密の婚約者がいるかもしれないとか、今は憶測だけがとびかってて、みんなひそかに気にしているみたいなんです」

里見「憶測ね……。でも……たとえば神原さんはこうやって実際に俺を知っているわけで、俺の行動パターンなんかもある程度、把握しているんだから……なんとなく伝わったりしないのかな、そのあたりのことは……」

神原「だからね、里見さんって一般にはフェミニストだと思われているでしょ。紳士的なうえに、一度インプットした情報は絶対に捨てないから、あたしの家の場所や電話番号すらきちんと憶えていてくださるけど、でもその対応の仕方って相手が崎谷君でも同じだから、そうすると里見さんの態度は女性優先っていうよりはあらゆる他人を優先している気もするし……つまり今の里見さんにとっては、あまり『女の子』って重要じゃないみたい。おまけに忙しすぎる人だから、これで『彼女』がいるとしたら、そんな相手には最大限に優しくするはずの里見さんには時間が足りないだろうとも思うし……。そういう風に考えると、あたしの中では、どちらかというと簡単に答えが出ちゃうんですけど」

里見「うん、非のうちどころもなくそれが正解だよ。さすが神原さんだと俺は思うけれど……それでどうして納得できないんだろう？」

神原「これだから、もう……あたりまえでしょ？　里見さんみたいによくできた人が独り身でいるほうがおかしいんでしょ!?　それくらい誰だって勘ぐりたくなるでしょう、絶対ね」

里見「おだてても何も出ないよ（笑）」

神原「……でも里見さんの好きなタイプって、年上の女性じゃないのかな。そんな気がする」

里見「ああ、当たってるかもしれないな、それは」

神原「里見さんって恋愛も勉強みたいに考えていそうだから、なるべくハイレベルで、世の中を知っているタイプが理想じゃないかと思って。適度に振り回してくれて、知的で、いろいろと鍛えてくれそうな人？　里見さんの相手に、それは年下じゃ無理かもって」

里見「なるほどね、凄いな……実際、それは非常に正しい解釈で……そういう恋愛観をもっていた時期もあるんだけど、なんにしても今は恋愛どころじゃないっていうのが本音かな。それよりもっと大きい問題が目の前にあるものだから、とても他にエネルギーをさいていられないというか……」

神原「結局、今は全然、特定の人なんかいないってことですね」

里見「今はいません」

神原「ということは、じゃあ、昔はなにかドラマがあったかもしれないと思っていてもいいん

ですよね？」

里見「そんなもの誰も期待していないから、いいんだよ、放っておけば」

神原「ということは本当にあったんですね？　あっ、なんだか安心したみたい、あたし」

里見「安心って……まるで俺を冷血動物みたいに（苦笑）。つまり俺はね……いや、もうやめよう、このあたりで」

神原「えっ、やっぱり何か問題があるんですか」

里見「そうじゃなくて、時間切れになるから（笑）」

神原「ええっ、あたしとしたことが……。いやだわ、タイミングはかっていたんでしょ、里見さんは……」

里見「そこまで器用じゃないよ、俺は」

神原「わかりました、仕方ないから。真相はまたいずれの機会に、ぜひ明らかにしてくださいね。あたし気長に待ってますんで」

里見「いいよ（笑）。さて、作者になりかわってメッセージをいくつかお伝えしておかないと……。まずは神原さんからどうぞ」

神原「はい、ええと、いつもいつも読者の皆さんにご迷惑ばかりかけている作者あてに、にもかかわらず見捨てることもなく叱咤激励のお手紙を書いてくださっている心優しい方々、本当にありがとうございます。これからも、ご意見、ご感想、ご叱責、ご質問、その他もろもろ、

心向くままのおたよりをお待ちしています。すべての方に必ずお返事ペーパーをお送りしていますが、住所と名前のわからないお手紙が相変わらず多いようです。間違いなく返事が欲しいという方はなるべく、宛て名にご自分の住所と氏名を書き六十二円切手を貼った返信用封筒を同封してください。返信用封筒があると早めにお返事が送れますので、できるだけご協力ください。あっ、でも、どうしても無理でしたらかまいませんから」

里見「今回の執筆にあたっても、要領の悪い作者に、相変わらずのお力添えをくださった方々、ありがとうございました。特にT杉M子さま、作者同様に里見十九郎を忌み嫌って（笑）いらっしゃるあなたには俺からの愛を（笑）贈らせていただきます。それから点子さま、このうえもなく的をついた数々の助言と多大なるご尽力、心から感謝しています。おかげさまで里見十九郎はこのとおりです……このとおりって何なんだろう（笑）。そして俺と同じく天秤座A型の榎木洋子さま、俺からのメッセージだけは欲しくないとおっしゃっていた榎木洋子さま、俺は心優しいあなたのことが大好きです。……逃げても無駄ですよ（にっこり）」

神原「……ご愁傷様です……。それでは皆さん、あたしたちはこのあたりでお別れです」

里見「四巻でお会いできれば幸いです。それまで、どうぞお元気で。さようなら」

第三回緊急対談・おわり

わかぎ・みお

1968年12月２日、埼玉県生まれ、都内在住。射手座、A型。1989年４月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。ドラムを習う意志を固めたはいいが腰痛に苦しみ、いまだに望みを果たしていない。一方、やっとファミコンを始めたはいいが「勇者たくみ」のあまりの弱さに呆れはて、いまだにひとつも終わらせていない。やはり「勇者しょうご」にするべきだったのか……。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ(前編)(後編)』『エクサール騎士団1、2』『XAZSA Ver. 1～2』『天冥の剣1、2』などがある。

天冥の剣3

COBALT-SERIES

1993年６月10日　第１刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

〒101－50
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
(3230) ６２６８(編集)
電話　東京 (3230) ６３９３(販売)
(3230) ６０８０(制作)

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1993
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611752-5 C0193

コバルト文庫

〈好評発売中〉



天使はうまく踊れない

高一生の亮介のまわりに、奇妙な奴らが現れはじめた…。

セイレーンの聖母

十九郎が狙われた！ とてつもない妖力に忍は。

十字架の少女

諒の妹・彩を迎えて、亮介たちは軽井沢で合宿を。

迷える羊に愛の手を

転校先での諒の生活は!? オムニバス形式の番外編。

炎獄のディアーナ〈前編〉〈後編〉

女の子を狙う髪切り事件の背後に、恐るべき妖者が！

天冥の剣 1 2

吸血鬼殺人とよばれる通り魔事件に、希沙良と諒は…。

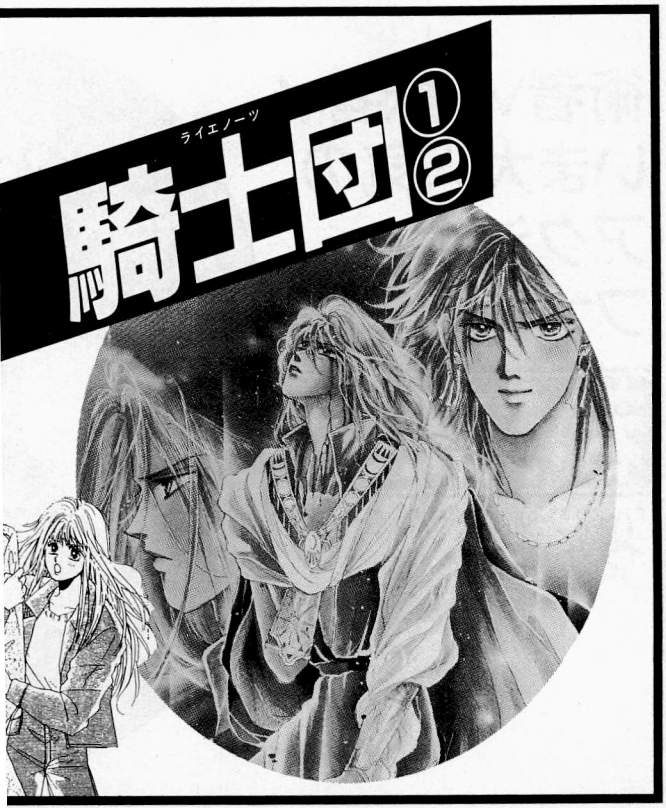
術者VS妖者！
いま大人気の
アクション・
ファンタジー。



若木未生の本

「ハイスクール・オーラバスター」
イラスト/杜 真琴

コバルト文庫
〈好評発売中〉



私はレア、多元界の
因果力(エール)を制御する者―。
アクション・ファンタジー！

エクサール



若木未生　イラスト／羽音こうき

来生(きすぎ)あきら、14歳。彼女の真の姿は、異次元の
〈琅月界(ろうげつかい)〉からやってきた巫女〈エクサール〉なのだ…。

コバルト文庫
〈好評発売中〉

夢みる機械人間（マシノイド）！



夜の銀座の街角で、休業中のギタリスト早水京平が偶然に出会った少年・ザザ。不思議な魅力をもつ彼は、天才少女・優亜（ゆあ）によって作られた国家機密級（トップシークレット）の機械人間（マシノイド）だった！ ひとつの大きな夢のために、人間になろうと保護下をとびだしたザザは、事件に…。人気のシティサイバーファンタジー。

僕はザザ——。人間を

XAZSA（ザザ）

ver.①②



若木未生
イラスト／田村純子

コバルト ノベル大賞 募集中!

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後(400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下)を、お待ちしております。

〈入　選　作〉**正賞の盾と副賞100万円**
〈佳　　作〉**正賞の盾と副賞 50万円**
〈コバルト読者大賞〉**正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「Cobalt」に毎号掲載されています。

人気作家の最新作が一気に読める夢♡小説誌!

コバルト **Cobalt**

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売!

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート ショート」を毎号募集しています。